

川柳塔

昭和六十一年十月二十五日印刷
昭和六十一年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷七一四号



日川協加盟

No. 714

十一月号

社 告

昭和62年1月号誌上から

女性コーナー「茴香の花」欄を新設します。

振ってご応募下さい。

選 者 小 出 智 子 (昭和62年度)

八 木 千 代 (昭和63年度)

投句規定

☆ハガキに雑詠3句、住所氏名明記

☆女性作家に限る

☆昭和61年11月10日締切り (第1回)

以後毎月10日に締切ります

寄投句先 〒594 大阪市生野区勝山南1丁目18-10

小 出 智 子 宛

川 柳 塔 社

料理がいきる
辛口の本格派



伝統の味を贈りものに……

菊正宗

神戸・灘

菊正宗酒造株式会社

日本酒で乾杯!

茴香の花

西尾 葉

十月号の社告に、女性コーナー「茴香の花」欄新設のことが掲載された。

一昨年にも本年も路郎賞、川柳塔賞の獲得は、すべて女性であったことと、同人吟の川柳塔並に誌友の水煙抄の巻頭が、又しても女性の方であることなどを思考して、薫風さんその他の方々と相談をして、素晴らしい女性の進歩に、この際女性コーナーを設けて、女性の益々の発展伸長を希望して、応募者は女性に限るということで新設を見た。

それで命名のことにふれて、色々検討された。「沙羅の花」という名前も上った。が、水煙抄(塔の九輪の上部にある火焰の形の飾り、火焰は火事を連想するから避けて「水煙」という)、愛染帖(煩惱)も愛染明王の略で共に仏教に關した言葉であるので、沙羅(梵語)もま

た抹香臭いから、外に良い名前がないものかと相談したが、あれもありふれている、これも気取りすぎ、と仲々埒があかず、最後に私に一任された。一任されてやっと思いついたのが茴香の花である。

この字を「ういきょう」と読む人が何人あるかということで一悶着起りそうだった。が、迷うていはきりがないので、これにきまったのである。花自体は派手ではないが、芳香のある奥床しい花であ

る。出典は、与謝野晶子の

恋人の逢うが短かき

夜となりぬ

茴香の花 橘の花

という短歌からである。

選者は一年交替で、小出智子さんと八木千代さんの、油ののった大ベテランである。

どうぞ「茴香の花」の素晴らしい発展を祈ってペンをおく。

口 答 え 一 つ 失 う 耳 飾 り

信 貴 の 影 ふ み つ つ ゆ け り 時 雨 の 忌

野 じ ま い の 煙 サ ラ リー マ ン は 今 帰 る

か くれ 家 に ポ ケ ッ ト ベ ル が 鳴 り ひ び く

玉 葱 の 渦 に 泪 の 嫂 と 居 る

座右の句

こおろぎのように泣けたら涅槃かな

(薫風)

私の句

ことばの木植えて子どもの帰り待つ

さえきやえ

川柳塔 十一月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

茴香の花……………

西尾 葉……………(1)

シャネルの5番……………

小林 一夫……………(2)

川柳塔(同人吟)……………

西尾 葉選……………(4)

自選集……………

東野 大八……………(28)

■川柳太平記(102) 川柳の群像 吉田機司……………

東野 大八……………(32)

■連載 誹風柳多留廿六篇研究(二十八丁)……………

黒川 紫香選……………(34)

水煙抄……………

玉置 重人……………(36)

秀句鑑賞「同人吟」水煙抄……………

仁部 四郎……………(31)

愛染帖……………

橋高 薫風選……………(54)

■同人アンケート 推敲裏話……………

熊生・伊都・きみえ・寿美子・三男・芳仙・杜の度・田鶴・四郎・諷人……………(58)

シャネルの5番

小林 一夫

シャネルの5番という香水は有名である。マリリン・モンローもつけていたし、漫画「ド根性ガエル」のクニコちゃんもこの香水をつけていた。クニコちゃんというのは「ヒロシ」にサングラスを贈った、ヒロシの初恋の相手である。

ところでそのシャネルの5番だが、私は当然、1、2、3、4番があつての5番なのだろうと思つてゐた。数あるナンバーのうちで、たまたま5番だけが有名になつたのだろうか、と考えていた。

ところがそれが違つた。

シャネルには5番と19番、そしてココ・シャネルという三つの香水しかないという。

これには驚いた。驚いたと同時に何か感慨深いものを感じた。

この話は最近、香水に詳しい女性の友人から聞いたのだが、彼女はシャネルの創始者「ココ・シャネル」の伝記漫画のページをパラパラと繰りながら「ほら、ここにもそう書いてあるでしょう」という。

確かにそう書いてある。一九二〇年、シャネルの第一号香水が誕生した時、ココ・シャネルはそれに「ナンバー5」という名をつけたという。そしてその卓抜なネーミングもココ・シャネル独自の美的感覚を象徴する有名な

北京再見

東野 大八

中国吟行の旅へ1

(61)

正坊・薫風・千代・きみ・笛生・年代・武庫坊・泰子

俳句人口・川柳人口

竹内 紫鏑

初歩教室

阿 萬 萬 的

「紋」

植山 武助選

一路集「他人」

久保 正敏選

「教える」

藤井 二三選

柳界展望

(76)

61年度川柳塔社同人総会

(78)

二賞表彰本社十月句会

(80)

各地柳壇（佳句地10選／春城武庫坊）

(84)

■ 11月各地句会案内

97

■ 編集後記

99

座右の句

最後の最後の味方は妻なりき

（ 栗 ）

私の句

真実を吐けば詛りもついて来る

川 島 諷云児

な話だと書いてある。香水に興味のある女性や香水業界関係の人には有名な話なのだろう。もちろん私はそんなことは知らなかったが、それでもやはりそのネーミングは素晴らしいと思った。

色彩や形状など、視覚的なものはすべてそれを見る人にある種の「感情」を与えるというが、数字にも確かにそういう面がある。たとえばこれは私の勝手な感情なのだが、やはり「5」という数字には、どこか知的で洗練された感じを受ける。1・2・3・4という準備段階があつての5、という感じがあ。他の数字はどうだろう。1という字はどうも見栄っぱりな感じがするし、2は濃厚、3は平等、4はやはり日本人には不吉な感じがする。6は穏やか。7はラッキーで調子が良すぎる。8は鈍感な感じだし、9はどこか昆虫的な感じがする。そして0は無気味である。

私自身、以前から5という数字が好きなので、どうも話がシャネルびいきになってしまふが、「19番」という名にもやはり同じような好感を受ける。「19」という数字は女性の年齢を想起させる。大人になりきっていない大人の女性。その突つ張つた時代と緊張を想像させる。その感じが良い、と思う。友人に勧められて、私は右手に「5番」左手に「19番」をつけてみた。どちらも甘い香りがしたが、19番には少し鋭利な匂いも混じっていた。



西尾 栞 選

弘前市 波多野 五楽庵

八尾市 高杉 鬼遊

シナリオの余韻に浸る白ワイン
トンネルを抜けると母に似た訛り
安楽死だけを願った数珠の音
ヨーソロー拿捕も辞さない眉がある
栄光の汗を仲間が拭いてやり
そこはかと打つはシヨパンかシューマンか
極楽の最前列の遠い事

岡山県 土居 耕花

おふくろの味を英語でマヨネーズ
休んでる仏を寺が来て起こす
ゆっくりと小便をする山の駅
先ず逃げる事から習うあぶら虫
妻の眼を逃れてみれば禁煙車
パチンコの指を閻魔に咎められ
あれも蒔こうこれも蒔こうと母の春

精励恪勤鶴飼かなしや人の世や
花鳥風月ボケツトベルが喧しい
竹林七賢わりかんで酌む安い酒
意気消沈かんと煮にころがない
大義名文わが家に立てる旗がない
一場春夢ミナト・コウベに雨がふる

松原市 谷 垣史好

他愛ないことが楽しい指相撲
指相撲サドになつたりマゾになつたり
男って何だ居酒屋麻雀屋
安吾懐かし生きてることは息苦し
大臣となれば寝言も慎重に
天元に一目置いて旅に出ん

信号待ちゆっくり秋の空を見る
倉敷市 野田 素身郎

もつたいないもつたいないで太る妻

たとえ孫できても抱けぬ後遺症

口下手を無口にさせた後遺症

上手に飲み上手に打って今の地位

ひと言多いその一言が首を締め

十指皆情を持つてゐる鶴を折る

七人の敵のひとりにしてくれぬ

浮き草の自由に惨めな雨が降り

原点に戻って明日を待っている

菩提寺のしじまの中のさるすべり

気弱になった父と久しく酒を酌む

畔に転んだ案山子に言いたい事がある

毒舌を言う真ごころと歩かされ

夜叉になり仏にもなる波の音

振り向けば味方が一人又消える

古き佳き時代を偲ぶ雨に濡れ

まっすぐに歩いて生傷が絶えぬ

日目の鏡を正視できますか

合掌をするためにある二本の手

ひとり居てさむい台詞が多くなる

マンネリ打破ちゃんぽん麵を食べに行く

たいくつな秋へ仮面を買い替える

梓のなかで踊るしかない赤い靴

桜井市

岩本雀踊子

岡山市

嘉数兆代賀

和歌山市

西山幸

和歌山市 福本英子

技芸天の指一本が眩しくて

分量は手加減という母の塩

純白のドレスで波瀾連れてくる

諍った思い出ばかり夫婦窘

三の糸少し強めの妻の秋

他人様がくれる幸せ見失う

幸せな女で数字には暗い

空まわりする情熱をもて余す

過ぎた日の自分をいじめることはない

マンガ字を練習してみる雨の午後

ノンフィクションドラマを秘めた女紋

風の日は風のことはをじつと聞く

生かされて今日の命をいとおしむ

愚痴吐いて吐かれてうれしい老夫婦

愛情のかくしきれないまなじりよ

無為無策どこに男の明日がある

走馬灯亡母と歩いたなみだ道

さよならは言うまいまだ逢う日の為に

街の子に捕られはしない鬼ヤンマ

カタツムリ急いてはことを仕損じる

爪に火を点し保険をかけられる

エビ撒いてここの魚はエビで釣る

兵庫県 遠山可住

大阪市 西出楓楽

大阪市 江城修史

遺産分けいまマンションに住んでいます
ゴルフ場が出来るソロバンはじいてる

松原市 玉置重人

浮気した彼女も僕も入れ歯です

筋書に無かった犬に吠えられる

手の鳴った方は敬遠しておこう

年金の出る日に合わしているリズム

珈琲が香り私の灯がともる

鍵三つ持って歩いて都市砂漠

竹原市 小島蘭幸

誓詞読む終身刑と書いてある

長男にもうかなわないので寝るぞ

妻よ僕と紙ヒコキを飛ばそうよ

不惑かなもうひとり子が欲しくなる

猟銃を持っているので逆らわぬ

弱虫め髭は一気に剃り落とせ

倉敷市 小野克枝

幸せな涙をくれる子の育ち

花嫁の父は泣けない髭がある

適当に貧乏目隠しでも歩け

泣きばくろ付けてタツチのうまい女

苦労性の似た者夫婦になりました

点字這う指を心の灯が照らす

京都市 都倉求芽

始末して始末して雨をくださる夏の神

三十五度六度今日もやっぱり冷や奴

白亜のビルに提灯が要るピアホール

国会で嘘をホントにする話

議員が乗る時赤字など考えぬ

試着室今日も妥協の私語ばかり

島根県 堀江正朗

開腹のベッドへ優し風の声

負けたくはないからお腹切りました

音寄せて風は無縁にしておかぬ

輪の外で動き見つめているもよし

幸せを噛みしめている落花生

妻は口に娘は手にくれる総入れ歯

島根県 堀江芳子

手術する夫よ同体などは嘘

看護婦さん優し七十五のあまえ

お湯の沸く間を付き添いの立話

開腹をしても頑固さ健在で

風呂敷に包む温みを教えられ

萩咲いて亡母思いだす京言葉

米子市 林瑞枝

未来図にときどきは来る青い鳥

謎解きにこれから潜る鍵の穴

白雲の自由を奪うまで仰ぐ

カルチャーで皺が一本ずつ消える

断崖の百合が女として匂う

気に入りの帽子を風に遊ばせる

八尾市 宮西弥生

永住の家となる日へ種を蒔く
海峡を出てから夫婦縫り戻す
父と母仲よく彼岸の亀の池

旅ひとつ重ねて出会い広くする
旅好きな女で狂わず生きている
他人の子を見るとき痛む乳房もつ

近江八幡市 前川 千賀子
秋の蝶大きな月に出会いたり
愛がまだあって小さな嘘もつく

長夜ひとりピカソの女ともなりて
簾巻くことしも寂しい夏でした
気付かない振りで男の付け焼き刃
秋の夜の闇深くする薪能

尼崎市 春城 年代

身の内を走るものあり大法会
突然の死で孤独な方と聞かされる
楚々とした女祇王の前去らず
他人だからとても理解がありそうで
図書館に雲がくれするときもある
ジェラシーと思うでしょうと電話切れ

島根県 北川 民子

Lの腹から笑いゆすりあげ
雑音を聞きすぎました後遺症
薦かずら有刺鉄線など跨ぎ
雨女されど詩集は手放さぬ
サングラスなどは無用の嬉しい日

耳の蓋はずせば皿の割れる音

富田林市 板尾 岳人

中国の旅

悠久浪漫蟻這う如し八達嶺（万里の長城）

三千年歴史が眠る古都躍動（北京市内）

紫禁城黄琉璃瓦に陽が映える（故宮）

断崖絶壁神住む館ぶらさがり（懸空寺）

五穀豊穰祈年殿に神の声（天壇公園）

大同盆地五万一千体神の微笑（大同石窟）

下関市 石川 侃流洞

挑む気はちつとも持たぬ水中花

青い地球どうするつもり核ボタン

親切が仇でかえって数珠を繰る

籠を出て自由の森に餌がない

灯を消して明日も平和を信じ切り

熊本県 有働 芳仙

話しても分らぬ奴と思うて呑み

こんな時蟹になれたら逃げられる

騙された様な気もする後尾灯

世の中が眠ってる間に稼ぐ職

口紅はつけないで逢う仲になり

柳井市 弘津 柳慶

アルバイトが主で大学へ籍を置き

お祭へ祖母の押しずしお酢加減

玄関で待たされ奥の周章よう

父の日に父の和服がよく似合い

悪友にバツタリ出会つた地獄門

東京都 増田次章

残り少ない人生仕事から抜け出せず

敗軍の将は本音をまだ飾り

直言のトゲがささつたまま抜ける

新人類出世主義とは縁を切り

知らぬ方が良いこと多し碧い空

島根県 小砂白汀

お茶の間へ人工ベビーの心臓音

地下足袋へなぜかお金が集まらぬ

大の字に寝ればまああるい星の天

勘定の合わぬ円高さんま焼く

うっかりと笑顔もらした婦長どの

今治市 越智一水

一日を大切にする掌を合わせ

落ちつけと石が教える石の顔

ちちははに隠した恋で夏に傷

手鏡を夫が使う日平和過ぎ

ひとり飲む酒白々と秋なるか

平田市 久家代仕男

言い勝った傲りを論ず帰路の月

ふり向けば秋を病んでる影法師

鬱の日は続いて乾く絵具皿

芒の穂こころも秋じゃおまへんか

生涯をよく啼きました蟬骸

倉吉市 奥谷弘朗

ピカ一の妻を信じている素敵

平凡に生きる平和の鐘を撞く

惚れた眼へなんでも素敵にしてみたい

もつれ糸はぐす根氣を認められ

親しさかやっぱ隣に来て座る

富田林市 岩田美代

母娘ともにぎやかな人阿波踊り

恋のない珈琲ばかりの珈琲通

感情を押える月の蒼さなり

さわやかな歯切れと思う余韻なり

極楽に招待されてからのウツ
堺市 高橋千万子

旅帰り先ず仏だんの花を変え

かも知れぬ話に欲が先走る

もしもしと私を疑う目に出合い

酒の座に移り仏ははっとかれ

ビールからお酒に替る虫の声

大阪市 黒田真砂

函館(二句)

駒ヶ丘目前にして宿の膳(大沼公園)

宝石を散りばめ函館の夜が更ける(函館山)

自己主張しすぎてぬるい生ビール

メロンむく少し疲れた雨の午後

うつの日の時計かわいた音で鳴り

倉敷市 稲田豊作

少し無理すれば古稀々々骨が鳴る

家の嫁急場凌ぎの才に長け
破廉恥な顔に美事な髭がある
仲人が帰り母娘で背伸びする
円満にお年召された笑い皺

米子市 小西雄々

価値観も渴いたままのニュー社党
新薬が欲しい愛妻癌を病む
妻の手を一蓮託生離さない
父母の血を受けた細胞責められぬ
半端者同士まぶしい夢を抱く

伊丹市 檜谷寿馬

転勤のホームに鉄の椅子ひやり
水虫も寂しからずや秋の靴
秋の旅優先坐席を避けていく
秋風に画展の裸婦の白い肌
紙コップ掌にひんやりと秋の旅

呉市 林野甦光

いい秋先取りボタンの穴がゆるみ
一日逃れの街の灯に追われ
鈴虫の声より他へ耳貸さず
この秋は廃校を借りつつわ虫
アメダスの位置が狂った街が涸れ

堺市 中川滋雀

蟬しぐれ生きとし生きている証し
鴉啼く古墳の秋が窓を染め
美しい話いまでも泣けてくる

円高のおこばれ家計簿まだ知らぬ
酔いも辛いも今更言わぬ夫婦箸

大阪市 西森花村

頭数でいこうと老人目の子算
風船の割れる日が来るテロリズム
姓名判断名前変えたら死にました
淋しい日今日はありがと言わなんだ
重役になる迄ボヤかめ心算です

松江市 恒松叮紅

一宿に人情染みている湯舟
征った人還らぬ駅前広場秋
敬老の日電話一つも鳴りもせず
ドアの鍵別々に持つ倦怠期
寝た切りへ覚悟してから持ち直し

松江市 柳楽鶴丸

ダウンして本をゆっくり読めました
ダウンしてこれが本当の俺かいな
定年銀婚動統三十年
遅咲きの太輪これから咲きたら
充電放電毎日赤ランプ

松江市 舟木与根一

ひぐらしの瘧にも触れた粗大ゴミ
ガラスでもイミテーションにある光り
年寄りを馬鹿にしだした稲刈機
裸婦像もあぶらがのつて秋に入る
天ぶらにされて日本語喋りだす

兵庫県 辻 文平

親なればこそその疑似餌にひっかかる
さよならのどんちようだけが派手に降り

真っ直ぐに歩く男の身嗜み

まだ姑の腕に生きてる鯨尺

酒とろりおさえ切れずにいる未練

玉野市 小谷 仙山

子のために下げた頭がはげている

真直ぐな道で地球は落ちつけず

彼岸花小川にメダカもう居ない

口下手な男の嘘がにくめない

絶対を付けてますますうたがわれ

笠岡市 松本 忠三

悪くない僕がどうして謝るの

暑かったただそれだけの夏であり

ここからがわたしの音となる廊下

席譲る若者が居りローカル線

天知る地知るそれだけで終ります

町田市 竹内 紫鏑

孫の花束妻は還暦

名誉教授に似合う甚平

社長室から旧かなのメモ

ビルの車庫から昼の尺八

転勤同士憐れんで賀詞

京都市 松川 杜的

嫌煙権灰皿は僕が洗うてます

電話ではしゃべれぬ妻が横に居る

秋日和保育園には誰も居ず

出囃子で落語家の棺が出る

百歳の香水を欠かさぬおばあさん

竹原市 森井 菁居

農政不在村のレールが錆びている

逃げ道の一つは欲しい四面楚歌

父母に贈る(一句)

鶴が二羽翔ぶ金婚の画布である

トップセールスは新人類かも知れぬ

旅愁とや地酒に平家のロマン浮く

堰原市 岩井 本蔭棒

追い風の中で不善を考える

過熱したコンパへ走る救急車

鑿跡の悲願が疼く磨崖仏

夫人には頭あがらぬ疵をもち

圧勝に謙虚になどと言やよし

鳥取市 両川 洋々

バラよバラ浮気な蝶と仲が良い

黒幕は鬼と親友かも知れぬ

核ボタン正直者に預けよか

棒グラフ正直すぎるから恐い

半生を妻のあやつる糸で舞う

浜田市 中川 幸一

見たところアンバランスで仲が良い

仏壇の前で頑固を懐かしむ

臆病を謙虚な人と誤解され
行く先も知らぬラクダに遠い道
下積みに汚職の誘いかららない

米子市

林

荒介

お隣もとなりも飯を炊く匂い
一枚のキャッシュカードと旅を病む
秋篠寺のほとけを妻に見せに行く
失った時間を探す木の枕
直線を歩いて墓地に突き当る

鳥取県

川崎 秋女

ツクボーシ鳴く夕暮は淋しいナ
失ってそれから愛の重さ知る
喪が明けてすこし笑い戻りかけ
考えてみたら何でもないことサ
そして秋 秋の情に浸り切る

美禰市

安平次 弘道

死んだふりがとても上手な埴輪たち
恋文や角いポストに夢がない
涙腺がゆるむドラマよわが過去よ
補聴器をはずして嫁にさからわず
ひと夏の恋が哀しい法師蟬

名古屋市

越村 枯梢

昼ドラマ妻も女になりたがる
病室の天井にある走馬灯
点滴の雫に思うこと多し
灯明も私の影も揺れている

入れ歯からこぼれる嘘は憎めない

豊中市

安藤 寿美子

ラッキョウを噛み噛み小言聞いている
なるようになるさ鳴け鳴けきりぎりす
せめて水打ってころをこまかそう
掃きよせるゴミは昨日の白芙蓉
準備体操してますおむつ今かえます

大阪市

天正 千梢

一日の栄え朝顔ねむりたり
名をとえば青春と言つてのけ
分裂気味の毎日で自分を育てて来
「計算すくです」野次馬の中に居る
青臭い意見どうと吐いている

大阪市

津守 柳伸

適当に適当にするおつき合い
さりげなく別れる午後のティールーム
その次の言葉に魔法かけてある
なるようになるさ健康だけ取り得
餅は餅屋で映画館でみる映画

西宮市

林 はつ絵

玉葱を吊るして網の目に瘦せる
消しゴムを上手に使う佗びしさよ
切れすぎる菜切り包丁疎まれる
素うどんで言い合う友がいてくれる
温もりを探して群の中にいる

大阪市

本間 満津子

姿見を見たいと思つゝ日もあつて
電話するほどの用事が見つからぬ
化けそうに大きくなる小猫ちゃん
冗談にひそむ本音を読んでいる
触らぬ神とは思えども放つとけず

大阪市 神夏磯 道子

紅芙蓉わたしに欲しい彩で咲く
五十過ぎてあまりに早い芒の穂
祖母の匂い受け継いでいるサロンパス
芋蔓が珍味となつて酒旨し
老けてゆく計算もして夢を買つ

富田林市 藤田 泰子

忘れてはならないことをすぐ忘れ
人知れず片目のだるま抱いている
月光が悔し涙を誘い出す
寛容と言われストレス溜めている
お茶漬で済まし淋しさと虚しさと

富田林市 田形 美緒

本心を見透かされそう月煌々
暖かい招待茶の間に通される
平服で肩身の狭い御招待

正坊さんへ

新妻と見る長城の月満ちて
今日からは影も双つになりました

寝屋川市 稲葉 冬葉
もしやもしやに貯めている宇宙旅行

天高く悪態ついて子が走る
抱きしめて親の情を切り売りに
親が泣こうと決心は変らない
私から訣れ話はさせないで

島根県 榊原 秀子

睡蓮をみつめてひとを許してる
蝸牛のんびり雨を苦にしない
母がいるからのんびり出来る里帰り
身内自慢が上手こちらもきき上手
ビル街のはざまで初秋の風とあう

島根県 榊 みどり

ジョギング手に露草のつゆを受け
秋茄子の色よくつかる母の石
娘や孫へ親の欠点コピーする
送り盆吾妻山には赤とんぼ（奥出雲吾妻山に登つて）
六十二菊の節供へあらたまる（六十二歳になつて）

島根県 錦織 文子

素晴らしい出合へビール高く揚げ
ひしゃくで飲む水のうまさ古里にある
日曜の風は広場が好きと言う
いたわり合うてゐるから夫婦美しい
独りだけで生きてゐるような愚痴を言い

米子市 石垣 花子

トンネルを汽車はなかなか抜けられぬ
気がつけば父の足跡たどつてゐる
主役にはなれぬと塩は知つてゐる

献立のヒントを拾う更衣室
本心を言えば言つたで不孝者

米子市 菅井 とも子

この駅で送つた老母の丸い背な

亡母の根にふれた田舎の土踏ま

叱るのもつと辛いよ子供達

橋かけて島の行く末気にしてる

有難や敬老の日に子が戻る

米子市 政岡 日枝子

欄干を信じて橋に寄りかかる

少年が皿を割つたことぐらい

そよ風はうれしい情報だけおとす

足跡を消せば仏が泣くでしょう

情報に耳は時々馬鹿になる

京都市 山本 規不風

ふるさとの姉の便りにある再縁

腹立てて無言で働く癖が出る

ひとときの乱心欲しい夜の街

それ迄は魔性の女と知らなんだ

男縁絶つて一旗挙げました

神戸市 山口 美穂

街路樹のささやきをきく恵み雨

夏バテをしない秘訣の小瓶です

秋霖に思つてならぬこと思つ

贗物で飾つて若さ潤歩する

老母と娘の乾杯梅酒の水割で

松原市 佐藤 藤子

紀行文ふるい絆になつてゐる

なるようにしかならぬ漫画をよんでいる

みんな留守おしいれの戸をあけてみる

甲虫の不幸は角ができてから

突っぱりの背中が雨にぬれてゐる

寝屋川市 江口 度

足もとの躰を電柱考える

再会へあきれる程に出る涙

ダイエツト月夜の蟹をふと思つ

おしぼりで顔をふくとは限らない

ハンカチは薬はいつもの生返事

寝屋川市 宮尾 あいき

水茎のいとうるわしきうらみ文

委員長女の幸せ御存じか

無口な嫁おしやべり姑は間が持てぬ

十七人目今度は初の内孫で

まだ恋はつづいてるらし月見草

寝屋川市 柴田 英壬子

菊日和電話で墓のはなしなど

小遣いをもらつとやんちゃになる老母で(敬老の日)

新米の配達順番きたらしい

助手席に和服がのぞく三千院

ひたむきな朝のペダルの脛に秋

八尾市 宮崎 シマ子

月出ると踊り心を誘われる

悲しい夜皮肉に月もまん丸で

老母のむつき替えてるさなか布教来る
時に正気にもどり手を合わす老母
老人ホームの広告目につき過ぎる

東大阪市 崎山美子

終戦の記憶がだんだん遠くなる
とぎれがちな話題へおしほりもてあそぶ
おどりの輪ゆれて二人の愛育つ
カラフルなおしほり力士の手におどる
名案もあるにはあるが金がなし

和歌山市 堀端三男

銭金を通じぬ人だから怖い
達筆の恋文もある遺品展
嫁ぐ娘の文箱へ入れる写経筆
ストレス発散という名分がある夫の酒
ストレスが溜ると故郷の夢を見る

和歌山市 牛尾緑良

風が哭く心の傷はなお寒い
ハイヒール女は秋のひとり旅
そのひとつは錯覚だろう三面鏡
退職を決めた女の明るさよ
情勢判断すこし砂糖が効きすぎる

和歌山県 神平狂虎

君と逢う心の中の交差点
決心が鈍る静かな雨である
胸に来て止まれ疲れた鷗たち

秋の雨長い手紙の中に居る
ワイングラスに愛の行方を訊いてみる

和歌山市 内芝登志代

ひたすらに他人の嗜着へ母の針
自問自答鏡に本心聞いてみる
天真爛漫娘のペースに引きこまれ
旅三日仏の花が気にかかり
子沢山誰も老後は見てくれず

和歌山市 松原寿子

絵ガラスを抜けむらさきの君に逢う
好きだからそつと呑み干す誘い水
読み取ってほしい答を横顔へ
緋の想いきずなの端に揺れ残る
綾取りの一度ならずや髪の炎え

和歌山市 福井桂香

月見草開くことばのあと先に
幸せな人だけ集うクラス会
何となくXよりはYが好き
大型は嫌いや税も台風も
鬱憤の数だけ並ぶ鳥の串

和歌山県 寺田裕美

アメリカに脅える鯨のひと振りも
干し草の匂いの中に父の声
再会へ一気に燃える彼岸花
横向いた返事を信じていいものか
球根にはちきれそうなエネルギー

西宮市 奥田 みつ子

大和には古都税はなし鐘がなる

新盆に巨峰の房が静かなり

五条坂土の狸を見て歩く

みの虫の双子を見つけやがて秋

要る時が過ぎて出てくる探し物

西宮市 西口 いわゑ

ロボットの威力だんだん恐くなる

許す気はないのにめしを炊いている

病む女のダイヤがいたく輝やけり

落日へ海の女神も無言なり

病人はさしおきメロン食べている

姫路市 丁坪 サワ子

毒ですと言えず稼業が煙草屋で

証券会社おばさま族の夢育て

遺言の時間が省ける暮し向き

しゅうとめの鎧を脱ぐと風みどり

旅立ちの前夜カラオケ特訓で

大阪市 北 勝美

喜寿が来て飾る心をもう忘れ

夾竹桃媚びても蟬は寄りつかず

裏長屋ギキブリ鳴けば凄からう

似顔絵を孫から貰う敬老日

新聞を隅から隅まで読む余生

尼崎市 春城 武庫坊

仕来りが一番先を歩く古都

古都に住みいつか自分を見失う

秋灯友の歩みが早くなる

隙間から見えているのは赤い花

首の無い人影続く廃止線

鳥取市 森田 熊生

秋の風残った花火出してやる

うんそうだそうだ子の絵に嘘がない

欲のない歩幅で父の日記帳

絵日記に書く花火を買わされる

旧道というなつかしい土の音

唐津市 仁部 四郎

もう少し傷乾かせてナラヤマへ

彼岸過ぎ謎謎の雲が湧く

すぐそこ聞いて半里を行く名所

嘘つきの上手を選ぶ不眠症

台風に月給袋で目張りする

今治市 矢野 佳雲

この恋のさき読んでいる花時計

大入道だよローソクを囲む影

失言があつてこの人面白い

ポックリ寺詣りに持たす二合瓶

そもそものは猿が先祖という血筋

松原市 小池 しげお

職安であくびうつしてうつされる

この前もマダムのイボは話好き

先生の日記がみたい夏休み

一万円ケロツと忘れられていた
口下手な男へ花火きれいすぎ

鳥取県

森田布堂

閻魔から無実の罪をいたわられ
切瑳琢磨なぎさの石のもつ丸み
年商億女社長の繁昌記
盗難車四五キロ先で見つけられ
いい寝ぐら見つけて蛸は壺の中

西条市

片上明水

作業衣で定年が来た父の職
犬ほどの駄も子にはしておらず
正直な人で目玉でものを言う
残暑きびし秋の祭りの寄付の寄
りが笑いしそんな父の墓洗う

八尾市

山下みつる

後継ぎを作る苦労は老いて知り
まとまったマネーを持つと粗相する
キリギリス食欲に負け豚に成る

塩満 敏氏の定年へ送る

宮仕え終え反核へ血がたぎる
宮仕え終えて平和の鳩になる

羽曳野市

田中隆二

熱帯夜猫も側へは寄りつかず
純愛が少し乱れて夏終る
子の部屋があるのに父の部屋がない
がらくたがいっぱい父の部屋にある

火と水と風の間にある情け

豊中市

田中正坊

ライバルも飲んでる八味地黄丸
引力の法則飛行機もさからえず
雑草も野草とよべば優雅なり
カタカナの職種でおんな縁遠く
終章を飾る台詞は持っている

鳥取県

金川満春

ボランティア老いの人情垣間見る
百歳が千八百人の国平和
人相が好くて仁王がつとまるか
世の流れ宅配便が花ざかり
未来とは玉虫色で果てしない

岡山市

井上柳五郎

おらが天下いま精一杯蟬しぐれ
団地化でねぐら追われた鳥啼く
薄給をかこち二匹も犬を飼い
くしゃみまたやまぬを妻にとがめられ
わたしも古稀すこし甘えた自己主張

岡山市

行吉照路

日銭追う仕事に年金あぐらかく
夕立にセールス漫画を読みふけり
老人ホーム行きの切符も値上げされ
夏去りぬ眉毛に白髪ピンと立ち
涙ぐむ母に逆立ちして見せり

岡山県

荻野鮫虎狼

靴底について帰った富士の土
幕引いて私の世界となるベッド

失業の欠伸に馴れた百日目

女旅ばかりテレビで見せられる

庫裡からは鰻も匂う夏の寺

岡山県 二宗 吟 平

夕涼み音を楽しむ遠花火

形代を供え行灯の歌をほめ

立秋と言う日が特に三十五度

棚経の尻で家内申しげきされ

買ったのはどれも素直な茄子胡瓜

姫路市 大原 葉 香

自殺するその勇氣だけほめておこ

病氣でもせねば休めぬ貧乏症

内需拡大拡大しようもない家計

日まわりの陽にはらわたをさらけ出し

ついでぐちが出たがる今日の車椅子

弘前市 田 中 叶

よい言葉かけてそのまま逝った人

悪いのはあなたカラスも鳴いていた

ロケットも自分の影を一つ持ち

少年の日よ海あればたく焚火

神々といい人ばかりいる未来

大和高田市 岸 本 豊平次

核家族仏壇のない盆休み

待つ雨を思わせぶりの雲がゆく

個性的とも言われてる丸い鼻
義理だとは思えぬ婿の有難さ
病院のスリッパ重たい音でゆき

鳥取県 新家 完 司

八月の空に閃光なかりしか

謝りに来た腕白と西瓜食う

肥満した地球のどこにソクラテス

鰯焼くこんな大きな空の下

八月につづいて九月そして冬

鳥取県 さえき や え

半端な顔それでも鼻はついている

こめかみの辺から秋がやってくる

四捨五入する世で蟻は生きづらい

キャッシュカード知らず一生終わりそう

続編はもうない母の糸ぐるま

大阪市 河 井 洋 右

価値観の違いどうにもならぬ溝

権利だけひとり歩きをして弱り

剣が峰それから見せた底力

近道がこんなにきついとは知らず

倉敷市 藤 井 春 日

反省の自分を虐めること多き

償いという荷が重い茨道

死にたくも叶わぬこの身の業深き

猫嫌い孫が仔猫貰ろてくる
大阪市 藤 田 頂留子

アイデアにもう悪知恵が先まわり

こんにやくのお菜に決めたかのえさる

株暴落大根の価は下らない

わざわいの舌で大臣棒にふる

大阪市 長谷川 春 蘭

石畳つづく寺院に萩の花

夏休み弟も居た地藏盆

父さんも負けず遊んだ夏休み

子等寄せて昔話に余念なし

大阪市 中西 兼治郎

孫抱くの上手と嫁におだてられ

泳ぎから帰り耳鼻科に金が要り

運転の腕はめっているいろは坂

納涼のお化け屋敷で汗をかき

大阪市 渡 部 さと美

口をきく者といない八合目

頬づえの動かす美しいなやみ

遠足でもないのに前夜目が冴える

赤を着て五十の坂へ活を入れ

大阪市 鍛 原 千 里

わさびより糊が効いてる女房で

めくるめく過去へ日記が重くなる

秋なすのうまさを知ってる嫁姑

川湯温泉旅行

めはりずしちよつぱり涙の味がする

大阪市 大塚 節 子

五節句の仲間はずれの栗節句

老眼鏡かけても読めぬ注意書

年順にはゆかぬものだと通夜の客

喜怒哀楽人形遣いの技のさえ

東大阪市 斉 藤 三十四

学歴とは別に上手な筆をもつ

アドリブも計算拍手うけている

続投へ影の議題が賑やかな

日の丸を揚げよ揚げぬで小半日

東大阪市 森 下 愛 論

言い過ぎは判っているが成りゆきで

金の要る話ばかりなぜ続く

年呆けを良い事にして軽はずみ

先さまを見てから名刺使い分け

大田市 藤 田 軒太楼

からくりの幼稚さとくに知られてた

いける口持って強引老い達者

お互いが折れれば事なく済んだ筈

避難する港は愛しい母が待つ

仙台市 川 村 映 輝

背負いきれず女に任す委員長

波立たぬ家庭に老妻の楽屋裏

お隣の奥さん美人で赤い服

戦争反対戦争煽っているように

七尾市 松 高 秀 峰

落選をしてから人間らしい人となり

聞き上手これが上手なセールスマン
運命とあつさり他人癌を言い
上役に趣味も合わせてそつがない

高槻市 辻 白 溪 子

浜で干す魚ヘレジャー足を止め
末席を退屈させて祝辞読む
指定席ロマンが育つと限らない
ライターをほめ初対面そつがない

島根県 西 村 早 苗

愛の矢がまぐれで僕に当りそう
痴呆症までとはゆかぬ痴呆癖
三面鏡の中の一人はきつと捨て
ひまわりを黄色く塗れば西へ向く

島根県 松 本 は る み

脇役が誰より冷たい汗をかき
一つだけ許せば次もまた次も
人形が眠る乾いた目を閉じて
コスモスが風に暗示をかけられて

島根県 石 田 清 泉

七十の坂出っ腹が邪魔をする
占いの五黄の寅の牙に遇い
命毛が余白を生かす線探り
八百億劫年現身を愛しむ

島根県 松 本 文 子

ぎりぎりを生き抜く女と月見草
病院でその後を友と語り合い

人情も昭和末期の音がする
方向音痴で又ふんわりとはぐれ鳥

島根県 岸 本 輝 水

がん検診怖くはないが止めにする
くたびれた妻の寝様がうつくしい
うかつにも謝りました二日酔い
午前さま月下美人だけが知る

唐津市 田 口 虹 汀

嫌味だけ言うてとべない籠の鳥
猫舌のくせに熱爛好む夫
誘蛾燈虫も利口になりました
欲のない人は乗らない騙し舟

唐津市 久 保 正 敏

戦いは昔も今も母泣かす
発車ベルもう花屋には用がない
浴衣縫う妻の待ち針鯨尺
元値知る妻に肩書論される

唐津市 浜 本 久 仁 於

分校の歴史に眠る頌徳碑
母に似て父に似て今日の高島田
全力の螺子を男は一度巻く
鳴くものが啼いて公園秋となる

唐津市 浜 本 義 美

ヘルメット脱いで女だと判り
恙ないくらしに神をふり向かず
確率は90%の雨が逃げ

汐騒に浜木綿揺れて恋実る

倉吉市 渡辺 菩句

中途半端それが嫌いで餓鬼になる

礎石ひとつからでかい仏閣の夢

叱り飛ばすと貧乏神の馬鹿笑い

軽く言いはるが昔なら首が飛ぶ

鳥取県 清水 一保

夏休みという空間に根を伸ばし

知恵だけが伸びると自転狂い出す

遺言を宇宙に残して秋の蟬

望月の欠けたる事の多き日々

鳥取県 中原 諷人

頬づえの視界に妻というけもの

ほほ笑みは険しき道にふたり連れ

愚者の鐘ひとつ鎮めてふたつ鳴り

いくつかの秋に諭吉を読み耽り

鳥取県 中原 汲香

ティーシャツのパパに似合った夏が去り

秋海棠おさない頃の私だな

修行僧たのしい事の有りや無し

主婦の座へあなた応援しますとか

鳥取県 中原 みさ子

雑兵に心の駅がひとつある

記憶の糸がぶつ切り切れて二日酔い

湯の里のバラ一輪に自負がある

テレホンカードあなたに恋をしています

鳥取県 松下 たつみ

保護色を被って理論の外にいる

価値観のちがいが冷たい草履穿く

落ちて行く奈落の酒がうますぎる

税滞納役場へ一矢報いた気

出雲市 板垣 夢醉

女五十出る幕ないわ求人欄

飽食へいくさの傷がふと刺さる

これからは一人寡婦の名抱いて寝る

昼刺身付くから欲しくなるお酒

出雲市 園山 多賀子

世代交替玄関の額も抽象画

朝の洗面器いちばん綺麗な顔がある

腰の線観音像に見る女

空缶を蹴りたがる気もわかります

出雲市 吉岡 きみえ

雨おんな恋しい男に逢いにゆく

年金が入ってねだる女下駄

距離置いて人妻と語る秋の原

火と水の性に堪えたいろは坂

岸和田市 福浦 勝晴

立呑み屋のあるじはくぱくパンを食べ

シャンデリアの下で華麗なウソをつく

諍いの後味わるいに茜雲

海昏れて口笛吹いて引き揚げる

岸和田市 清野 こう

雨ほしい今日も真赤に夕焼ける

よそ者にやさしくなった田舎道
彼岸花赤い不安がふとよぎる

米子市 田中 亜弥

蓮の花みごとみんなの足を止め

水遣れば小鳥も朝の羽づくろい

菜園をうるおす雨に朝寝する

岸和田市 島崎 富志子

虫干しの今年は娘の色がない

冷房の快適腰だけ謀反する

おしゃべりが私を生き生きさせている

夫の留守案じ娘が来て多忙

岸和田市 原 さよ子

操子先生の句碑（二句）

萩の咲く句碑へトンボも楽しんで

虫の音が一層冴える雨あがり

健康のためと医者まで歩いてる

血筋とは争えぬもの怠け癖

岸和田市 古野 ひで

真夏日のひまわり自負に満ちた顔

同じ傷持った同士が手を握る

雨だれのリズム生きてる夜の底

あれこれと金利に悩む小金持

米子市 青戸 田鶴

コスモスも私も風に揺れ動く

りんどうの道一瞬の霧になり

昔むかし桃の流れる本をもつ

米子市 野坂 なみ

上るほど鳶は見事に化粧する

それ以来親しい友となりました

年毎に仏に詫げる事ばかり

人間に化けて狸はもう懲りた

米子市 寺沢 みど里

ひと振りの塩から朝が動き出す

苦しみを見せず絹糸吐いている

六十の分身齒科に置いてくる

温室の薔薇で疑い深くなる

米子市 沢田 千春

しつけ糸やさしい母の声がする

枕木が草に昔を語る午後

風船の糸が故郷はなれない

骨つばの軽さに胸を渦が巻く

米子市 茂理 高代

百人の味方に勝る父母がいる

女王蜂人を殺める針もたぬ

涙など誰にも見せぬ海にゆく
サルビアの赤が悪女に染めました

姫路市 松浦輝月

姑の留守招かぬ客のハブニング
老いの愚痴笑くばで聞いて呉れる嫁
留守に来て母精出して若返る
外出に玄関二、三度忘れ物

姫路市 人見翠記

年毎に残暑身に沁むご挨拶
あの薬この薬みんな揃えて旅に出る
こおろぎも私も孤独秋夜長
傍に居てホロリと散った萩の花

高知県 松岡三吉

一人では何もできない鬼がいる
素うどんに嘘もかくしもない夫婦
人買いの目が光りだす甲子園
女の子たちの涙をきつと見る

高知県 赤川菊野

次の世は次の世にはと米をとぐ
ついて来る影もやっぱり泣いている
仏にも鬼にもなれず別居する
年金へ袱紗の出番多すぎる

高知県 曾我部裕

保証印からの根雪がまだ溶けず
新築をしてあくせくとするよりも

ぐっすりと眠れましたと言うておく
世間体妻が言うから歯を入れる

河内長野市 井上喜醉

町内の幹事へ嫌な秋祭り
だらしないくせに憎まれ口が好き
退院のコントロールは狂わせぬ
千年の松が知ってる里の秘話

宝塚市 丸山よし津

こぼす愚痴気付かぬふりのできる仲
砂時計返して続く電話口
Uターンして来たわけは話さない
探しもの忘れて古い手紙読む

箕面市 坪田紅葉

同窓会のかえりに見舞う事にきめ
病院のベッドかこんで同窓会
大仕事あついあついの墓まいり
編みためたモチーフつなぐ秋近く

高石市 浅野房子

コスモスは抵抗の空しさ知っている
散策の海辺の町の遠花火
公園はアベックばかり秋日和
三面鏡夏に疲れた顔写る

寝屋川市 堀江光子

風鈴は夏の別れを繰り返えし
秋風に鏡の位置を変えてみる

命名の白紙筆蹟右上り

あのこともこのことも埋める砂浜

尼崎市 奥山 美智子

床柱家計に世話をやいている

肩幅の広いあなたを信じよう

青写真理想すぎても気が向かぬ

蹴いた石を尊いなと思う

神戸市 仲 どんたく

カンバスに無口の男しやべらせる

ぶきつちよを売りものにして家事を逃げ

泳ぎ出しそうに魚を声で売り

ダイエツトみんなしていた原爆忌

川西市 氏林 洋敏

円高を味方に日本留守にする

山持ちでないが松茸気にかかり

松鶴さん逝く

自叙伝を出して律義に死に急ぎ

春団治の逸話に松鶴負けていず

守口市 羽原 静歩

大臣の派閥あなかしこあなかしこ

秋風の中に童話を取りもどす

ターミナル今日のドラマが落ちている

大安で結ばれ大安で別れ

兵庫県 藤後 実男

幸福を探し踵のうすい靴

万歩計いつもの人とすれ違ふ

占いのページを風にめくられる

浅漬の胡瓜に明治の味がある

西宮市 野呂 鶴汀

園児皆帰った後に毬一つ

北枕ここが昼寝の場所に良い

一握の砂がこぼれる世を掬ねる

老人の首に迷子札が揺れ

吹田市 茂見 よ志子

衿替えて祝宴の日待ちわびる

教えられる事多くして友のあり

秋晴れに隠しごとなどしておれぬ

幻滅をさせないで欲しい三面鏡

羽咋市 三宅 ろ亭

五時前というのに起きて老夫婦

手加減をしてから支持が増えている

秋海棠垂れて一輪挿しに合う

柿一つ残して柿をもぎ終る

羽曳野市 佐野 白水

熱帯夜隣も深夜灯がともり

伊吹山花帽子かむり湖景見る

年聞いて保険屋庭を褒めただけ

生保さえ相手にしない年になり

交野市 山本 テルミ

二学期になって昆虫ホツとする

フオークでつづけば西瓜の味がにげ
可愛い年寄りになれと教えられ
へソクリを猫が見ていたかくし場所

倉敷市

小幡里風

目隠しで歩けば曲り角がない
夏バテをきびしく語る二重顎
水道の蛇口少うし秋が出る

宇部市

平田実男

気疲れを妻に残して去んだ孫
付添いの脳をよぎった安楽死
父の日と母の日一番悲しい日

和泉市

西岡洛醉

白日記明日の期待は染めること
檜の湯こんな旅路を還暦と
嘘ひとつ唯それだけで崖険し

浜田市

佐々木裕

噂では妖怪腹の底見せぬ
仮面かと思えば憎い鼻を持つ
拾うもの捨てるものあり共稼ぎ

鳥取県

土橋螢

尽くし切れぬ感謝汚れた掌を洗う
引き潮を待つて男が立ち上がる
廊下から聞こえた美しい不倫

大阪市

坂本仙吉郎

町造り十萬石の津山城
戦国の尼子の兵火と一の宮
古図残しこも兵火の国分寺

大阪市

寺井東雲

餌拾う鳩の心を察したい
窓の月今宵浴衣の裾直し
すすけても大黒柱持ちこたえ

大阪市

北山悟郎

日の丸がこだけ映える競技場
口よりも心で話す戦友会
指運動呆け老人と間違われ

大阪市

町田達子

巧妙な会話聞ける冷めた目で
御先祖にも言い分があり彼岸寺
名月へ手抜き団子も花も買い

大阪市

板東倫子

御見舞のメロンに子等がはしゃいで
孤立して自意識過剰を自認する
ささやかな謀反ルージュを濃ゆく引く

和歌山市

玉井豊太

急斜面俺に任せとかつむり
完べきな女に付かぬ男達
泣け泣けと話が判る父の膝

和歌山市

山川克子

美作吟行（一ノ宮国分寺を訪ねる）

磨いたら輝く石と知らず蹴り

重箱のすみも時にはつつかねば
冒険の好きなタンポポ風に乘る

和歌山市 坂部 紀久子

残暑から抜け出すための紅をひく

月給の大的月にする工面

今日暮れる日記も埋めて恙なく

和歌山市 後藤 正子

本当のやさしさ語気が荒くなる

やさしさに駆け引きのない白い花

抱きしめてほしいやさしい瞳に向う

和歌山県 天満 三千代

体調を崩しふんざりやとつき

夏休み孫のペースへ老い二人

運命に負けず褒賞車椅子

米子市 光井 玲子

コスモスが揺れるわたしもゆれている

そして秋街の化粧も濃くなる

鈍行の終着駅にさしかかる

米子市 金山 夕子

二人居て軽いリズムが消えている

朝までは叱る言葉は覚えてる

礎が軽くて宙に浮く私

富田林市 片岡 智恵子

じゃがいもの命を鍋に封じこめ

価値かわる昨日の月と今日の月

招待を受けた誤算へ乗った悔い

富田林市 新開 千代子

招待席いやな人と同座する

お茶漬けにそれぞれ家の味がある

さみしい夜月よりの使者待っている

寝屋川市 岸野 あやめ

白衣着てつっけんどんな天使だね

思い出に木犀の香がつきまとい

新人類砂の嘆きはわかるまい

寝屋川市 平松 かすみ

嬉しいが他人の妻になる娘

石橋をこつこつ叩き娘を渡し

心配の重さ体重計に乗り

岡山県 直原 七面山

病んで知る花言葉

母の日に逝きし母

大人にもあるいじめ

岡山県 山本 玉恵

しのび泣く紙人形とふたりの夜

女ひとり何を泣こうと笑おうと

老いの瞳に朝散る花をさらい抜く

諫早市 原田メイシュン

俺が居て女房安堵の大軒

左遷の地人も空気もみな綺麗

起きるのに掛声がいる齢となり

福岡県 横 地 雅 風
病室でマラソン姿見せられる
活造り店主に供養の話聞く
コンバイン汗の落穂は拾わない

岸和田市 芳 地 狸 村
言い過ぎを素直に詫びてくる電話
着こなしも粋な女のひとり旅
どことなく亡父に似てくる言い廻し

神戸市 山 片 紀 雄
孫に似た婦警が叱る駐車難
薄味の食事で亭主飼い馴らし
金持はげんかに弱いオリンピア

川西市 松 本 た だ し
蘊蓄があつて頑迷の貝の中
言い分があつさり通つた負けいくさ
宝探しに時間が足りぬ背の丸さ

高槻市 竹 内 花 代 子
コーヒ談義聞いているコーヒ呑みながら
月を見る月も泣いてる三回忌
ろうそくの灯もよし野点の月見会（黄檗山月見茶会にて）

兵庫県 中 田 白 李
統計の嘘をほんとに信じさせ
一票にならぬ意見は聞き流す
親の意にそむいて出来た子が優れ

西宮市 藤 村 宏 子

亡父の癖がやつと分つた虫めがね
わがままも個性恋人のみぞ知る
生返事の合間あいまに虫すたく

豊中市 上 田 登 志 実
白旗をあげても赦せぬことがある
傷痕に甘さと悔いが同居する
早とちり聞けばよいのに遠まわり

芦屋市 竹 中 綾 珠
渡り鳥河口につどい友を待つ
秋らしい風の散歩の芦屋川
百日紅まだ咲きたらぬ秋の空

大阪市 坂 口 公 子
ぼっくりさんどうぞよろしく願います
子供らが私の老後読みにくる
菊咲いて世話のくだりを聞かされる

鳥取県 広 本 文 子
親しくて言えないことがひとつある
情けある月の真下の悪だくみ
虫しぐれ軽い私をそそのかす

島根県 藤 原 鈴 江
プラトニックラブのまま歳をとり
老いたりといえど商魂捨てられぬ
不倫とは言わせぬ星の露をうけ

堺市 柿 花 紀 美 女
同期生又一人逝き秋深む

又一つ夢塗り変えた老いの日々
一歩ずつ大地踏みしめ孫あんよ

尼崎市

西村 かすみ

仏像に興味を持ってからの数珠

背信を許した海のひとり言

盃をコップに替えた日の深傷

倉吉市

淡路 ゆり子

突然に来るやも知れぬ恍惚の灯

葛藤が生きて姑の資格を得

花の山もとめて夫と幾山河

岡山市

小林 妻子

雑巾を縫っててくれた程の仲

句集積んで日曜だけの詩人で居

松茸だ栗だ柿だと祭り笛

大阪市

吐田 公一

初孫の顔待ち侘びるロスの宿

つまらない物が未練の老いの部屋

大阪市

塩田 新一郎

割勘の友逝き秋の独り酒

火花から火を貰ってる庭火花

大阪市

松尾 柳右子

憂うつに簞笥の位置を変えてみる

整理する写真に見とれ日が落ちる

大阪市

古川 美津枝

仏心少し持っていて他人

くじ売場となりで八卦というとり合せ

枚方市 二宮 山久

隣り読みすると新聞たたまれる

腹割って話してからの胸騒ぎ

豊中市 奥田 満女

草の花日をいっばいに行く人へ

草の花揚羽しずかに横たえて

吹田市 園田 文子

笹餅の届くぬくもり母の背

物価高財布の中の勘ちがい

鳥取県 羽津川 公乃

神無月若い二人が気を揉ませ

父の座に父どっかりと座す安堵

岡山市 岩道 博友

老人会詩吟に続いて勅語言う

言葉尻温め合って敬老日

羽羽曳野市 中村 優

シナリオにどんでん返しを伏せておく

耳に栓眼に目隠しのいい他人

岡山市 花田 たけ志

傾いてから起きられぬ角ができ

習うほど深くなるのに暮れかかる

富田林市 松本 今日子

いつの世も覗きたいのが女風呂

気兼ねなく女一人で鯛茶漬

自選集

尼 緑之助

地図にない川を渡れば既に秋
菓子一つ問わず語りの城下町
萩咲いてシェーブアップの腰伸ばす
テロ化する宇宙の生理だしぬけに
国政に人間臭い馳の尻

藤 村 女

指切りに背いた指が疼く秋
長旅に出かける長閑なカタツムリ
これからの余生長閑に背伸びせず
宵宮の背で眠る子の風車
日銭追う男に雨は冷たすぎ

川 口 弘 生

霜にあいトパースまでが変彩し
燕雀は鶴を仲間にしてくれず
低気圧喘息患者が苛められ
浣腸が再度童子にするベッド
梅干しも漬け二番目の子も生れ

正 本 水 客

飽食の果て割箸の杉に負け
古い古いと別れ話を聞いている
泣くために暫く涙ためている
見くびった男が金を借りにくる
野菜てんぷら妻のきげん分る音

小 林 由 多 香

塩分のない献立に生かされる
男気を出すふところを勘定し
雑兵の汗を集めて城固い
単身赴任二年がまんの駅に降り
結論をまとめる軽い咳ばらい

黒 川 紫 香

秋ですな思わせぶりを見せている
口軽い女なんでも知リたがり
風紋をひとり崩してたそがれる
一番機仰げる朝はよく晴れる
好きやねん心の中で言うておく

市川 鈴 魚

男一匹雑魚でも結ぶ靴の紐
不揃いなリソグ言いたい事がすぎ
吊忍温い話をききもらす
亡母がいるようで張り変えする障子
しばむ日の牡丹は人を驚かせ

本 田 恵 二 朗

父の職継がぬ子ばかりそれも佳し
防波堤になる気じやないがなつていた
やじろべいに成り切っている八十翁
ブレーキがこわれたように先走り
百聞はしたが一見まだ出来ず

児 島 与 呂 志

逆らえば一番前に居る黒子
本心をせっせと隠す道しるべ
ストレスをためて延着証明書
母からの一行追伸里の味
結局は雑兵だけが乗り遅れ

工 藤 甲 吉

我が輩は猫で今では札である
りんどうの青紫に亡妻鎮む
いかにせん読書の秋は酒の秋
戦わずして蟠螂の斧はまけ
名月は出ずとも酒がございます

大 矢 十 郎

いい年をしてとは恋を知らぬ人
も一つの耳北浜を聞く男
集金が孫の友達褒めて去に
母性愛も簡素にミルク紙おむつ
弱い者が浮かび日本はよいところ

野 村 太 茂 津

惨敗の夜は五輪書読み返す
八方破れで五輪書を繰るほかなし
清濁の尺度は俺の作ったりトマス紙
意見書に朱を入れ狡いかも知れぬ
重荷にはならぬ狡さも抱いている

長 野 文 庫

十八九度胸の臍を見せ歩く
年寄りを置いとけばりに世は進む
やがて来る冬を考えぬではなし
わが想いテレビドラマは逆なりき
済んで見ればコップの中の水だった

山 内 静 水

文相罷免トカゲのしっぽ切っただけ
今日が吉日暦は見ないことにす
小突き上げる祝福だってある
シャッターの音も静まり刻止まる
竹原川御会創立三十年を迎えて
雲の峰あおげば道は遙かなり

藤井明朗

秋という楽しみ山海の幸旅誘う
米ソのかけひき一喜一憂する世界
まだ若いつもりか敬老の席にいる
内需拡大の波へ大漁を秘めている
爽秋へ不況の中にひと動く

水粉千翁

かくありぬべしとは誰に言い聞かす
身に余るくらしと思いつくろいぬ
ここまでをまだここからを踏みしめる
見ぬふりをしてやるものか妬くものか
ごもつともさまで鵜呑みはしていない

米澤暁明

お土産が宅急便で先に着く
孫が来て嬉し帰ってまた嬉し
なんという虫とも知らず秋を聞く
風もないのに可憐コスモスゆれている
忘れたいと飲んだお酒にまた未練

八木千代

どこにいても心配だから旅に出る
向う岸の夜景美しすぎないか
廻り道景色を肥えさせてくれる
正面の敵と親しくなりすぎた
蟬の最後の意識に松の木との夏

小出智子

この秋も事なく過ぎし母の膝
いつそ知らねば幸せな日を重ね
秋深し父の位牌の軽さにも
幸福と繋がつているマンホール
わが胸の仏ごころに鐘が鳴る

月原宵明

辞職より罷免の方が箔が付き
吊下げた作業衣右の肩が落ち
竹とんぼ養老院の屋根を越し
平常心保てと糸瓜にさとされる
修羅越えた脚リハビリへ素直すぎ

金井文秋

メトロノームのようにはいかぬ老いの足
一城の主も城ががたがたで
自分史に少うし味をつける嘘
齢やでと言われる齢になつてくる
精神年齢だけはなんとか若くいる

— 同人吟

秀句鑑賞

— 前月号から

玉置重人

原点は野菜に土が付いている

谷垣史好

この原点を忘れなければ農業の使用も激減するであろうに。さらっと、しかも衝くとこは衝く作者の非凡さにいつも脱帽してしまふ。

椅子取りゲーム出来ぬ年になりました

岩本雀踊子

淋しそうに見えるが中々どうしてさにあらず。気力体力ともなまなかの者には負けぬ作者の自信が窺える。

弱虫で昨日とばかり話す

岩田美代

人間の弱さが中七に見事に浮き彫りされているが、この句おそらくは常に前向きに生きようという反語であろう。

なによりの馳走は風呂が沸いている

津守柳伸

日本人の心情がさりとて詠まれて大切な人への気配りが心憎い。

散歩する時間も大切な日課

春城年代

はた目には気楽な散歩も日課ともなれば方歩計もつけねばならぬ。人それぞれの暮らしたむきを詠んだ作者には珍しい味のある句。

叱られてみたくて軽い嘘をつく

榎谷寿馬

軽い嘘が文字通り軽味のきいたリズムミカルな句に仕上がっている。

ほとんども妻が喋った電話料

中川滋雀

誰でも共感出来る句でここに娘が加われば更に輪をかけた電話料になるであろう。川柳が益々楽しくなってくるユーモア句。

重心を高いかかとにまだ未婚

林瑞枝

最近未婚の女性がふえているらしいが、(男性の未婚者も意外に多い)中七の風刺が見事にきている。

負け戦だったがビデオはとつてある

松川杜的

悪い癖悪いフォームを鮮明にビデオは教えてくれる。負け戦を撮る心掛けを忘れぬ限りきつと勝ちにつながるであろう。反省することとは大事なことだ。

正確に時計が合うて腹が立ち

江城修史

雑音も聞えぬ部屋で落ちつかぬ

堀端三男

人間の心理を巧みに衝いた川柳眼が見事に躍動している。

無冠になってからいろいろ見えてくる

増田次章

栄枯盛衰は世のならない。達観ぶりが窺えて愉快になつてくる。

道草が僕の血になり肉になる

辻文平

道草を肥やしにする芸人も多いが、道草大賛成。堅いばかりでは人間息がつまります。

止まり木の向こうも嘘を温めてる

仁部四郎

止まり木で策を練る男は多いが嘘を温めてまとめたところはリズム感もあつてきれいに仕上がつた。

欲のない人は乗らない騙し舟

田口虹汀

豊田商事に続く騙し舟は多い。第三者の冷静さを持つ此の句の教える所は大である。

父病んで罫丸(ふぐり)の見える時がある

田中叶

厳しかった父にしてこの現実。子として出来るだけのことはするつもり句意が滲み出ている。

鬼が出る蛇が出る壺を持て余す

越村枯梢

こういう壺に出合うのも人生にはまゝあるから面白い。が、間違つてもこの壺に振り回されないうようにしたいものだ。

確実に定年の日がやつてくる

田中隆二

避ける事の出来ぬこの厳然たる事実を直視しなければならぬのに人間の哀しさ、ともしれば無為の日を送りがちになつてしまふ。人生への警鐘が平易な句の中に含まれている。

川柳太平記

(102)

川柳の群像

吉田機司

東野大八

「私が高等学校の二年の時だった。国文の課外講義に古川柳の話をきいて、川柳とは面白いものだと思った。はたちの頃だった。しかし私の学生時代は、酒をのむことと遊ぶことに忙しかったので、とてもそんな余裕がなかった。それでも新聞や雑誌の川柳欄は興味深く読んでいたような記憶がある。

昭和三年に医者になって、大病院の医局でごろごろしているころだった。ある日、妙な患者が外来にきた。のつべらぼうの顔に、宗匠頭巾を冠り、黒い被布を着た背の高い老人で、診察がすむかすまないうちに川柳の話をもくし立てた。すこしイカれているなと思

つたが、でもなかなか話が面白い。次の日もきて長講一席やっているかと思うと、風の如くにいつの間にか帰ってしまった。

アマリス大学行きのバスに咲き

「これは昨日、駅からバスに乗ったときの所見です。病院に見舞いにきた娘さんね」

こんなことを言っていて色紙にアマリスの花とこの句を書いて持ってきたこともある。井上刺花坊とともに川柳復興の祖といわれる阪井久良伎とはこんな人だった。

昭和十二年に私は借金だらけになり、研究を捨てて開業しなければならなくなった。さでどこにしたものだらうかと考えたとき、ふと考えついたのが、たびたび久良伎先生のお宅を訪ねたので知っていた市川市だった。そ

して買った家は、先生が愛人と一緒にいたお宅から半丁ばかりのところだった」(「川柳随想と選句集・吉田機司」の随想より)

右の本の巻末にある略歴によると、機司は本名吉田崑司。明治35年5月20日福島県いわき市生れ。昭和3年千葉医大卒・内科専攻とあるから、久良伎との出会いは右の千葉医大のインターン生のころで、相手の久良伎翁は59歳、市川市真間に僑居していた時に当る。

昭和10年医博となり、同12年市川市にて吉田内科病院を開業。それから八年たつて「先生は一日に一回必ず私の病院に遊びにきた。そしてそれが昭和20年4月3日空襲警報のサイレンをききながら、川柳運動に捧げた七十七歳の生涯を閉じるまで続いた」(同上)

終戦になった。昭和21年11月であった。

「久良伎先生の弟子で、作家の正岡容君が秋田の疎開地から市川に帰ってきた。なんかで徳川夢声老と古川緑波さんと私と正岡君の四人が会った時、占領軍がいて見るもの聞くものが癪にさわり、それかといつてどうにもならない、一つ川柳の本でも作ろうということになって「川柳祭」を出した」(同上)

「機司師が医博で病院長であり、夢声・緑波の両人は人も知る喜劇界の大御所、そして

容氏は江戸文学の研究家、といったように他の柳誌の常識ではとても考えられない異色な編集メンバーもさることだが、米兵の進駐や食料難で騒然としていた暗黒時代だっただけに、一層この柳誌の発行がマスコミや大衆にうけ一服の清涼剤とし喝采を博した。

しかし残念なことに「川柳祭」誌は、編集の手不足や紙不足などの悪条件が重なり、昭和24年に終刊という悲しい結末を遂げた。しかしこの間、合併号を含めた二十七冊の内に全国から寄せられた万余に及ぶ佳吟・秀作はもし戦後の社会側面史を編むとすると、実に貴重な資料と高く評価されるであらう(雑誌「川柳」郷士の川柳史・吉田機司篇)松沢敏行)

「川柳祭」誌を賑わせた句の代表的なものを参考までに掲げておこう。

- | | |
|-------------------|-----|
| ○見よ東海の空あけて四等国 | 京 一 |
| ○ガード下今日も天使と靴みがき | 容 |
| ○取締るたびにヤミ値がまた上り | 春 治 |
| ○税務署の方へ人魂今日も飛び | 火呂志 |
| ○あの時にやめりやよかつたイヤホン | 充 |
| ○売ったとて減らないものを女持ち | 春 夫 |
| ○アルバイトだんだん学に遠ざかり | 洪 二 |
| ○働かぬ奴が争議の先にたち | 清 香 |

○三合の米をよこせと今日もデモ 正 夫
これらの敗戦直後の社会風刺吟や滑稽風俗吟には、どん底を放浪する人間のユーモアが生々しく人に迫る。今日の飽食の時代にはこんな迫力にみちた時事吟は作れない。

川柳祭誌廃刊後、機司は千葉新聞・報知新聞・内外タイムス柳壇等を担当し、その柳文粹文はマスコミからも注目され、川柳人吉田機司の名を不動のものにした。医学・川柳関連の著書も数多いが、その中に川柳祭のメンバーの編んだ「川柳の味い方と作り方」(昭22)や、学習院大学教授R・H・ブライスと共著の「世界の諷刺詩川柳」(昭25)「現代川柳五千句集」(昭30)は柳史上貴重な名著として忘れてはなるまい。

川柳祭誌廃刊後に機司は、昭和26年地元市川市に手児奈(てな)川柳吟社を創設している。この月例会には、自宅や病院を開放し、作家の宇野信夫、日本画評論家竹内梅松、落語界から桂枝太郎、古今亭志ん生、三遊亭金馬などを招いて選句柳談会を催す一方、八日市場市にも「おもと川柳吟社」も手がけ、ここから「百歳の川柳ばあさん」諸田つやさんを世に送り出している。

千葉県は古くから「川柳不毛の地」といわ

れてきた。このことは千葉県の半農半漁という土地柄が、川柳などという趣味性を受け容れるだけの余裕を持ち得なかったと解釈する以外に答への出しようがなかったのである。

それが今日では千葉県には大小合わせて十数吟社が存立しているが、そのきっかけを作ったのは、伝統川柳派の阪井久良伎と吉田機司の出会いからはじまったわけで、昭和12年のその萌芽から、機司門五〇〇人が育ったのである。現在、この千葉県川柳界を双肩に荷って活躍しているのは、千葉県川柳作家連盟(昭39結成。機関誌「大吠」発行)の初代会長松沢敏行・理事長加賀美白英子らのグループである。

機司は昭和31年川柳手児奈吟社を「現代川柳社」と改め、月刊「現代川柳」を発刊したが、川柳祭同様、三年で休刊している。

機司は「川柳は大衆すべてのもの」が信念で、関東の川柳界などは眼中になかった。その一例は、川柳祭発刊当時、柳界から相当の批判も受けたが歯牙にもかけていない。昭和39年7月16日没。享年62。誠徳院智勝達道居士。

★次回は「堀口塊人」

誹風柳多留廿六篇研究 (二十八丁)

南 得二・小野真孝・本多正範
石田 成佳・大屋六郎・八木敬一
鈴木 黄・石田晋一・多田 光

故岡田 甫

469 人こそしらね頼政がむすめ也

南 百人一首、二条院讃岐の歌「我が袖は汐干に見えね沖の石の人こそ知らねかわく間もなし」の文句取りで、同時に二条院讃岐を指している。

句意は、彼女は人は知らないだろうが、実は源三位頼政の娘であるとのこと。

実際は、頼政の孫で伊豆守の娘であるとのこと。

多田 賛。岡田 同。

470 金と銭てんひんにした御縁シ日

南 金と銭は、金龜山浅草寺の「金」と

東叡山寛永寺、つまり寛永通宝で「銭」として、上野・浅草をあらわしている。「てんぴん」は、均衡のとれることを言い、どちらの縁日にもきやかであるとした句かと思えます。

本多 川柳江戸砂子」及び「川柳江戸名所図会」の説に従って、下谷稲荷と解している。下谷稲荷の祭礼は両書或いは「東都歳事記」等にある通り、三月十一日で、盛大であつたらしい。

八木 上野と浅草（柳雨）では、金龜山浅草寺と東叡山寛永寺両大師の縁日——十八日、としている。私もこの説に賛成である。

多田 浅草寺・寛永寺説に賛。両寺はよく知られており、この方が共感を得やすいのでは

ないか。

岡田 上野は当時さかり場でした。

471 雨舎りするに及ハぬありがたさ

南 町入能興行に陪観を許された者たちが、御傘を頂戴して、これで雨が降っても濡れずにすむと、徳川家礼讃の句である。

君の恵みぞ有がたき傘を提々 九一 32

人もさすなら我もさす有かたさ 二〇 23

大屋 「ありがたさ」で將軍家讃美の句でしょう。お能拝見を許される者は、宝暦以前は町数三百八十町に限り五千百人。宝暦十二年五千百十八人。天保以後は五千百十一人。八木 賛。

雨に傘さす結講な切落し

八七二〇

多田 同。

岡田 御能拝見の句、賛。

472 片方は四百余州の目をさまし

南 〔四百余州〕は中国全土の異称。

片方は四百余州の目を覚まさせる立派な働きをしたのに対して他の片方は無名であるということになり、中国の多い故事の中で、こうした枠にはまる例も多いと思うが、一応最もその対照の甚だしいもの、又有名なものは韓信の股くぐりの故事のことと解して見ました。

多田 わからず。岡田 難句。

473 夢の番付孝霊の後チに出来

南 俗に「一富士、二鷹、三茄子」などと言われて吉夢とされている。これを以て夢の番付とするならば、富士山の湧出したのは孝霊五年、琵琶湖と共に一夜に出現したといわれているので、夢の番付は、従って孝霊以後に出来たということになる。

考霊の御代から夢にあてか出来

日本の夢は一夜に湧ひて出る

三三二

三七一

多田 賛。岡田 同。

474 不二の歌自カマ風になびきかね

南 〔日本史伝川柳狂句〕に、本句が収録されているが、何の説明もない。本句が詠まれるもとなつた逸話があるらしいが、その内容を知らず、句意もわかりません。

本多 本句出典「明二輪講」でも「梅仙翁の説に従うのみ」との意見が支持されたが、この俗説典拠不明でいかんともしがたい。

石田晋 わからず。

多田 同。

岡田 少し時間をかけて調べれば判る筈、しかし今、大忙。

475 通用のよひ御寺号を御建立

南 寛永寺と寛永通宝は同じ年号を負つて居り、寛永の年号を寺と錢に言いかえて通用のいい寛永通宝、つまり寛永の名を負う（寛永）寺を寛永の年に建立したという句。

御山号通用のいい世の宝

一品で通用のいい錢の寺

年号のはまれ宝と大伽藍

八木 賛。ただし「通用のよい」がはつきり

しない。

多田 礎稿賛。

岡田 錢なので通用がよいと詠んだまで。

476 観音の力で文武勝利を得

南 〔文〕は、吉備真備が野馬台詩を試みられた時、長谷観音が蜘蛛となつて現れ、見事唐の君臣一同の鼻をあかした。

〔武〕は、坂上田村丸が鈴鹿の鬼神を退治する時、清水寺の千手観音が現れて勝利を得ることが出来た。

文に長谷観音の力で、武に清水観音の力で吉備真備は唐の君臣に、坂上田村丸は鈴鹿の鬼神に勝利を得るとの句意。

吉備と田村へ文と武の妙智力

多田 賛。岡田 同。

477 琵琶の夢近江の守に成らせられ

南 琵琶 琵琶湖 近江 近江守と結んで、琵琶の夢を見たから近江守に任官したとの夢占の句。単に琵琶を夢見たから近江守に任官したと縁語を結んだそれだけの句と解しています。

多田 礎稿に賛。

岡田 一富士の夢を見たので近江守になった、というこじつけ。

水煙砂

黒川紫香選

高槻市 河瀬芳子

藤井寺市 赤木和子

刺身のつま程度に女愛されて
遠い日の少女に還る金魚の朱
郷里の無い娘に盆休み過ぎてゆき
死にたいと されど薬は飲んでいる
生き恥を晒し紫陽花朽ちてゆく

今治市 野村京子

背信へ女手酌で酔いつぶれ
紫を好み少女が脱皮する
ひよつとこの面を被って出遅れる
ラストダンス絵になるはずの靴がぬげ
女ひとり生きてく隙を一つ持ち

竹原市 信本博子

彩褪せてまだ愛してる紙人形
愛し過ぎ十字架の血をもろに受け
愛一つ大事に包むかすみ草
病院の朝戦いの薄化粧
熱っぽい吐息で溶けた砂糖菓子

呑み干してしまったスूप皿の嘘
可愛くて莫迦で女という名前
無念無想ゆつくり嵐去つてゆく
悪い人らしい話がしてみたい
男の一生が秤にかけられる

八尾市 高杉千歩

縄電車案山子へさよなら夕茜
古地図が絆を戻す無人駅
ときどきは口論もして老いの膳
絵三味世事にはうといいろは唄
曼珠沙華道づれをまつ岐れ径

佐賀県 寺中三枝子

甘い言葉待つバラソルが招んでいる
久しぶり逢えば視線に火が奔る
ドンファン舌に合せたペンチ購う
遠吠えばかりだからあなたは嫌いな
更年期影もよろけて従ってくる

熊本県 大川 幸子

街歩く一寸うぬばれ意識して
騙されていよう気付かれないように
ポケットにずるく秘めてる逃げ言葉
札束のたのしさふところだけが知る
消えぬ間にくぐり抜けるか虹の橋

熊本市 永田 俊子

吉報へきらきら光る茹卵
行き合せて別れる蟻に似た緑
ひまわりの真実太陽恐れない
スケジュールに合せて仮面とり替える
足跡の同じ形に今日も暮れ

熊本市 宇野 昭代

苦労話などせぬ母の節くれ手
逃げまどう蜘蛛へ掃除機小休止
孫とお話孫の高さにしやがみましょ
親離れちよつと抵抗してみたし
手作りのいびつな籠の暖かみ

西宮市 紀市 郁栄

妻病んで家の時計がみな狂う
手紙読むベギ―葉山を聴いている
ケーブルのキップを孫が持つという
狂乱の進学塾に寒気する
わたしの知らぬ数字を妻が持っている

長岡京市 木本 如洲

誘われたおんなと泥の舟に乗る

ゆつくりとお茶の時間を呉れぬ椅子
裏切ったおんなに会釈してしま
世渡りが下手で夜店の本を買う
智照尼の風邪を見舞いにゆく時雨

大阪市 清水 康恵

花屋から出てくるひとは敵味方
おちこんだ私は鏡に写らない
妻が病むそんなことなど考えぬ
長い橋笑いぶくろを大切に
鶴を折る母の心が知りたくて

京都市 木村 たけし

吊り橋をゆすって美女が手で招く
仏の瞳を涼しく思う夏の雷
思い出のひとつに珈琲館の椅子
花の名をかぞえて育つ子の日記
働いた汗は妻から茶を貰う

名古屋市 藤井 高子

慣れと呼ぶ鎖に飼われまだ翔べず
丸い背で弁解ばかりしてる影
空間にしわぶき一つ老父と居る
要領はとんと不得手なかつむり
うら表こんがり焼いて来たハワイ

富山市 舟渡 杏花

てらないない涙で素直なまるを描く
風の盆が好きでこの地へ根をおろす
蝶番の甘さを風になぶらせる

ジョークには遠く笑いを噛み殺す
うろ憶えの経で濁した寺巡り

久留米市

鶴久 百万両

夏が逝く鶴のニュースもちらほらに
さわやかな阿蘇雲海の中に佇つ
綾とりの思い出亡母のねむる森
墨汁はいやよと拗ねている硯
十一月の夢を彩どる花へんろ

兵庫県

脇田 米朝

Gパンを浴衣に替えた娘の化身
口紅を引いて火遊びするつもり
うま過ぎる話に枝葉がついていた
耳たぶが火照るささやき聞いている
泥んこの遊びは知らぬいじめっ子

東予市

小山 悠泉

玉碎の島スコールが碑を洗う
墓参団還らぬ島の墓洗う
貧しさに慣れて貧しさもう言わず
夾竹桃今年も咲いて原爆忌
八つ当りする子へ親の方が折れ

高槻市

笠嶋 恵美子

黒蝶よぎる癌病棟は静かなり
母は一途に経を唱える百度石
花鳥風月あくまで愛し孤に浸る
萩の道ささやきにさえ散りいそぐ
イヤリングゆれておんなが匂うとき

滋賀県
安田 志津

湖島の灯呼んでる様な泣く様な
虫時雨私の分も泣いてほし
そして秋般若心経口ずさむ
黄菊白菊一ぱい咲かせ人を恋い

和歌山市

桜井 千秀

口惜しさがバネになってた立ち上り
イメージを壊して会ったことを悔い
肩書が消えて自由な歩の速度
群を出た羊に挿話が切れてゆく
見おろした町に昔がまだ残り

鳥取県

黒田 くに子

姑の客迎える貌は別に持つ
肩書を捨てた男の無精ひげ
打ち水をもてなしとして客を待つ
嫁がせて父に淋しい風が抜け
骨壺をつつむ風呂敷さびしいね

鳥取県

土橋 はるお

連休の洗濯竿が足りません
記念品にテレホンカードが入っている
刺身つきの晩酌があつて明日がある
筋書通りに這わない蟹もいる
先頭を走った亡父の靴をはく

羽曳野市

吉川 寿美

姉が逝く風の傷みをきいて秋

起承転結悼みを領つ仏の掌
一切を空に還して曼陀羅絵
病夫の掌と残り時間を温める

京都市 松川芳子

中流の意識に酔っている女

実年へ少女の肌のまぶしすぎ

老母持つ同士で話題ことかかず

お百度へ一心不乱という歩幅

西宮市 松本一郎

夢でしか逢えない亡母が出て呉れぬ

火種抱き悲しい女ひとり旅

新聞の隅に小さく恩師の死

古きこと覚え昨日をよく忘れ

大阪市 上田柳影

不自然でない言訳を考える

新人類いと簡単に死を選び

夫婦喧嘩所詮は一寸した喜劇

カプセルに容れてとっとく泡銭

高槻市 川島諷云児

無人駅別れの涙置いてくる

廻れ右すると二の矢が飛んで来る

ライバルに銃口向ける夢しきり

社長賞以下同文の列に居る

岡山市 黒住美穂子

女です嘘一つ二つ三つ抱いている
矢印の無い運命を追いつづけ

潮時と逃げ水のごと女去り
言訳はすまいと余生風と住み

兵庫県 東浦砥代

リフォームのペアで二人が若返り

古い三日遊び疲れという気まま

嫌よいやよとその次を待っている

繰り言へやさしく熱い茶を入れる

吹田市 井上照子

亡父を恋い彼岸だんこのあんを炊く

野の花をイメージに置く片想い

鉢植えのみかん三こ夢みてる

サファリンを忍んで月にみる故郷

米子市 足立由美子

手紙書く指へ言葉が集まらぬ

それなりの暮し野良犬もって生き

笑い袋落してどうも笑えない

したたかな顔などいない田舎道

新発田市 上鈴木春枝

会えばまた愚痴を聞かされそうな友

ベビーバス金魚泳がす子の育ち

子が借りた本をそうつと読んでみる

初孫へ老母がカメラ買ったらし

河内長野市 大西文次

灰皿の掃除吸わない者がする

セールスが美人でお茶を出してやる
自画像に皺は書かないことにする

助手席の妻は安心して眠り

尼崎市 山田保蔵

孫息子アメリカ行もつねの服

食べたがり寝たがりそしてやせたがり

地下道で誰を待つのか傘二本

下手ですとすなおに言われいたみ入る

唐津市 上田花代

笑い袋のチャックを少し開けてみる

柿熟れる日を猿と蟹待つている

新札に慣れて太子も遠い人

手に輪ゴムふと気がついた外出着

堺市 桜沢あかり

ツインビル雨の下界を見て帰り

うちの子を叱り近所と輪を保ち

行間に欠伸がにじむ原稿紙

スーパ―のおこぼれもある小商い

静岡市 澤田きん

老眼鏡少しとぼけて愛される

女です語り尽せぬ旅の風

好きだから時には拗ねてみたくなり

善し悪しもただ聞くだけの母で居る

熊本市 黒田緑

多数決笛を吹かれて踊るだけ

可愛気は均等法へ薄れかけ

芽の出ないまま修身にシャツを着せ

自分史のどこでシナリオ変えたやら

ぼろぼろの軍手は話しながらぬ

親しさに馴れてこぼした盆の水

待針を並べむすめの恋みのる

祭囃子に惚れたおんなが又戻る

静岡市 永倉僕川

一杯の盃本音を喋り出し

老いばれも生きてる証し税が来る

わし掴みして豊作の稲を刈る

さりげない対話の隅に嘘もまぜ

大阪市 井上白峰

乾杯のあとは知らない紙コップ

口止めの酒が暴露の口火切る

中天の月に心を覗かれる

煙草の輪妻の願いを煙にまく

京都市 森川春子

一目散に飴玉貰ったことを告げ

あや取りの器用な手付の男の子

油絵を習い始めたのをくれる

病院のトイレに白菊一輪が

吹田市 栗谷春子

ショベルカー道路で威力見せたがり

ソブラノで話す子がいてくたびれる

天高く秤ためいきつくばかり

お茶漬けは向いどうして食べるもの

尼崎市 森安夢之助

貧乏しても心は豊か昼寝する

灯がついたような明るい嫁が来た

定退をして爪だけがよく伸びる

母さんの放つスパイは芯がない

倉敷市 田 辺 灸 六

的を射る矢がない言葉尻濁す

自己嫌悪一言過ぎたなと思う

不器用な男が器用に金を貯め

性格の違いどちらにも溝を掘り

大阪市 堀 い く の

何事もなかったように猫が居る

お詣りを済ませ茶店へ下り坂

モチーフに目刺しひと串買っている

事故多し糞虫揺れているばかり

弘前市 斎 藤 島

番台の時計いつでも均等法

久しぶりリングを売っていたおばさん

草を取る墓は亡父と語りつつ

店頭の赤いトマトは嘘つきだ

尼崎市 鈴 木 良 征

蛇口から朝の挨拶流れだす

進軍ラッパに嗾けられて死ぬ勿れ

客が来てザーマス言葉冴え渡る

月あかりボンボコ山の萩すすき

熊本県 高 野 宵 草

前略と後略でくる子の手紙

また狂う時計でも腕にはめて出る

睨まれていれば機械も油断せず

お疲れ様ねと急須の白い手

熊本市 北 川 一 進

名目は研修だったバス旅行

いたずらも覚えた孫の成長度

丸い顔なのに言葉に角があり

私語のない今日は父兄の参観日

岡山県 杉 本 元 江

夢一夜覚めて未練の月冴える

露払う風にほろほろこぼれ萩

想い出の色濃き萩のこぼる道

一樹一木子にはゆずらぬ父の森

兵庫県 森 脇 和 子

佗しさは線香花火の雪玉

ねぎらいを背な一ぱいの帰り道

流れ星児の約束を掬い上げ

ポトポトリ雨だれの音人恋し

静岡市 渥 美 弧 秀

何時からか話題も無くて夫婦老い

友の灯がまた消え森は秋深し

ライバルが抱く爆弾を予感する

夕焼けを詩と音楽でワルツ組む

守口市 結 城 君 子

勢いに押されて書いた署名欄

フランスへ発つ息子へ浅漬茄子を選る

好物の違ふふたりがまるく住み
炎えつきた線香花火に悔いはなし

尼崎市 千金良 みち子

病状を廊下の隅で聞いている

良い便りだけは母にも読んでやり

ライバルに勝った妊婦の低い靴

傘高く上げて夫が迎えに来

伊丹市 山崎 君子

端正な齒科医の鼻が気にかかる

裏庭の秋が待たれる菊作り

思いきりはめをはずした海だった

朝顔の執念今も咲いている

貝塚市 池田 寿美子

秋の夜にデュエットをしたい遠い人

芋の葉に溜まるジョークが転げ落ち

七人の敵がピエロに見える熟年で

朝やけに塔凜として秋の風（バリの想い出）

松江市 吉田 笑子

花いちもんめ取り残された私

流灯へ叫んでみましたお父さん

八つ当りしたテーブルなでておき

モーニングサービス男の影うすい

米子市 木村 富美子

さだめです北風に立つ風見鶏

叱られた痛みは小箱から出さぬ

好きで好きで此の街に住んでいる

正直な太鼓で音が定まらぬ

米子市 大田 みさと

デュエットの狐と狸意気が合い

ファッションも田舎のほうが勝ってます

コスモスが咲くと単衣が着たくなる

まとまりが良くてあっけなく幕が降り

岡山県 伏見 すみれ

寝たきりへホームヘルパーの愛のさじ

これしきの釣銭持って追いかける

引退をすれば父さん粗大ゴミ

風鈴の音にも秋が感じられ

守口市 森川 まさお

堂守と仏のうしろで立ち話

寺近くなつて程良い坂になり

けもの道の横に立つてる道しるべ

昔からの目抜道路が曲りくね

尼崎市 吉永 伊三郎

一徹な男の旗が濡れている

赤とんぼ別れた道を従いてくる

年金でお月見してる兎小屋

良い人に拾われてねと子猫撫で

出雲市 小玉 満江

お久しゅう秋にはお茶会開きます

秋は行く野原に帽子の忘れもの

一寸した油断セールス座り込む

なあんにも無いことにしてそばを食べ

岡山県 矢内 寿恵子

ライバルの微笑素直に受取れず

食べ盛り揃うて米びつ又のぞき

過去みんな白紙始発駅に立つ

大阪市 亀井 円女

秋の夜はロックでちよつと賑やかに

苦も楽も入れる袋は一つだけ

純粹に唯一途なり蟬しぐれ

和歌山市 森 敏子

尻軽な人の涙を見ってしまう

ちよつといい気にさせて女のひとりごと

ともだちが二人病んでる秋が来る

芦屋市 上田 佳秋

逆境に負けると亡父の墓へくる

歯車は一生合わぬ妻でよし

去る職場満足でしたとは言えず

大阪市 山田 妙子

蛙一尾余さず捌いて満ち足りる

ゴキブリとうちの母ちゃん逞しい

コスモスが大きな心持てと言う

十和田市 阿部 進

子に自信持たせる合槌打っている

へソクリもなくて夫婦の歩が揃う

バスタオル巻いて電話にかしこまり

豊中市 小畑 よし子

父逝って白いまんまの日記帳

文鳥が逃げてから祖母呆けてくる

お茶漬けを用意したのに寝てしまい

岡山県 千原 理恵

落ちぶれた話はすまい明日がある

膝枕少うし濡らした軽い罪

嫁ぐ子の涙に父の失語症

豊中市 辻川 慶子

野良犬も友達がいる公園に

まん丸の月にカーテン閉め忘れ

ふる里はいが栗落ちる頃となり

愛媛県 西山 えつ美

現場検証遠まきにする好奇心

たまにもつ筆が震えて字にならず

おとなしい人がプロレスファンだとは

青森県 福士 トキ

やつと生き返りましたと夕涼み

盆帰省孫の寢息の中で寝る

孫達が帰り地球が廻り出し

唐津市 相葉 あき

口笛を吹いてラインに立つ男

鳩を出す帽子を何時も持っている

夏季ノート余白を電話が埋めてる

唐津市 浜本 ちよ

お互いに仮面を持って良い夫婦

借金を軽視若者クレジット

デザートより派手なお薬たんとむ

鳥取県 乾 隆 風

洗濯をしたら大山晴れて来た

通知簿の軽い自慢をほめてやり

梨景氣の音をレールに乗せて秋

尾崎市 尾 宮 弘 治

妻が来てカーテン替える仮住居

窯元で捏ねた人形亡母に似て

年金の暮しメロンは娘の土産

広島県 田 村 新 造

海難の名所霧笛の絶え間なし

連絡船島のみかんも積んで来る

夜行性あり何となく灯に誘われる

吹田市 山 田 里 子

ストッキングの星きらきらと地下の街

着陸の姿勢翼に夕茜

旅に出た家の雑巾乾ききり

岡山県 福 原 悦 子

子を思う心の果てに積木積む

青空の広さ愚痴まで少し捨て

虫干しに亡母の匂いかみしめる

堺市 山 本 半 錢

ヒロインになる錯覚でドラマ見る

カラオケ熱火をつけたのは旦那様

ふるさとで先ず井戸水のうまいこと

旭川市 朝 倉 大 柏

生意気な文字を立読みから盗み

本心は訛になつてほとぼしり

聞いて来た通り伝えてうとまれる

呉市 藏 重 成 人

円高の不協和音を町で聞く

日めくりの薄さに秋の音を聞く

足跡が残らぬ街でUターン

島根県 森 山 英 子

効能書まるのみにしたる悔い

見合する度に化粧も上手くなり

大阪に住みつき方言忘れかけ

広島市 流 奈 美 子

知恵の輪にけつまずいてる指の先

幼な子の話しことばにあるポエジー

残照にゆれるこの身の影法師

箕面市 椎 江 清 芳

妻の座に個性はやけて二十年

素うどんと言えば女中は念を押し

上げ底へ名物小さくかしこまり

高槻市 芦 田 静 江

夏の浜水色のまま恋消える

揃わない一人を待って六地藏

月参りバスを見送る蟬しぐれ

茨木市 堀 良江

いやなものから食べている親ゆすり

久し振り母娘で秋の芝居見る

こんなにちはと帰ってくる嫁いだ娘

唐津市 入江 喜久夫

鼻欠けの地蔵に止まる赤トンボ

天井の鉢に残ったエビの尻尾

弁当の梅干し一つ邪魔になる

愛媛県 藤原 無想

友情のあついあいつも貧しすぎ

友情は熱く自論は別に持ち

しつとりと道玄坂の洪蛇の目

和歌山県 北山 凡太

齢だねと笑って主治医脈を診る

話すうち童顔が出るクラス会

看護婦さんに本音吐いてる患者

西宮市 上嶋 ふさ子

孫が来るあれもこれもと市場行き

熱帯夜とも知らず鳴く虫の声

大都会他人ばかりで皆孤独

山口県 高崎 雀声

秋風がはずれ馬券をもつてゆき

色々の水着干されて夏終わる

敬老の日だけ大事にする家族

桜井市 前山 美恵子

堀越えて息ひそめてる白い毬

みのむしさん急いで下さい冬仕度

泣き虫の私をいじめるメロドラマ

仲よしがコロコロかわる一年生 西宮市 木村 貴代子

仲よしの犬が三匹通園路

西瓜食う子等皆家に居りし日よ

羽曳野市 麻野 幽玄

風下と風上という運不運

距離なんか気にしていない長電話

タコ焼が食べたくなって夜の街

神戸市 大島 アサオ

冗談は一切通じぬ父なりき

はやばやとはやらぬ易者店を出し

歯の治療途中で医者が海外へ

いわき市 新井 泰子

女には惜しい女が針を持つ

また来るね胃薬を置く祖父の墓

戒名など知らぬあなたが笑ってる

ロスアンゼルス市 加藤 明美

ラスベガス夢追う人に夜はない

アメリカで隣が気になる日本人

倦怠期夫は何を考える

子の涙飲み込む母の広い海

出雲市 竹治 ちかし

父と娘の折り紙夢を包み込み
なじめない色で故里近代化

堺市 宮本 かりん

お人好しのうしろで妻のせき払い
箱入りの母へこまかく地図をかき
誕生日ぶっきらばうに手渡され

島根県 喜島 ノブ

崖の下でそば赤いへびいちご
幸せを願って今朝もあついお茶
医師の声あまえてみたい回診日

静岡県 三浦 つね

孫の描く虹が一色不足する
ポケットに葉書忘れたまま三日
いい事がありそう包丁よく喋り

愛媛県 八塚 三五島

ふと嫉妬ワイングラスをぐつとあけ
ひとこと言えば足代ぐらい負けてくれ
助けてと言わぬ女がいじらしい

高松市 竹川 憲一

絶叫の蟬を手に子の息づかい
釣具背に盗人めいて朝を出る
惜しげなく不況の店は毀される

愛媛県 石手 武

頑固者を口説く手順を考える
臆病な僕でブレーキばかり踏み

リハビリの手の平鈍く鳴るクルミ

尼崎市 小熊 江美

言い出した言葉に引けず渦に入る
船乗りは海に情熱かけて生く
一目惚れ条件などは付けません

西宮市 秋元 てる

上底の果物籠が事故見舞
ねぶたの灯心変りを悔いている
取りあえずの椅子にちよこんと母と猫

岡山県 江口 有一朗

日本晴れの空を大きく吸うて吐き
仏師の目土も仏で木も仏

中国残留孤児

私は日本人ですと中国語

鳥取県 太田 幸枝

山に抱かれて独りの旅を深く寝る
腹の底から話し胃ぶくろ軽くなり
山に肌さらして露天風呂が好き

泉佐野市 真崎 浪速子

酒煙草やめ減塩の心電図
玄関に来てます初孫のベビー靴
校庭に並んだ顔に夏光る

岡山県 後安 ふさえ

母の愛はみ出るほどの宅急便
薬包紙千羽の鶴が後三羽

罪一つ消したい願いの遍路傘

今治市 月原 つくし

過疎の地の良さ雑草がよく喋る

風の町恋の噂を聞きもらす

髪切って女多情の港町

兵庫県 奥野 テル

檜山の使者を返した退院日

古里の夢は水車と亡母の声

萩桔梗月を迎えた古机

尼崎市 佐藤 美代子

風を頼りにススキたずねておじぎされ

敬語を使って日頃のうさをはらしてる

かましい仲間が揃う古稀の膳

今治市 渡邊 伊津志

余裕なき暮し兄弟仲が良し

団体の遍路仏に気が付かず

質問を置いてから茶を出され

鳥取県 乾 喜与志

仏に会ってからわがままが止んだ

とげのあるまんまにバラは美しい

敵そかにマンション建てる地鎮祭

益田市 里本 たかし

セットした嫁の後ろ髪を見る

口数が少ない嫁が通す筋

妻と母の声が二階まで届く

京都市 小林 英子

富士山の初冠雪で夏おわる

お茶のみの枠を守って喜寿を越え

人恋し窓打つ雨に暮れる秋

堺市 小西 小雪

ワープロの手紙で無心言うてくる

バーゲンで並んでるのは男の子

話もう切れて週休二日制

岡山県 清水 悠貴女

駅までを回り道してなお無口

しがらきの狸一びき連れ帰り

側にいるだけで安らぐ父である

尼崎市 木下 義嗣

先方の都合が悪い流れ星

長女だけ親の誕生知っていた

味噌汁のしじみの味で母想う

鳥根県 小田川 智重子

ロボットの電話へ頭を下げており

神妙な顔していよう美術展

ドラマあり人それぞれの散歩道

徳島市 宮武 まつ女

お茶席のさすが淑女の彩ばかり

生きていく谷間へ埋める苦心談

ふり向けば足跡残る傷のあと

寝屋川市 太田 藍子

嫁入りの家具へ近所が品定め
自叙伝に少し作っただい場面
雑用にあこがれて見る病いの中

鳥取県 津村 八重子

汗で儲けた銭の光は曇らない
無理やりに積んだ積木のもろさ見る
断ち切れぬ絆一つのホクロ追う

高石市 宮田 純一

鶴の来るわがふるさとの観光課(鹿児島・出水)
かあさんが風邪で寝込んだ台所
露天風呂糞虫するするおりてくる

高槻市 笠松 高子

遠来の友キッチンまで来てしゃべり
秋の夜長に古い日記帳

子供達次つぎ帰ってから眠れ

泉南市 坂根 流水

欲張って帰省の荷物もてあます
孫にきくテレホンカードの使いかた
隣席に戦争語る老いっつどう

新潟県 高野 不二

カルガモがニュースになっっている平和
煙草も止めましたとは弱い意志
一番違いきれいな声が出る電話

大阪市 島路 太郎

ふる里に家なし子なし鰯雲

真帆片帆点となりゆく沖涼し
尼さまの色即是空膝に猫

唐津市 米倉 彩女

指三つ折らせる年金おりるまで
迷い蝶はなしてからの安堵感
おはぐろとんぼ花より水辺さまよえる

唐津市 筒井 朴竜

風孕む藩船紋は丸に十
中庸を保ち彼岸へ波紋避け
風神の描く紋様は虹ん浜

唐津市 山口 高明

口動く間おとなし盆の客
パパさんと呼ばれ何かと金が要り
開かずの間有って団地の昼下がり

茨木市 井上 盛雄

長電話はずむわが家の情報化
大仏の慈悲と優しい鹿の目と
四捨五入して気苦労を減らす術

八尾市 椎尾 公子

新緑に眼帯の女美しき
山の宿螢を追うてバスに乗り
親の忌に恍惚らしき人並ぶ

大阪市 横山 為子

欲得がからんで他人になり切れず
辻地蔵手向ける花も四季の色

秘密主義鍵を忘れた日の誤算

静岡市 丹羽定次

満載のチラシが主婦迷わせる

口数の多い男で煙がられ

ためらいを少しのこして手を握り

大阪市 堀口欣一

秋の夜を岡本綺堂ものがたり

鰻頭屋の主人のことを憶う秋

何やかやあって静かな秋の夢

岡山县 戸田種子

へそくりを孫の未来にかけて見る

川柳は長寿の秘訣だけ防止

夏休み終れば孫等バツと散り

出雲市 小白金房子

ゴム紐が伸びてほどよいビール腹

夏やすみ終りペース取りもどす

尼崎市 的場十四郎

良いときは家族そろってやって来る

仕事先きめて明るい窓になる

大阪市 今西静子

鋳型から出たいところを女持ち

忘れもののように朝顔のない今夏

広島市 望月はるひこ

先生と飲む盃の手が素直

カーテンの影で揺れてる自閉症

目測を誤ったのが致命傷
田舎道歌う女と行き違う

川西市 野村静雄

底辺を可愛い女で暮したい

形式にこだわり過ぎる老母いて

岡山县 平田たけよ

矢表に立って我が道見失う

両手をあげてとびこむ母のひざ

鳥取県 鈴木ふみ子

豊年だ祭太鼓を打ちに行く

蟻地獄夜の巷に穴があり

高知市 北川竹萌

栗拾う背を叩いて栗落ちる

林道の横断尺取り気をもませ

寝屋川市 井上すみれ

お姑様良妻賢母という育ち

お三時が和解のチャンスを選んで来

藤井寺市 福元みのる

包帯へ何だどしたと聞きにくる

ポックリの次にお寺はボケ封じ

河内長野市 植村喜代

駅下りて単車の走る中歩く

久しぶり暫く雨の音を聞き

鳥取県 田村きみ子

さんま焼く匂いが風と戯れる
指切りをしてから女強くなり

弘前市 真喜内 實

いっぴきのおたまじゃくしのままのよさ
透明な風が恋しい竹ゆれる

鳥取県 西川 和子

ボランテアいつも同じ顔ばかり
いつだって分った顔をして逃げる

静岡県 青柳 金吾

子が病んで母性の強さ妻に見る
恵みの雨三日続いて疎まれる

鳥取県 福田 あや子

自信過剰となりの毬が来て弾む
コスモスが追いかけてくる風の中

岡山中 牧野 秀香

炎天に蟻は避暑とも言わず耐え
カナカナの声逝く夏が惜しまれる

岡山県 後安 江山

意地張って泪は天に向いて溜め
言いわけをして疑いを深くする

岡山県 池田 半仙

世話役が引退すると又もめる
二日はよう降る雨と蔑まれ

岡山県 富坂 志重

駅前の句碑の表を走る虫

夕立の露今も梢に残ってる

豊中市 一瀬 福一

マニキュアの指で教えた天の川

無人駅崩れるように母がまつ

唐津市 浜本 治幸

逃げ道を少し残して子を叱る

胃カメラを飲んで計画立ててみよう

寝屋川市 宮崎 菜月

飽きるほど聞いた助言が役立たず

遠足はわが家の真下でお弁当

島根県 菅田 かつ子

線香の煙に蠅も目をこすり

あるときはおほほと笑って見せようか

大阪市 新井川 青舟

太陽を吸うたふとんで手足伸び

不器用に生きた証しの足の跡

大阪市 宮下 とし

指吸って今日も昼寝の保育園

誠実さ白い上衣の青年医

寝屋川市 立床 晴風

ダンブカー又かと蛙さからわす

お互いにばけて喧嘩の花咲かず

倉吉市 田中 八太朗

今更に嘘とも言えず続く嘘

同窓会昔の序列ふとかすめ

叱られた子が氣遣っている歩幅
枕木と語る兄の旅の先
米子市 川上より子

今治市 山田宝保
広重の絵は真ん中を人が行き
地に降りる天使は羽が邪魔になり
福岡市 吉川一郎

日々好日お世辞のない老妻が居て
足音が背中について責めてくる
藤井寺市 菊地繁男

扇風機一人占めてる洗い髪
駅前の交番今日も忙しそう
大阪市 榎本落児

駐在所欠伸も出ます午後三時
国宝にベタベタ貼った千杜札
唐津市 福島紀一

急がずに平均寿命までを生き
落葉ひらひら隣の柿が熟れ始め
青森県 波ただお

解説者説明もよし顔もよし
秋虫が仲間に入れてと跳んで来る
西宮市 飯森泰世

いちぢくの甘さ亡母の愛に似て
長話聞き手はすでに眠ってる
八尾市 松下蕉露

迎え火を一緒に燃やす裏長屋
貸さぬのが不義理のように言うて来る

大阪府 川原章久
一つだけのエラーなら越せる修羅の道
オムレツに特にうるさい焼加減

和歌山県 田中隆積
西宮八番丁（現一番地）を唱う
麻雀も出来ずに卒業国大生

土井たか子美人だったとうろ覚え
島根県 坂本雪路
この石につまずいたから思い出す

台所嫁とふたりの城となる
静岡県 安本孝平
仲間割れ惻巧な奴は中立派

耐えている男の胸に夢がある
八尾市 鷺見章
万歩計供に成田の守り札

秋の灯にマネキン人形の無表情
高槻市 木下越子
ザワザワと怒りが血管走り抜け

ヘソクリはこっそり教えるべきでした
大阪市 吐田純子
幸せを祈ってお腹の子の名前

言葉も背中も丸くなって老い
奈良市 井上大

せんせいお嫁に行きます森昌子
学校を建て終ったら生徒減り

八戸市 島田昭治

嘘ついて心痛んだころ恋し
足跡は間違いなかった日記つけ

島根県 岩田三和

竹くぎを打ってまあるい夢の箱
農薬をまかぬ畑へ来るつばめ

静岡県 久保きぬ

新入社浮き世の波に足をかけ
表彰を受け責任重くなり

吹田市 西岡豊

隅っこで徳利並べて意気さかん
肩書を名刺に連ね仕事せず

富田林市 大澤三四子

シャブシャブも最後茶漬欲しくなり
慶びをかくしきれない招待状

兵庫県 円増貞子

祝い酒主役は姑の背に眠る
べったんこの胸にも女の性うずく

新宮市 船越正

扇風機仕舞う場所にはストーブが
冷房が何故か良く効く赤字線

島根県 園山世似

日傘にも歳に応じた柄があり

硝子戸に写る姿も背が曲り

泉佐野市 大工静子

責任を持たされ西瓜食べ終る
初盆の亡姉に尋ねる一人言

呉市 岡田寿美礼

暑いのに猫はぐつすりどんな夢
八十は子供に返り赤うれし

鳥取県 久野野草

病院の外に明るい道見つけ
一言が生きて満場風が風ぎ

川西市 田中喜俊

世話役を下りて若さを取り戻す
おきまりの孫の自慢で友帰る

東大阪市 大平太一郎

秋来る風は空にも家計にも
童心に返ってファミコン励む祖父

橿原市 西本保夫

やっと一人になった背伸びに陽が当る
さりげない振る舞い女性を意識する

大阪市 富岡温子

日の照らぬ片側へ寄るバス座席
減塩へ気になる今日の嫁の味

八尾市 向井しづ子

ままかりの夕食ひなびて蟬しずか
しりとりでホームシックも笑い寝る

換気扇廻る台所秋刀魚かも

大阪市 喜多 佐津乃

編み込んでみようよ猫の流行る年

ひぐらしが涼しさはこぶ山の宿
送り火に庭の芙蓉母のかげ

大阪市 朝田 晃世

阿波おどりチビツ子連に拍手わく

大阪市 渡部 トキワ

長唄に年を感じぬ声の張り

修繕も効かぬ老化の術もなし
ふり返る道の長さよ八十六つ

広島市 花田 繁子

大阪市 平井 露芳

老父前立腺ガン

取り出した糸くずこれがガン組織

昼寝する見た目涼しい籐枕
そうめんの続く昼餉にうんざりし

奈良県 山村 有佳

B面がなければレコード作れない

どこからか蟬の声するビル街で
帰る度母の手料理四季の味

和歌山市 三谷 周三

食欲の秋に糖尿少し泣き

赤く咲く鶏頭たずね蛙をゆく
踊る人見ている人も浮かれてる

堺市 安西 カネ

けつまずく振りして横の肩を借り

大阪市 田中 節子

俳句作る人と隣りてバスの旅

寝苦しき夜をこおろぎが涼を呼ぶ

兵庫県 浅川 とし江

弁当と共に乗り込む鵜飼船

米子市 宮本 佳女男

三世代和合の鍵は孫が持ち

共白髪古い昔の影法師

豊中市 額田 明吉

悪童も静かに数珠繰る地藏盆

大和路の羅漢の顔も残暑焼け

熊本市 立道 善太郎

歌好きは三途の渡しで唄うだろ

しばらくは様子見ようと心電図

◆ジュニアの部

一人旅帰りは友達いっぱい

枚方市 二宮 拱子

朝ベルがなれば時計にやつあたり

枚方市 二宮 正彦

親こうこうたまにはしないとかわいそう

母の日はやっぱり花をあげるべし

夕焼けに残暑の恨みさらになし

西宮市

奥田 みつ子

虹ばかり追って女は雲を見ず

西宮市

朝山 千世子

卒都婆小町謡うて詩の秋しみじみと

羽曳野市

吉川 寿美

茄子の馬亡姑へ思いのありつたけ

鳥取県

さえき やえ

旅枕いやな自分を替えてくる

鳥取県

松下 たつみ

酸欠へ善人の息ばかり切れ

和歌山市

神平 狂虎

愛されて愛して鬼の身も細る

出雲市

板垣 夢酔

愛してるそんな安値の恋じやない

堺市

小西 小雪

さよならの手紙私に出さないで

和歌山市

西山 幸

私からの脱出木馬に跨って

米子市

青戸 田鶴

ま向うと仏のはほに笑み少し

愛媛県

藤原 無想

友情の厚いあつても貧しすぎ

唐津市

久保 正敏

妻よりも大事な時があるメガネ

米子市

政岡 日枝子

軽い気で毬は深みへ落ちていく

名古屋市

藤井 高子

本人を見捨ててカード走り出す

愛媛県

八塚 三五島

わたしが曲げて平行線を解きましよう

誘い水そんなお酒で帰られ

堺市

高橋 千万子

どん底へ落ちて豆の木植えている

大阪市

井上 白峰

孫が来て隣の幸せ聞こえます

河内長野市

植村 崑代

娘がやつとチャンスボールを選びました

寝屋川市

平松 かすみ

五十天命まだ程遠いベレー帽

鳥取県

土橋 螢

薔薇が咲いたから逢いたくなつた

鳥取県

新家 完司

摩訶不思議まめを播いたらまめのつる

平田市

久家 代仕男

虫が鳴く地殻の冷えを知らすよに

和歌山市

後藤 正子

憎しみも知らず死ぬことなどならぬ

米子市

川上 より子

荷車が少し軽くてふり返る

米子市

金山 夕子

風の街風のフアッシュン動き出す

仙台市

川村 映輝

放言はよいが大臣では困る

大阪市

川原 章久

何事も無かった顔で手を洗う

和泉市

西岡 洛醉

この寓居妻と私とききふりと

兵庫縣

北川 とみ子

働いた汗が孤独を支えている

守口市

結城 君子

鯛の居場所わからぬままに坂

静岡市

渥美 弧舟

蟬しぐれ妻と重唱して和む

徳島市

宮武 まつ女

我がままが見えぬわたしの裾さばき

鳥根県

榊原 秀子

淡々と無欲自分のおきどころ

和歌山市

福本 英子

神様がくれた横にも振れる首

和歌山市

松原 寿子

振りむけば淡い望みよむらさきよ

豊中市

上田 登志実

過去と今意識しないであるがまま

富田林市

岩田 美代

こないない月夜に明日は考えぬ

箕面市

椎江 清芳

こいさんと呼んだ婆も古希迎え

唐津市

上田 花代

石女は桃を拾って見たくなり

鳥根県

堀江 正朗

掌に夢の彩燃え胡蝶蘭

鳥根県

堀江 芳子

駆け足の秋にギブスをひきずって

佐賀県

寺中 三枝子

昭和還暦ジョーク通じぬ夫です

吹田市

後藤 火鳥

有難くポツクリ寺に経あげる

米子市

小西 雄々

芋洗ろた昔忘れぬネオン川

米子市

木村 富美子

落日をまねき返している私

新発田市

上鈴木 春枝

お料理も掃除も好きと主婦の意地

益田市 里本 たかし

柱時計が止まり母の惚け進む

岡山県 清水 悠貴女

夕焼にすっぽりはまる母子の絵

倉敷市 藤井 春日

旅に出し降る日照る日と子を案じ

大阪市 亀井 円女

年のせいで友に書く日が多くなり

宝塚市 丸山 よし津

マネキンが脱げば街には赤とんぼ

倉吉市 奥谷 弘朗

荒削りだけと情熱家で通り

豊中市 奥田 満女

夫病んで喪服の人によく出会う

愛媛県 石手 武

凝り性のカラオケ衣装まで揃え

藤井寺市 福元 稔

一生の支配する良き出合い

和歌山市 桜井 千秀

思い込むこわさ振り向くゆとりなし

今治市 矢野 佳雲

困らせてみよう息子がどうするか

羽曳野市 麻野 幽玄

一人身に成りそれからの薄化粧

米子市 光井 玲子

師を慕う心の底に亡父がいる

米子市 菅井 とも子

無人駅雪の降るのを怖れてる

岡山県 山本 玉恵

一年草小さな夢で良いという

宇口市 森川 まさお

吃水線見せて初秋の船が出る

堺市市 山本 半銭

しみの手に一キヤラットの煩惱よ

八尾市 向井 しづ子

すず虫も円高不況金切り声

弘前市 波多野 五楽庵

異次元の人に楽しい遺書をかく

倉敷市 田辺 炎六

ひもじさがあるから分る飯の味

吹田市 井上 照子

山越えて里ふりかえる決意の日

岡山県 伏見 すみれ

岩風呂にある距離を置き老夫婦

奈良市 森田 カズエ

開幕を待つ間にみてるコンバクト

大阪市 板本 仙吉郎

民謡合戦東北三県いつも勝ち

茨木市 井上 盛雄

行くところ鯉のはなし今昔

唐津市 田口 虹汀

年代が解る会話を背で聞く

唐津市 仁部 四郎

それらしい挨拶が着る夏背広

唐津市 浜本 義美

廃坑の風は乾いて人が去り

和歌山市 玉井 豊太

ヘルメット脱げば長髪喉はとけ

海南市 三宅 保

外野から眺めるゆとりありますか

鳴門市 八木 芳水
顔色を読む子にさせた2DK

和歌山市 山口 三千子
ひとねむりして切り札を考える

岡山県 松本 元江
病みたまう師の追憶に旅の宿

岡山県 千原理 恵
故郷の駅降りるいくばくかの安堵

今治市 月原 つくし
働き蜂へせめて薬酒のホームバー

吹田市 西岡 豊
この人も黙っておればいい紳士

兵庫県 東浦 砥代
余裕などない母さんの白い足袋

豊中市 中塚塚三丁目13-15
投句先 下560

橋高薫風宛(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題「酔う」 選者 橋高薫風

締切 11月10日

(ハガキに三句以内)

投句先

大阪市東区馬場町3-43 NHK
大阪放送局「さわやか広場」係

発表

11月23日(日)ラジオ第一放送
午前10時5分から

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から

仁部四郎

考えが甘かったかな秋の風

田中晴子

思わず胸をつかれるような句。一頃は、若い人の夏の行状が新聞などにもよく書かれたが、事は皮相なことではなく、またヤングだけのことでもない。敬老の日、彼岸のお中日と秋が進むと、自分が当年何歳であるかを知らされてうろたえる。

絵ばかりを描いて亡母に叱られる

高杉千歩

前の句と同じように、特に新しい発見があるという句ではないが、身につまされて、心に止まる句。父と母とは、どちらが現実主義者であるか、などと構えて読んで味のない句。

小利口の積木つんだり壊したり

河瀬芳子

秀句ではないかもしれぬ。言葉がうまく組み合わせすぎている句かもしれぬ。しかし、高校教員である私には、この句を

背後から咬かれたら、足がすくんでしまふ。
傷忘れないから四肢をこき使う

藤井高子

「四肢をこき使う」とは実に迫力のある表現に達したものである。傷はもちろん心の傷だが、その傷を受けるに至った理由は判らない。自分の責任は全くなかったかもしれぬ。そうだとすると、運動なり、労働なりで「四肢をこき使う」ことができれば、完全な眠りのなかに傷が昇華されることだろう。

倒れるところまで、大きく手を振って一直線の道を歩き続けてみたいと思うことは、再三ある。何も考えないで。

病人に雑音ひとつつきまとう

紀市郁栄

頭痛で、下痢で、小半日寝ているだけでも雑音は途切れない。うとうととした間にみる夢にも雑音がある。発生源は自分の心の底にある。Aを消し、Bを否定して残る雑音がやはりある。お前は、何をしてきたのか、これから何ができるのか、という声が残る。雑音ではもはやない声が残る。

石段の中段にいて風を読む

笠嶋恵美子

余裕を、或は貫禄を感じさせる句。実績と自信を示す句。

切ない願望を示す句。正直に不安を表明した句。

定年まで六年半の私にとっては後者の句。主婦の座がゆれると大きな音がする

山崎君子

おそらくは実感そのままの句であろう。妻であり、多分母でもある女が主婦の座で腰を浮かしては、家庭は成立しない。

しかし主婦として切れば血が出る生身の人間だから、失敗もすれば嘘もつく。家族の期待が重なることもある。その時に出る音の大きさに慌てるのは止むを得ないが、みんなで協力して早く元気になりたいものである。

馴れ馴れしい顔で督促状が来る

上田花代

逆転した心理を「馴れ馴れしい」とはうまい表現である。期待しているはずのない督促状だが、遂に来なければ、安心よりも空虚感が募ることであろう。漂い続けている義務感を、逃さじとばかりに督促状が捉えに来る時安堵も訪れる。「いまいましい」では川柳にならないことを教える句。

無駄足を踏んだが面子は立ちました

森山英子

面子などというのは最初から無駄なものさ、と言ってしまう話は全巻終了。覚悟しながら、二分ほどは期待して足を運ぶところに人生のベロソスがある。面子の味は、仁丹でもありワカモトでもありません。

ポリーナスで赤字埋めたと言う若さ

渡部トキワ

「カネオクレタノム」を卒業したらしく、親としてはやや安心というところ。

足ぶみも行進のうちあせらずに

新井朋子

無心で放った矢、正に正鵠を失わす。

◇同人アンケート

「推敲裏話」

近作の1句について、着想から
完成までの作品の生い立ちを…

担当・樫谷 寿馬

父親の意見

鳥取市 森 田 熊 生

先日子供の参観日にいじめのことが取り上げられたが、自分の子供はもちろん他人の子供でも悪いことは叱れる親になりたいし、他人の親に叱られることに素直に感謝できる親になりたいものだと言言する。帰ってからいたずらはだめだとげんこで子を叱ると作ってみる。いたずらを叱るのは当り前、下五を「子を育て」としてみる。こんどは、

「だめだ」が気になるしこれではただのスパルタ教育、「げんこ」の痛さが判る子を育て」としてみる。「子を育て」では人の子になるから「子に育て」とする。このげんこは別に叩くわけでなく教えている親の心である。げんここの痛さが判る子に育て

私の亡父若人は、人間詩である川柳には愛があり、温もりがある。本当にいい句は人の心を明るくし、ほのぼのとした心あたたまる感動を与えると教えてくれた。そんな句をめざして作句し推敲していきたいものである。

米子市 桑 原 伊 都

造花のばらで とげの重さに気づかない
丹精こめて育て上げた薔薇の花、春に咲く花はおしゃべりでもしたくなるような、希望に満ちた温かい花。そして秋は、澄み切った空気をふるわすように凜として、貴婦人にも似た気品のある花、四季折々に私の心を魅了してしまふ。私は薔薇が好きである。

薔薇にとげが無かったら……、とよく言われ、そして思うのだが、切り捨てて枯れてしまった枝でも、とげは朽ちることなく鋭さを失っていない。とげは、最後まで誇りを捨てない薔薇の意地であろうか。それとも、自身の大切なものを誰にも渡すまいとする。哀しいほどの自己防衛の習慣からであろうか。平素、薔薇の花の美しさは賞でても、薔薇

の心の葛藤まで気づくことの無かった私が、川柳を作ることによって薔薇と同じ心になりとげに刺されながらも又、薔薇を生けている今日である。

出雲市 吉岡 き み え

人の世の儚さしみじみ虫の声

五十二歳の若さで逝った友の訃をきいた夜の作句。

ほんの数カ月前に職場で親しく言葉を交したあの声、あの笑顔、面影が脳裏から離れず少なからぬショックを受けたものです。

わたしの想いに同調する如く、虫がしきりに鳴いています。そんなときの一句ですのであまり推敲もなく完成に近いように思います。(ひとりよがりかも)

強い推敲となると中八を変えてみてもと思いますが、いまのわたしにはこのままでいいように思います。

松江市 竹内 寿美子

縁あって、目の不自由な川柳のお友達に句集を読んで、それを録音して送っている。声を出して読むということは、なかなか面白いことだと思ふ。

初めはひとことのように句集を読み、それを送ることに熱中していたが、何回も読み直

し、間違ひを訂正している内に、音読ということに大変興味をもった。

音読して調子の良い句は、やはり良い句である。一句一姿というか姿が誠に美しい。音読してつかかる句は、どうも頂けない句が多いような気がする。目の不自由な友は全身で聞いておられるので、句の良し悪しに非常に敏感である。私も心して自分の句を三回声を出して読むと、こころは直した方が良く判るような気がする。音読がわたしの推敲である。

逢いたさの極まり天の大花火

和歌山市 堀 端 三 男

推敲を苦手とする私は、毎月例会の披露時に「次の句は呼名をしないで下さい」と推敲不足の例としてよく取り上げられるので、推敲裏話を語る資格は全くないのであるが、最近の出来ごとを書いて責を果したい。

七月の夜市、八月の茗人忌に「叱る」という題が出題された。普通われわれは、結果だけを見て叱ることが多いが、その過程を見てやるのが大切である。前向きに取り組んでいたとえそれが失敗であっても今後への飛躍として叱るよりも褒めてやる必要がある。そういう着想から、夜市で「叱るのはよそう受けたは向う傷」と出句したが見事に没。茗人忌には、前作を反省「受けたは」は、語呂も

おかしいし、説明になるので「叱るのはよそう向う傷だから」とすっきりさせたら見事入選を果した。とに角、遅々とはあるが、川柳を続けて行きたいと思っている。

推敲とは選択の決断か

熊本市 有 働 芳 仙

川柳の某先輩の話では、新しい表現の下五句ばかりをメモしておき自分の句作の時にその中から適確な語句を探せばよいとの事、なるほど二理あり。川柳の大半は下五句で生きている場合が少なくないからである。しかし小生は他人のお古でつきをあてるようなテクニクはどうも性に合わない。時にはあまり推敲しているが怪物のような川柳に変身してしまいくて情けない。小生にはムリだった事に気づく。近作一句NHK放送川柳課題「月」に挑戦、恐らく没になる句である。「名月に背を向け屋台のコップ酒」この光景を次の句と比較してみる。1.月を背に一人屋台のコップ酒 2.名月を背中に屋台のひとり酒 3.名月を背に屋台のコップ酒

名月と屋台は外したくないし、コップ酒にするか、ひとり酒にするか？ 何れも古くさいけど。背中か？ 背に？ 背にするか？ 迷う。いい句とはすうと何気なく口をついて出た句が生きているようだ。従って生活吟は推敲抜き生のまま投句する。課題吟は上記

のように語句の選択に迷い続ける。結局小生の推敲とは句相という天秤にかけて比重の重い方を選択する。「名月に背を向け屋台のコップ酒」に落ち着く。

京都市 松 川 杜 的

指切りげんまん赤い夕陽今落ちる

これはある小集句会で出題された「指切り」の句ですが、いろいろ想を凝らしたがなかなか句想が浮かばず、結局辞書を引いてみることにした。そこには「子供が約束のしるしとして小指を引っ掛け合うこと」、「げんまん」等の意味のことが書かれていた。そこで「指切りげんまん赤い夕陽が沈みます」という句を作り句会場に臨んだ。が読みかえすうちに余りにも平凡過ぎると気付き下五の「沈みます」を「今落ちる」と作り変えて提出した。上手下手は別として佳句に抜けた。私なりに解釈してその推敲がよかったのだと思つた次第です。

推敲のしかたには人それぞれにいろいろな方法があると思いますが、一度は辞書を引いて見ることで、下五を如何に決めるかにそのポイントがあるのでないでしょうか。

寝屋川市 江 口 度

妻の居る部屋で煙草を吸うと、両手で煙を払い、俳句仲間の○○さんも△△さんも煙草

止めはった、とうるさいことである。そこで「人は皆煙草止めたと妻が言う」と浮かんだが物足りぬ。煙草は、初めはほろ苦く、次に甘く口に融け、遂には辛く苦々しい。吸わないと欲しくなる。煙草は小悪魔、一度とりつかれると仲々離れてくれぬ。なくなれば灰皿から塵竈まで漁る。

蟹は得手で横に這う。(もっとも西表島のミナミコメツキガニは縦に這うという)が、蟹は横に這う性を抱いているので、死物狂いの努力をしても縦には歩けない。

人間も自分の性に従って、一番気に入った行動をとる。この性を変える努力をすれば、煙草は止められようが、蟹と同様俺にはとても出来そうにない。妻に小言をいわれながら一生煙草を吸いつづけることだろう。

蟹たてに歩く日煙草止めるだろう

米子市 青戸田鶴

あれこれと飾った果ての石である

「飾る」という題で出来た作品ですが、はじめは女が着飾ることばかり想いが走りまわった。でも考えてゆくうちに、ある時期には大切だったものが軽いものに見えてきたり、あれもこれも飾りに思えてくるような気がしました。苦しみをくぐりぬけてゆきついた人の淡々とした言葉が心にしみこみます。古い雑誌のグラビアに故池田総理の最後の

趣味は「石」で庭石を並べて眺めておられた一コマが、今もあざやかに浮んできます。あの石の一つ一つを、佐藤さん田中さん大平さんと見立てて眺めておられたのだろうか、私は、そう思ったことがあります。あのあと総理は前癌症状と発表があり引退、それからお亡くなりになったのも遠い日になりました。磨きかけた石でも川原の小石でも同じことなのだ、行きつくところは裸のままなのだと思います、この一句になりました。でもそれは頭の中で考えていることで、どこまで行っても飾りはとれそうにない私です。

仕事を考える

唐津市 仁部四郎

学校へらしきらしさをみな頼み

この句は「川柳塔」へ出した句ではありません。佐賀新聞の読者文芸に採られた句ですが、愛着のある句の一つです。

県立高校の教頭の三年目で、PTAの会合で短い話をする時も時にありますが、或る時「らしさ」ということで話をしました。

生徒らしさ。親らしさ。先生らしさ。考えてみると「らしさ」という言葉は、ずいぶんルーズに、また厳しく使われています。

三十分ばかりの話の内容を考える過程でできた句ですが、誤解を招く要素もある句です。川柳に心得のある人ならばそんなことはな

いと思いますが、学校が責任回避をしようとしている、というふうには解釈される余地はありそうです。

明治二年に政府が府県に小学校の設置を命じて以来、日本の学校が果してきた役割を考えてみてと自戒の句にもなりました。

句碑・句木に遺せる句を

鳥取県 中原 人

近作一句の「推敲裏話」という大きなテーマが、私ごとき小学生に降ってきた。

教えを乞うている立場の者が、悩み悩んでいる者が、他人さまに話せる筈はないのです。しかし、同じ「川柳」を生む(詠む)ならば前田伍健の「真・情・美」を心がけていきたいと努めております。

耳障りな語は避け、助詞を減らし、詩情を取り入れるようにしていることでしようか。戯れに詠む句の場合とそうでない句には、

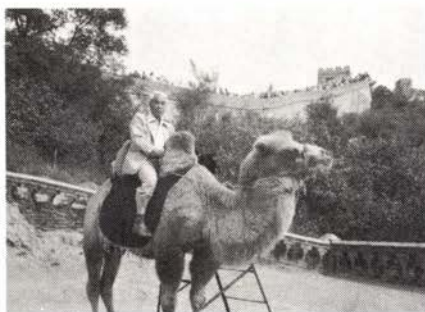
自ずと違いを持たせて作句しております。が「判り易い句作りを」と言われている昨今、勘違いをした安易な句が眼・耳を患わせてくれて、哀しくなってしまうのです。

ああでもない、こうでもないとりズムに合う適語を見つけないが、やがて句碑・句木に遺せるような作品に向けて、脳味噌との戦いを続けている「未完の譜」と記しておきます。

北京再見

東野大八

九月十八日の夜、北京空港に降りたった私は、出迎えの中国国際旅行社さし回しのマイクロバスに歩を進めながら、われ知らず中秋の中秋の明月である。皓々たるその満月を仰ぎみながら、「私は来た」とつぶやいた。まさに四十余年ぶりの北京の月であり、北京の大地なのだ。私は思わず小さく身震いした。日本語でいえば正しく「北京再見」である。しかし、七日後にはその再見も中国語で「さようなら」になる。私はツーリスト、そうだね、今度はそう私自身へうれしく語りかけた。マイクロバスの暗い窓外には、巨大なビルが黒々と次から次へたちはだかっている。ガイドによると、これらのビルのジャングルは



これはラクダ！ 万里の長城で

北京労働者らの宿舍だそうである。凄じいその北京の変貌に、私は実のところ驚愕し慄然たる想いに捉われた。四十年という重い歳月は北京の郊外の果てしなき沃野を消滅させ、そこに巨大なビルを次々と出現させたのだ。かつての日の北京は既らない——索然たる感傷とはこのことを言うのであろうか。

やがてマイクロバスの暗い行手に、赤・黄青のけばけばしい豆電燈を屋根屋根に連ねたビルが現れた。まるでそれは、日本の各街道を夜半走り回るトラック野郎たちの、紛飾された車のようになみた。ここがわれわれの今

宵の宿舍となる廻竜観飯店なのだ。

明るい角燈、華やかな朱塗の勾欄や柱に、極めて中国風な亭のある泉水。そこをそろそろと通過する私たちに、中国風の掛軸を八方に懸け連ねた工芸美術品を商う店があった。

「やあ、いらっしやい」

その表にいる一人の老紳士が私に声をかけた。私にとつての北京の第一夜は、実はこの好々爺然たる老人の日本語から始まった。

夕食後、私は独りこの店で未表装の水墨画十枚を買った。まるで新聞紙のようにそれを丸める私へ、店の例の老人がつぶやいた。

「私は大連工専を出ましたよ。日本人のいるそのころの大連は実に天国でしたな」

私の家内は大連の昭和女学校出身ですよ、と私が答えると、老人はいと懐しげに微笑し私を抱擁するような仕草をみせ、大きな傍らのソファへ招じた。交換した名刺をみると、この相手は千長金とある。「とつて七十歳」というので「私は貴方より二つ上だ」と笑えば、この老人温い手をさし出した。

「いまの北京を総括して現況はどうです」

「例の江青ら四人組が消えたが北京民衆はみなそれで疲れている。上海も広州もだ」

私は旅立ちの折にみた読書新聞のコラムを思い出した。毛沢東が死去したこの九月は、

十周忌に当るが、一片のその弔慰の「行事」すらない。北京ではいま毛の唱えたイデオロギーは影をひそめた。そのイデオロギーを唱えることはラテン語で賛美歌をうたうようなものだであった。私は干先生にそのことをいったが、彼は皮肉な微笑をたたえながら答えた。

「人に求むるより己れに求めよ論語です」
そして私達は顔を見合せて笑った。

北京なり逢う人間のあたかし 大八
幾日か北京を歩いたいま蒲島太郎にとって変らぬものは、天壇と紫禁城、そして北海公園だった。

天壇一つにしても若い頃の在北京の私の思い出は、車に積みおけで量る程ある。その懐旧は一口に語り尽せるものではない。

この天壇の下で大掛児姿の布袋さんのような一老人とあった。日本人とみれば片っ端からうまい日本語で挨拶を送る。人生は人と会って語ること尽きる。いわんや北京も例外に非ず。

「私しゃね、日本軍の太原36師団の特務をやっていますね、日本が負けた時は、両膝の震えが止まらなかった。八路の世になって私は五年間も監獄に入れられてね」とてもしんどかった。私の人生は沒有法子（仕方がないの意）の連続でしたな。気性が判ると

日本人って素敵な民族だと思いますよ」

この人の名は白振福。住所まで書いて「手紙を下さいよ」とねだった。天壇のつべんの紡錘形の影は語らず、しかしその下にこんな語りつきな貌の人間がいた。没法子の言語でその人生を諦観したその貌は菩薩だ。

「菩薩じゃないよ、私じゃ清真回教よ」

清真回教とは、即ち中国のイスラム教をいう。教祖はマホメッドだ。それなら貴方はコーランを唱えるのか、勿論……と彼は答えた。

回到に嫌いなものは豚があり 青竜刀
の大陸吟を思い出す私へ彼は敬虔に言った。

「アラーのお怒りを蒙る人々や、踏み迷う人々の道も、汝のよみし道を護り歩めしめ給う。これがコーランだ。わしは日に三度祈る」

北海の白塔ひたすら白く塗る 大八

わが老いたる哀妻の思い出深き愛惜多い公園だ。この北海公園のシンボルは白塔だ。今も青空を弾くような白色の肌をしている。北京の空で、この街の歴史を塗り替え、塗りかえたこのラマの白塔の素顔は、さてどれだけの歳月を閲していることか。その肌を撫でる掌の中に、若い若い青春の私が居た。

「你貴姓（あなたのお名前は何の意）北海

の蓮花は、人の世の現身を語りつづける」
こんなキザな言葉を吐きながら、若い私は

なややかでとろけそうな小姐の肩をひき寄せたものだ。その彼女との巫山の夢は、永楽帝の臥床のように香くわしくも柔かった。小波をたてて水面に憩うボートは今は兵衣さながらのカーキ色だったが、その彼女の頃の舟は青く白く、そして赤かった。それらを見下す大理石の橋の欄干はむかしのままで、むしろ白く蒼く輝く一方だ。茫乎たるその昔の若者は、無残やな、今は愚かな白髪鬼だ。

しかし嘆くなかれ、魯迅のこの言葉あり。

「絶望之為虚妄 正與希望相同」

絶望の虚妄なるは 正に希望とあい同じ」

この北海の水をたたえたるため、掘り下げられた土は、故宮の北に積み上げられて景山となった。李自成の農民軍の叛徒が北京へ攻めこみ紫禁城になだれ込んだ。このためこの宮廷を脱れた明の崇禎帝は、景山の木に縄をかけて死んだ。かくして明朝は滅んだ。「未来永劫二度と王家に生れたくない」と嘆いて死んだ宋の順帝の台詞を彼は痛いほど噛みしめたことであろう。私はこの皇帝縊死の景山が昔から嫌いで、今回も敬遠した。歴史の悲哀がここほど、身を責めるところがないからだ。

第2回 中国吟行の旅〈1〉

61年9月18日～24日

北京・万里の長城・大同



川柳塔社訪中の記

田中正坊

一昨年につづく第二回の川柳塔社中国吟行の旅は、九月十八日から二十四日まで七日間の日程を終え、全員無事に帰国しました。今回は、中曽根首相の訪韓にともなう航空機調整のため、帰国便が予定よりずれて一日のブレミアムがつき、出発便が台風のために約三時間おくれたこと、大同―北京間の列車の旅が航空便に変更されるなどのハプニングもありましたが、予定よりもさらに充実したスケジュールとなりました。

橋高薫風副主幹を団長とする訪中団の一行は、十八日午前九時、大阪空港に集合しましたが、出発時刻が延びたため、見送りにかけた西尾栗主幹、黒川紫香さんはじめ同人や家族と別れを惜しんだ後、午後一時十分発の日航七九三便で飛び立ちました。団員は、東野大八、宮口笛生、板尾岳人、上田佳秋、春城武庫坊・年代、田中正坊・千代子、八木千代、野村キミ、赤川菊野、藤田泰子、友碇雅子、片岡智恵子、山崎君子、奥田みつこ、秋元てる、飯西ミサヲ、小熊江美の同人・誌友と添乗員の高瀬竜二の二十一名でした。

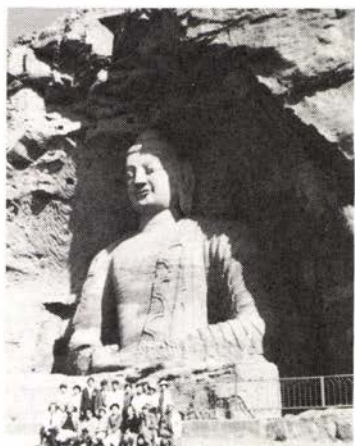
一行を乗せた日航機は午後三時三十二分、

上海空港に到着、中国民航機に乗り換え、約一時間半のフライトで午後六時四十分（日本時間七時四十分）、北京空港に着きました。

この日は、仲秋の名月にあたり、機内食に大きな月餅が出ましたが、たまたま私たちが空港に到着した時、淡いオレンジ色の満月が建物の陰からポツカリ浮かび出て、機内に歓声が上がりました。その夜は、中国国際旅行社の劉福新さんと女性の朱銘さんの出迎えを受け、北京西郊の廻竜観飯店に宿泊しました。

翌十九日は午前九時出発、万里の長城の眺めが最もすばらしい八達嶺に登り、勾配のある通路を散策して山々を縫うように連なる城壁を眺望しましたが、やはり世界の名所として知られているだけに、見学の中国人や外国人でごった返していました。次いで天寿山のふもとにある明の十三陵では、石獸・石人が両側に居並ぶ参道を通じて第十四代神宗万曆帝の陵墓で、地下宮殿で知られる定陵を見学しました。さらに北京市内への帰途、五つの塔のある真覺寺に立ち寄り、夕食後、曲芸・奇術などの雑技（サーカス）を観賞した後、稲妻が光る夜の市街を通過して宿舎の華都飯店に向かいました。

二十日も雲一つない快晴、明・清代の皇帝が五穀豊穡を祈願した祈年殿や皇穹宇、園丘のある天壇公園を見学しましたが、特に円型三層の祭壇から成る祈年殿は、梅原竜三郎が好んで描いた美しい建物として知られていま



大同の石仏をバックに

す。午後は中国のシンボルとして、国章のデザインにもなっている天安門や人民大会堂、人民英雄記念碑などがある広大な天安門前広場を経て、紫禁城とよばれる故宮に入りましたが、六十余の宮殿・楼閣のすべてを見つくることはできず、左翼門から入って大和殿・中和殿・保和殿を見学し、神武門から出て景山公園に上り、故宮全景を展望しました。そして同夜、北京駅から寝台車で大同へ向けて出発しましたが、秋天の北京を心ゆくまで満喫できた一日でした。

さて明けて二十一日午前六時、一行を乗せた列車は大同駅に到着しました。大同は山西省北部にある炭鉱の町で、北魏王朝の古都としても知られています。ここでは市内で朝食後、現地通訳の気さくな青年、孫貴さんのガイドによってバスで武州山のふもとにある中国最大の石窟寺院であり、今回のツアーのハイライトでもある雲崗石窟に向かいました。東西一キロにわたる五十三の洞窟に約五万体の仏像が刻まれ、その多くは風化がすすんでいますが、まず、高さ十七メートルの大仏が鎮座する第五窟、洞内に釈迦の一代記をレリーフに刻んだ第六窟を経て、ガイド・ブックでよく知られる第二十窟の露座の石仏に達しました。かつて大同を訪れた麻生路郎も仰ぎ見たゆかりの石仏で、これをバックに一同、記念写真に納まりました。

午後からは、スケジュールになかった渾源の懸空寺を観光することとなり、木々が黄ばむ山道を通って到着しましたが、見上げるような絶壁の中間に貼りついたように建てられた極彩色の楼閣は、想像を絶するものでした。この後、市内にある九竜壁、華嚴寺を見学しましたが、夕食時、一昨年の中国吟行に同行した故白岩文衛さんを偲んで黙禱を捧げました。

二十二日は午前七時出発、大同の軍用空港から中国人民空軍の輸送機に搭乗、北京市西郊の南苑空港に着きました。この間わずか三十五分間、寝台車の一夜の旅が嘘のようでした。午前中清時代の建物を復元した町並で書画・文具の店が並ぶ琉璃廠を見学、午後は北京銀座と言われる繁華街の王府井でショッピングを楽しみ、歴代王朝の御

苑であった五つの湖とラマ教の白塔のある北海公園に遊んだ後、レストラン全聚徳で北京ダックを賞味し、外国の賓客を接待する友誼賓館に泊まりました。

二十三日は大八先生推賞の頤和園観光。昆明湖と仏香閣など多くの楼閣が建つ万寿山から成る北京最大の公園で、アヘン戦争で焼失したのを西太后が建費費を流用して再建したことでも知られますが、東宮門から入って西太后の豪華な寝所のある樂寿堂、光緒帝が幽閉された玉瀾堂、石舫（石づくりの船）などを見学、長廊や湖畔の道を散歩しながら秋晴れのひとときを過ごしました。午後は自由行動で、一同、外国人専用の友誼商店などへ出かけました。

いよいよ最終日の二十四日、文化団体との交流ということで市内の中央部にある西長安街の文化活動中心（文化センター）を同街弁事所の任桂英さんの案内で訪問しました。館内では老人たちが麻雀にくつろぎ、習字を楽しんでいましたが、一行が訪れると、次々に「日本文化代表団」を歓迎する詩文を揮毫、薫風団長が乞われて十九日夜の光景を詠んだ「稲光天壇瞬時帽の影」の一句を書き、記念句集「川柳塔」などを贈りました。これで全行程をつがなく終って燕翔飯店で最後の昼食をとり、北京空港から日航機で一路大阪空港に向かいました。七日間を通じて終始、晴天に恵まれ、通訳や関係服務員の親切な接待

で楽しく充実した旅であったことを付記します。

麻生路郎先生曾遊の記

橘 高 薫 風

私はパールバックの作品を通して支那及び支那人の片鱗を知った。更に自ら渡して其の認識を深めたいと思った。

麻生路郎先生が、このような思いから中国へ渡られたのは四十八年前の昭和十三年で、神戸港を黒龍丸で出帆されたのが、奇しくも私たちと同じ九月十八日であった。以下はその記録の一部である。

冬着用用、相変らずの無帽、ステッキ一本の軽装で、ピストルはと聞かれたが、ステッキを振って見せ、「まさかの時にはこれで五人や七人は自信がある。それ以上なら方向転換して快速度で逃るさ」「僕はピストルを握った経験がないから、下手に振回したら、へボ将棋で敵に飛車や角を奪られるのと同じ惨めさだよ」と、自分の武器が敵の武器になることまで考えられるほど、日華事変間もない治安の不安定な頃だった。下関、大連を経て二十二日に天津着、二十四日に北京飯店に到着される。(註、今度の旅では、われわれはここで揃ってコーヒを飲んだ)

北京の見物は、先ずは紫禁城で、秋風落莫の感を深くし、その北の景山に登られた。

翌二十五日は天壇へ。明の永楽十八年に建てられた天壇は、大円樓の祈年殿で祈穀壇といい三層に築かれ、毎年正月上辛の日に五穀豊穡を祈願される。路郎先生を中に、岩崎愛二、和田黙然人、和田榮諸氏が記念撮影しておられる。次いで北海公園、白塔山へ登られた。白塔は清の順治八年の建立。

二十六日は、孔子廟、喇嘛廟から万寿山、昆明湖へ。園内は清渚と名づけ、乾隆帝以来夏は離宮として政務を見られたところである。とあって、頤和園の名称は無い。やはり、長廊を西して石舫を見られている。

路郎先生の買物は、東安市場とあって、「そこは内地の勸商場のものもとと大きなものであらゆる商品を取扱っている。雜貨屋、蔴屋、土産物屋もあれば、料理屋もある。古本屋に古道具屋、靴屋、洋服屋、写真機店など、デカデカとした色彩で一寸類がない。」と書き、毎日のように足を運んで興趣が尽きぬとあるが、じつと眺めていると大したものは見当たらないとも嘆息しておられる。また一寸壁のあるような処に出ると大きな文字で「君子自重」と書かれてあるのは、小便すべからずの意、店により「無二価」(掛値なし)と書かれていても負けてくれる店もあると。琉璃廠では、「ここは筆墨や書画の商売が揃比している。高価な筆を一、二本買わされ

て、隆福寺の緑日のをぞき、四天王寺のお彼岸を思い出した」と。

十月七日張家口を發つて大同へ向われ、翌朝のまだ明けきらぬ大同駅は霧雨が降っていて、空気の冷たさが肌に迫るとあり、ヘッドライトを頼りの自動車、城門をくぐったところで、日本兵に暗がりから誰何された。私たちには、そのようなことは勿論なく、城門、城壁の類も取り壊されていた。

先生は、まだ戦禍の渦中にある石仏にいたく感銘された様子で、「石仏寺の大石窟は約二十と無數の小仏窟とで出来ていて、その一つ一つの影像のもつ芸術的価値は旅人をして真に恍惚たらしめるものがある」と述べられ大石仏の膝の上のり写真撮影をされている。大八先生も私も、半世紀以前に恩師がまみえた石仏に相對したのである。

「栗主幹も来とおましたやろ」と思わずつぶやいたのだった。

路郎先生は、午後、洋車で大華嚴寺と九龍壁を見物されていて、殊に九龍壁は時価七十万円の価値(當時)と聞かされてびっくりの態である。

大同の夜は「湖月」という料亭。若い妓が二人ほど来たが、「大同まで流れてくるほどのもの凄さはない。バラック建のような安っぽい座敷で酒杯を手にしても一向に興味が湧かない。酒はビールのように色が濃くて舌を刺す辛さである。」と、醒めた目で、

「この酒はなんだ」ときかれる。「菊正です」と仲居が答えたので先生は苦笑された。

路郎先生の旅は、まだ蒙疆へと続き、期間も長いが、今回われわれの足跡を残した所を簡単にまとめてみた。われわれの大同の夜は第一回の旅に参加して、急逝された白岩文衛さんの冥福を祈る黙禱の晩餐だった。

北京月明

八木千代

われは雁 月の真上を渡るなり

一時間おくらせた中国時間でさへ十八時になろうというのに機内はまひるの明るさで、眼下には広大な平野や川や湖が美しく見えていても覗けばまぶしいのです。笛生さんは、「山がなくて陽が沈めない」とノートに書いておられましたが、やつとやつと雲をみつけて陽が沈んだのが十八時十七分、何から何までスケールが違うのです。隠ればしやがなく沈むに沈めなかつた太陽に同情して少し感傷的になったところに「月だ！月が見える！」の聲に窓へ眼を向けますと、月が機よりもずっと低いところに見えます。私たちはまさしく海を越えてきた鳥。このあたりからぐつと旅情が高まって月から眼が離れません。今日は九月十八日、中秋の名月です。十八

時四十分、月明の北京空港に着陸。こんどは満月を真下から見上げるのです。まるで宇宙と一体になれたような夕闇のひとつき、この感触を忘れてはならないと、バスポートをたしかめながらいよいよ二度目の中国入り、万里の長城、紫禁城……と夢はふくらみます。

出迎えの劉福新さん、朱銘さんと共にバスは高速道路を西南に向います。昔なら城壁で囲まれてのものしい城門をくぐらねば入れなかつた市街区に入り月明に美しい楊柳の並木道をまた通り抜けて西郊の廻龍觀飯店へ一時間の道。二年前の上海ではあまり見かけなかつた車のヘッドライトに緑の柳のカーテンがゆれ動きます。北京は魔法のようなやさしさで旅人を包みかけています。いま着いたばかりというのにです。赤青緑黄の電球で飾られた大きい飯店が第一夜の異国での宿舎。

その夜は田中正坊さん千代子さんの祝婚の晩餐となり、大八先生の乾杯の音頭で華やかなムードに啤酒の祝杯がづき本場の中華料理に長い箸が寄り合います。宴を終えて月の中庭にすだく虫の聲に酔心地の足どりで、これも二年ぶりの山崎君子さんと同室、方向を間違えて反対の廊下へ入る私を二人の服務員さんが「スールスー」(四六四号室)といつて笑いながら引きもどしてくれます。全然わかつていない私は「あらスルスルなの。ごめんなさいね。謝々」と悪びれず、「おやすみなさい」も日本語で。お月見のためのデザイ

トの月餅を窓辺のテーブルに供えて、それでも殊勝に日本と思える方角に掌を合せたのです。(この方向もあやふやながら)

「日本のみなさま、おやすみなさい」。

北京樂しや

野村きみ

名月も待つ你好北京入り

空港に下り立ち見上げれば折りからの名月、よくぞ来にけりテンハオ北京。

北京好日 めぐる仏の笑みに触れ精緻を極めた彫刻の一つ一つに歴史の重みを感じながら。

五万一千 こ大同の仏たち

雲崗石窟の壁一面に彫り込まれた大小の石仏、ガイドの釈迦一代へ耳を傾けながら、凡人のはかなさをかみしめます。人口百万の工業都市大同の石炭で走る蒸気機関車の汽笛のひびきが郷愁を誘います。

岩山肌ビタリと座すや懸空寺

鮮やかな古代の絵巻から抜け出たような、寺院の姿が目まぐるばいします。

そこは大同から往復四時間、アカシヤ並木を抜け、見なれぬ山岳、洞窟の棲家も珍しくきびしい現実を車窓から追いながら。

昔あらぬ素朴な人情、楊柳土塼の農村風景

なつかしく、四十余年前の鞍山牡丹江での青春時代が音もなく甦ってまいります。

それに重なる残留孤児の方々の言い知れぬ痛み、一步間違えれば私たちの運命も必死で越えた三十八度線、さまざまに風化し遠くへ去って行きます。

北京飯店のコーヒー、北京ダックでの家鴨の丸ごと、多彩なメニュー皿を廻しての目いっぱい楽しい会食。

スケジュールに追われながらあつと言つた間の一週間、名残り惜しい中国の旅に出逢つた方々の友好の面影。

そして日本人観光客へのイメージは如何なものでしょうか、少々気になる旅でもありました。

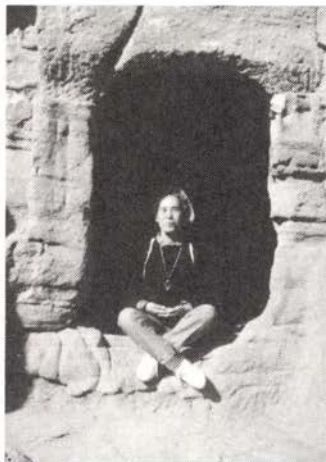
同行のみなさまありがとうございました。

謝々再見北京よさようなら

鹽 洗 水

宮 口 笛 生

色々と中国を觀て回り、その中の風变りの一つ。少々臭いお話になるが、ご辛抱をお願いする。臭い話とは便所のこと、中国の公衆便所、大の方に入口の扉の無いのが多くてご婦人は大変困る。普通、廁所と書いてある。



石窟に座し何想う…野村きみさん

また一カ所、廁所と書いてあるのも見た。万里の長城入口で、はじめて有料公衆便所なるものを知った。右側の建物有料廁所で、少し離れて左に無料廁所があった。有料は中国円一角（日本円で五円）を入口で女の人が取っていた。何故有料があるのか不思議に思われるが、無料廁所大の方には入口の扉が無い隣との仕切りはあるが、通路に向って座ると、横に座るのがある。通路に向って座ると前がまるだし。横向きの方に座るとお尻まるだし。お尻まるだしでは、女の人はこちらのこと、男性でもあまりいい姿ではない。まして出入りの多い公衆便所のこと、出る物も出ないと思う。そこで有料の方へ行くことになる。なぜ扉を付けないのか、それはわからないが、扉をつけたら有料の方、儲からないからだろうと割り切らざるを得ない。

有料で無い公衆便所では、扉の無いものが

多い。扉があっても、それは低いもので、約一米位しかない。一米もあれば十分だが、下の方三十糎位空いている。公衆便所はご婦人には苦勞の種である。

男の方で溝式の小の方の前の壁に一步前進と大きく書いてあった。日本でも足もとが濡れていると、いくら靴履きといえ、不快なものである。気を付けてちよつと前へ寄るとこぼすことが無い。一步前進とはよいアイデアであり、良き戒めだと感心した。お互い便所は美しく使用したいものと思った。

またある処では、男の小の方を小便池と書いてあった。お百姓さんが汲取口から肥桶をかついて行く姿を思い、面白いとも思った。最後に二泊したホテル、友誼賓館一階ロビーの隅に、鹽洗水と書いてあり誰も便所とは思わない。女の方は洗濯場所だと思ひ、洗濯物

近畿文字放送作品募集

題 「朝」 森中 恵美子選

3句 締切 11月5日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい

〒540 大阪市東区谷町2丁目36

大手前ウサミビル3階

近畿文字放送 川柳係

を持って行ったら便所とわかった。きれいな水洗便所であった。盥洗水とはどういう意味か、現地案内の方に聞けばよかったのに、東野大八先生にもわからなかった。色々とあらぬ想像をして先生とふくみ笑いをした。

夜行列車で大同へ

春 城 年 代

北京の北西、内蒙古への入口にある大同へは火車（汽車）で七、八時間もかかる。

リュックをかついで少々グロッキー気味の一行は、北京駅の雑踏で、はぐれまいと必死だった。敗戦で引き揚げた人から、そんな生ぬるいものではないと叱られるかもしれないが、中国の人達にまじってうす暗い駅の混雑の中になると、四十年前の引き揚げ風景？が重なる感無量であった。

寝台車は二段ベッドが両側に二つ、四人の個室になっていて、下段に千代さんと君子さん、上段に菊野さんと私。疲れ過ると眠れないもので、快い火車のゆれに身を委ねて何とかねむりたいのにガタン、ガクンと賑やかなこと。いくつ駅に止まったやら、深夜にたくさんの声呼び合うようだ。駅名を叫んでいるのだろうか、旅立つ人との別れを惜しむようにも聞こえて真夜中の大平原をゆく今、



日中友好のひととき

平和の中で、またしても兵隊の輸送と重なってくる。殆んど眠れないで、白々と明け初める頃、大同に着く。

雲崗石窟、懸空寺、その他は同行の人達の筆に待むとして、バスの長い道は素朴な単調な風景が続いて、炭鉱に勤務する人達の住居か、土と石で固めた家々が、小さな群落を成し、稗や粟や貧相な野菜を作っている暮らしは原始的で、同じ時代に生きているとはとうてい考えられない。

今、ペンを走らせていると、見はるかす土と岩石の風景に落ちていったあの大きな赫い

昭和61年度 大阪文化祭

第38回 川柳大会

日時 昭和61年11月15日(土) 11時開場

会場 大阪市中央公会堂中集会室

地下鉄・京阪「淀屋橋」下車

宿題 「近い」 鍋島 十歩選

「巧」 久保田寿界選

「望」 西田柳宏子選

「音」 清水 斗升選

「時事雑詠」 広瀬 反省選

「懐」 榎本 聡夢選

席題 当日2題

各題2句 締切1時

出句は出席者に限る

賞 費 五百円(作品集代を含む)

各題秀句に大阪府知事・大阪市長、府・市教育委員長から「川

柳賞」を贈呈

主催 大 阪 市 府

大 阪 市 府

大阪府教育委員会

大阪市教育委員会

大阪府教育委員会

大阪市教育委員会

太陽がひとつのものであることも不思議に思われて来る。

黙々と農夫大地に碑を打つ
幾たびの戦いの跡か土けむり

大同雑感

春城武庫坊

雲崗石窟の大石仏群に出会った興奮を積んでバスは一路大同市内に戻る。

ヒンズウの神が仏と握手する
釈尊の一代記あり石語る

途中石炭を積んだ馬車が次々と通って行く。大同市は石炭の産地としても有名である。炭層が二十米もあるとか、所々に坑口らしきものが見受けられ、石炭利用の水力発電所が操業しているが、未だ公害には触れていない。

大同は二千年の歴史を持ち雲崗石窟は五世紀の頃から作られたことである。古き歴史とエネルギー供給とを持つ街の中心街は活況を呈している。懸空寺に向う我々のバスは旧城壁を見ながら東へ東へと走る。通訳の孫さんがカセットを取り出してバスの中に中国の音楽が流れ始めた。聞けば『隋唐古韵』と隋唐時代の楽譜を探し出し楽器を復元しての演奏で何とも言えぬゆつたりした琴のような調べが胸を打つ。

隋唐のしるべ庶民によみがえる
古代音楽 秋の光にとけ込みぬ

生活面の質の向上だけでなく文化面に於て特に古代文化の研究に努力している中国の姿勢を我々も大いに学ぶべきであると思った。

夢の一週間

藤田泰子

青春時代バール・バックの「大地」を読んだ、その舞台である中国を肉眼で見たいというのが長い間の夢でした。

川柳塔で中国行きの発表があったとき、夫の手術、娘二人の出産等が重なり、今回は諦めるより他はないと思っておりましたのに、みな順調に健康を取り戻してくれ、一昨年に続いて参加させていただいたのは、とても幸せなことでした。

あこがれの中国の名所旧跡の素晴らしさとはもとより、その道すがら、バスの窓からみえる牛や馬、羊、豚などが自由に遊ぶ草原、石炭を満載して走るトラックの列、煙を吐いて走る汽車、まだのろし台が残っている村落、煉瓦作りの民家、堤防のない河、素朴で人なつっこい農民の顔、みないとおしく、私もひたすら、生きていくものの原点が、その大地に

ありました。

北京の街は、御堂筋の二倍はあろうかと思うほど広い幅の直線道路が通り、あちこちに昔の名残りの城壁があり、私の想像していた北京とは比べようのないほど素敵な街でした。そしてもうひとつのたのしみ、おみやげに陶器や絹製品等、「こんなに安くていいのかしら」と、罪悪感のようなものを感じながらスウィーツを満林にして機上の人となりました。

私「ただいま、長い間留守にしていたてこめんね。淋しかった」
夫「淋しいことはなかったけど、不便やっただ」

淋しいと言えば、次の中国旅行は止めようと思っていたけれど、不便なだけなら良かったと、少し心が軽くなり、もう、次の中国行きに心を馳せながら、旅装を解きました。とても短い一週間の夢でした。

カット／友庭雅子

平野百合子氏（兵庫県篠山町）

金一封拝受致しました

より

川柳塔社

俳句人口・川柳人口

竹内 紫 鏡

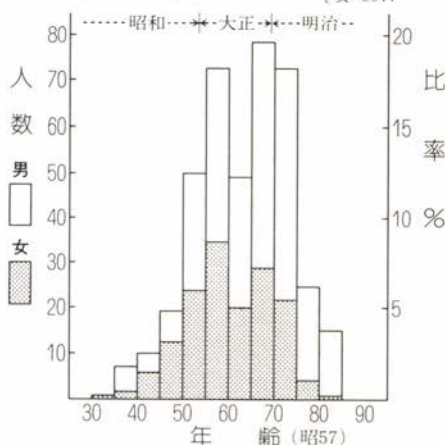
一、俳人の年齢

俳句人口は年々増えており、今年のある書物で二百万から三百万、ある講演で五百万から六百万と報じてあった。筆者が職場の文化会の取りまとめをした頃、句会に集まる十数人の社員とか、俳句雑誌を購読する何人とか、さらに指導者とかで、年期的差があったから、そういう同好会の全国累計が出来るとしても仕切り方で百万、十万、一万といった人数の差が現われそうに思う。そんな集計作業を誰もやるまいけれど……。

しかし、居住地の中高年を中心にした趣味のサークルの推移とか、全国的資料を基にグラフになる長期的なデータを得たいと思つた。

〈図1〉俳人協会会員〔大阪府〕

調査対象者 401人、平均年齢 63.6 {男 65.5 女 60.7}



まず、一流俳人の会（俳人協会、現在約八千名）がある。それは、結社ごとに主幹が推せんした同人達が登録されたもので、世間一般の俳人（入門者を含めた）一千人の中、二人の割合らしい。同協会の名鑑（昭五七）には、氏名、俳号、生年月日、所属結社名、学歴、職業、句集名あれば、代表作品三句などの個人記録が、府県別に編集されている。筆者はグラフを作ろうと考え、大阪府在住者の四〇一人について生年別に数え上げたのが図1である。女性が占める率は若い層が高く、平均年齢も女性が男より五歳低い。明治大正のころ俳句は男がやるものとされていた、

そんな影響であらう。

昭和六〇年の同協会会員数は七四八六人に増えており、内容を大まかに紹介した会報がある。

六〇代 三三・一%、七〇代 二五・四%
五〇代 一三・四%、八〇代 六・七%
という順である。男女の比率は、全体でみて六〇対四〇であるという。府県別、男女別の集計もあつて、

- 1、東京都 一四四二人 男性四八%
- 2、神奈川県 六三五人 " 五九%
- 3、大阪府 五九九人 " 五四%

（以下略）の順である。東京は女性が優勢であり、大都市の方が全国平均値よりも女性が多い様子がある。

ここまでは、集計の作業はそう苦にならなかった。ところどころに知人の名前や作品が現れ、楽しめたからである。筆者も十年前までN誌に投稿していた関係で、毎月目にふれた個性的作家や、特徴ある雅号を思い出した。自分が懸命に作句した頃の秀句は、十年後にも「見た憶え」が残るものである。

それから、昭和六十一年現在で九四歳の山口青邨、八六歳の中村汀女の両先生が元気で選句を続けていることは、六〇代、七〇代の多数の高弟が精進して来たことと無関係ではあるまい。

何によらず、先達が良い手本を見せて

くれることと、雑誌の確実な発行は、人を引く。それと同時に選者という生き字引の中に蓄積されているものは何か、という点にも興味がわく。

二、川柳人年齢

右の俳人の記録は、人数を一番しばった場合だろうが、これに似た川柳界の資料を、私は寡聞にして知らない。川柳人口は、大ざっぱに言って、俳句人口の十分の一だと、昔から言われてきた由。実作者の数は、今日三万から五万と思う……と、これは薫風さんの言である。人数が急に増えてきたことは確かであり、その原因が新聞の川柳欄、テレビ放映の人氣、その他都会のカルチャー行事の普及などにある。

筆者は川柳作家の年齢分布とその推移について知りたいと思った。しかし全国の人数を知らないので、大変な仕事だろうし、まして年齢構成となると、一結社の同人に限っても面倒な話らしい。地方においては、原簿台帳の類は遠い存在だし、私の望みの棒グラフ（例えば十年前との比較）は得られない。

しかし、面白い記録があった。故清水白柳氏の、生まれ月別の『川柳人の暦』が昭和四十六年の『川柳塔』に、一年にわたって掲載されており、それには七百余数名の作家の生年月日と代表作が載っていた。白柳氏の遺稿を編集部が整理したが、『川柳人』の選定と

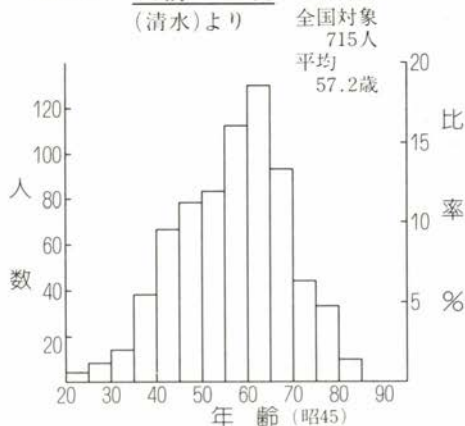
か代表句を採択した基準については、当時も分かっている。

筆者が、この記事（前年に脱稿か）から生年別に集計して、五年刻みの年令別グラフを作ったら、図2のようになった。平均年齢は五七・二歳（昭和四十五年現在）であり、最年長は明治十四年生れて、最年少は昭和二十五年生れてである。なお、作品と氏名から男女の区別を、私なりに察して数えたら男八二％女一八％という比率であった。念のためいうが、生年月日の不明な人は載っていない。

鑑賞を中心にした書物に、作家の人物史を

〈図2〉 川柳人の暦

（清水）より



織り込んだ記録もある。山村祐・坂本幸四郎著『現代川柳の鑑賞』（昭五六）には、六十人の作家の秀句と発表した年が大体載っている。女性作家に遠慮してか、生年不明の人もある。私の関心は、「大家が名句を詠んだ齢」を知ることだが、それは後日のテーマにしたい。

図1、図2をもつ一度見ていただくが、こんなグラフが出来た、というだけのことである。興味をもつ人もあろうが、「それがどうした」と言う人もあるに違いない。

筆者は、ある同好会（随筆、弓道、コーラス、焼きもの等で中高年の集まり）の、ここ十年間の推移を関係者に訊いているが、数字で変化をつかむのは難しい。

清水白柳氏の遺稿も、それは大変な労作だったと思う。五百人から千人といった大勢の資料をそろえるのは、足と時間も必要であろう。われわれも毎月来る川柳誌・俳誌に目を通すだけで、女性作家の増加はわかる。また同じ名が五年、十年と載り続ければ、平均年齢も当然高くなるはずである。そして仲間と一緒に美しく老いてゆくのは、心強きもある。

この辺の事情は、プロスポーツマンの現役年齢の幅が固定している状況とは全く違う。文芸作品の方は当分は、増員と老齢化が並行して進むだろうが、あと二十年もたった時、会員数のグラフはどうなるであろうか。

初歩教室

題 — 冗談 —

阿 萬 萬 的

冗談と言へば皮肉とは隣り合せにあるようなもので川柳には作り易いと思つたのですが案外そうでもなかつたようです。

冗談の中の本音を見すかされ

冗談と言つてゐるけれど本気らし

(本當のことがちらちらするジョーク)

本音かも知れぬジョークへ嫉妬する

冗談の奥で野心がちらちらと

(冗談の奥で野心が見えかくれ)

冗談に自惚過剰の顔を出し

(冗談にも自信過剰の男の目)

肩書が消えて冗談辛辣に

ハイミスの眼は冗談と思へない

だが冗談にも皮肉や棘がある時も……

冗談も棘を含めば座がしらけ

冗談の中に隠したバラの棘

冗談に本音の棘が見えかくれ

冗談ではとても済ませぬ棘があり

冗談にくるんだ針が胸を刺し

冗談を目が笑わずに言つてゐる
(正座崩さすギクツと胸を刺す冗句)
ほとんど同じような句、他人様の句と比べ
て、自分の句が勝つたかな。
そして冗談が過ぎると――

冗談が過ぎて白けた同窓会

冗談が過ぎてチャンスをとるそこね

冗談が過ぎるとコント毀れだす

冗談が過ぎて空気が重くなる

冗談が過ぎて嫌味に聞こえます

下五聞こえますを「なる話」としては如何

冗談が過ぎてひっこみづらくなり

冗談が好きで本音が消えてます

冗談が過ぎて結局座が白け

(駄洒落冗談だんだん白けた酒の席)

冗談が過ぎて男が軽く見え

冗談が好きで話がすすまない

(冗談冗談軽い男と見透かされ)

男女関係では冗談も程々にしておかないと

真に受けた冗談からの片想い

冗談が本気になる日の怖さ

冗談を本気にさせた罪なひと

冗談で済まぬ一言気が滅入る

冗談に書いた手紙へ女来る

(結局は冗談女に疵をつけ)

冗談がふつと女の過去にふれ

冗談を真に受けた後に笑い

(冗談を真に受け苦し茶をすすする)

冗談を真に受けられて見る鏡

(冗談を真に受けられた眼のやり場)
冗談も素直に受け取つてくれればよいが、
冗談が解せぬ明治はただ黙り
冗談に解釈のいる固い父
冗談も言えぬ男の意地つ張り
冗談が言えぬお人座が白け
ワテンソボ遅れて冗談だと分り
冗談は社交上の一つの小道具かもね。

冗談に相槌打つて如才なし

冗談が出るとお膝も崩れて来

冗談を交えて攻める手を使う

冗談を器用にこなす話つけ

冗談の声にくるんでプロポーズ

難問も女が冗談解釈す

(女将が言う冗談軽く身をかわし)

ほとほとどの冗談に座が盛り上り

(冗談もほとんど仲居はあいそよく)

冗談ばかり飛ばして本心つかませず

冗談ばかり言つても男に心がかり

又、話題を変える動機としての冗談も……

顔色を見て冗談にすり替える

ピンチにはスルリジョークで切抜ける

(ピンチには軽い冗句で女去る)

恐い顔されて冗談あとが出る

顔色を見て冗談だよと逃げる

断わられそうで冗談だと逃げる

冗談よとすぐ向きかえる肝つ玉

冗談に酔つて直にさる酒の精

(酒のせいにして冗談にすりかえる)

すみれ
都羊
種子
遊光
奈美子

勝美

芳水

凡太

久留美

カネ

周三

ツヤ子

千世子

昭治

てる

直子

悦子

やすお

奈美子

美恵子

太一郎

遊光

種子

遊光

奈美子

美恵子

太一郎

遊光

遊光

冗談から友情が崩れることもあるのですよ

冗談がブライバシーに触れたがり 種子

冗談の障に見えてる落し穴 保

冗談で言った言葉で友が去り 温子

冗談のもつていがむ酒の席 市雄

冗談が本気になって座が白け みのる

又、友情を温めてくれる冗談も

冗談をどこん言える友が居る やすお

四面楚歌でも冗談言える友の情 方子

ここでガラッとなった冗談を……

取調べ室の冗談通じない 太郎

税務署で冗談言えてボロを出し 東雲

(税務署で冗談が過ぎボロも出し)

腕白も教師のジョークに乗りたがり 信子

恩師先ず笑いを誘いクラス会 弧秀

(クラス会恩師の冗談から笑い)

冗談の中でも女は扱いにくいものらしく

冗談を本気で妻のふくれ顔 山久

お婆ちゃん冗談交りに言ういや味 千代女

冗談で女は絶対妥協せぬ 隆積

(冗談では妥協せぬ妻もて余し)

冗談よと言いつつ目には角が見え 円女

(冗談よと言いつつ女の目がきつい)

末っ子や孫の冗談が一家を明るくします

末っ子の冗談父は待っていた 隆積

冗談を飛ばす孫へと家族の輪 弧秀

冗談と思う途端に孫の便 八重子

冗談も言える位に成長し 善太郎

(冗談少々言えるくらに孫育ち)

病人も冗談の一つも出るようになる

冗談も言えて床上げ待つばかり みのる

病人に冗談が出ればしめたもの 登美子

冗談でうつ吹っ飛ばすお医者さん 博子

(お医者さんの冗談患者を笑わせて)

冗談が空しく響く白ベッド 博子

(冗談さえ空しく白いベッドかな)

冗談が出る老夫婦は明るく微笑ましいです

冗談が言える夫婦のお味噌汁 実男

冗談をまぜると夫にも礼が言え 志重

冗談を巧みに交す老夫婦 円女

(冗談交わす老夫婦に秋まだぬくい)

冗談は今日は言わない二人きり 悦子

冗談も言えて気楽に生きてます かつみ

冗談の一つも言えて未だ老いず 勝美

冗談も言えて楽しい共白髪 吟平

(冗談も少々言えていい夫婦)

冗談をとばしてまいるい家の入 美恵子

冗談も軽く交して暮る五年 克子

冗談さへ今では亡夫の思い出に サワ子

それでは最後にもろもろの冗談を

冗談にストレス混ざる処世術 金吾

(冗談でストレス消すのも処世術)

へボ基連冗談ばかり言い放題 吟平

(冗談ばかり言つてへボ基が進まない)

冗談を袂に入れて寄席を出る 豊太

冗談が焼棒杭に火をつける 颯云児

花束のリボンがきつい冗談言つ たかし

(花束の赤いリボンが言う冗言)

冗談で生きてるような親がおる

冗談が言える相手の無い独り 東雲

金平糖ジョークで包み丸くする 都羊

貝の蓋軽いジョークも受けつけぬ 直子

冗談に尾鰭がついて村は湧き 克子

冗談も言えぬ位の負けつぶり 繁男

芋の葉に眩しい冗言が転んでる 善太郎

冗談を言つたてこ焼買わされる 寿美子

冗談もつまみが口説くのも上手 はお

冗談の中で不倫を匂わせる 兼治郎

冗談とさりと流して笑える カネ

冗談に混ざる娘の生活苦 豊太

冗談を母は本気で心配し 節子

冗談も笑ってすむ日とすまない日 志重

冗談が多過ぎますと喉仏 喜代子

冗談が多過ぎますと喉仏 章久

冗談でなかったきよしの立候補 よし津

冗談が本気が揺れるイヤリング 白峰

冗談の言えぬ男に嫁が来た 喜与志

冗談も言えぬ女の車間距離 白峰

夏バテで下手な冗談汗も出ず 明吉

冗談でかけた椅子からおりられず 久子

題「自立」 11月10日締切(1月号発表)

ハガキに5句以内

「言い訳」12月10日締切(2月号発表)

宛先 〒598 泉佐野市中庄一〇八一—九九

阿萬 萬的

紋

植山武助選

新築へ家紋の額を買い換える 博文
しきたりと家紋に耐えて生きた老母 玉恵
隅っこに男が掛かる衣紋掛け 鯨虎狼
紋服の折目折目の泣き笑い 寿恵子
ケロイドの波紋を知らぬ深海魚 正敏
風紋は砂丘を飾る風物詩 弘朗
さりげなく漏らす言葉に浮く波紋 狸村
月並みの紋がよく出る貸衣装 新造
現代の葵の紋はマネーかも 一郎
一言に心の波紋広がりぬ 美穂子
紋付に似合う言葉を選っている 高子
三歳で家紋を背負う初舞台 佳雲
紋付を着れば静かな老いとなる 重信
紋付ではしゃいで見せる外人さん 弧秀
離婚した波紋が猫にまで響き 明水
紋付をぬいでうれしい祝い酒 不二
重文の家紋重たい老父の肩 正坊
三代ののれんを守る女紋 可住
肩書の波紋は風に乗れたがる 可住
紋付の主役へ手を焼く七五三 森脇和子
哀しみに乗れる家紋の鯨幕 枯梢
風紋がはかない造形描く砂丘 どんたく

世に媚びるときから家紋みがきたず 緑良
説明を抜くと波紋が広くなる 米朝
自慢する家紋へ婿が来てくれず 雄々
減船の波紋に北が飢えてゆく 大柏
青空へ雲が描いた秋の紋 有一朗
義理一つ欠いた波紋が大きすぎ 山久
土産品武将の紋の包み紙 木魚
時流には勝てず老舗の紋を閉じ 忠三
耐えてきた明治の枯れた紋が生き 智恵子
許されぬ事のあまりに多い紋 まつ女
馴れ合いのムード波紋の石となり 裕
由緒ある家紋の墓地在り果てて 素身郎
寡婦なるが故の波紋の金魚鉢 三五島
風紋に残る夜半の風の私語 千秀
家紋背に姑に終りのないいくさ 文平
佳
薄幸の父の遺影に紋を着せ 雅風
銃身の紋を削った敗戦記 白峰
放言の波紋日本に抱く不信 代仕男
一族がみなぶらさがっている家紋 たつみ
士族という小さな驕りを持つ家紋 雀踊子
人
遺言に知らぬ女がいる波紋 砥代
家紋守る男についた猫背ぐせ 京子
天
紺碧の海に波紋を描く海女 清芳
軸
紋付より少し下って妻がいる

他人

久保正敏選

他人みな美男に見える倦怠期 砥代
他人様が覗くといやな台所 勝美
真夜中の火の手笑って見る他人 兼治郎
菜箸の紐が他人にしてくれぬ 芳子
他人様の気持がわかる苦勞人 米朝
サラリーマンランチタイムの皆他人 弧秀
苦勞しているとは他人見てくれず 三吉
中流の顔で他人と保つ距離 ちかし
同じこと他人が言えば腹がたち 代仕男
仕合せに浸って他人が見えない日 實
他人ではないなと思う二人連れ 元江
ひと言が背中合せになる他人 あき
人様が見る程溜めてないわが家 素身郎
心から相談出来る他人がいる 達子
中卒へ他人の飯は冷たすぎ 花代
口きかぬ妻が他人に見えてくる 一郎
ボロ儲け他人に話すはずが無い ちよ
お隣と身内のようなおつきあい 晩明
父兄会他人のような子のそぶり 山久
花芯には触れず他人の風に乗る 玉恵
吊革で他人の袴を見るラッシュ 宵明
相部屋の他人同士が同じ趣味 狸村

誘拐をする叔父さんはもう他人

師の影をふまぬ教えをあざ笑い　どんたく

輓
ゆく秋を教えて虫の声ほそる

柳界展望

集録・板尾岳人

★木野由紀子「しろつめ草」

発刊記念川柳大会

日・11月24日 AM10時

所・名張市市民会館（近鉄

名張駅下車歩10分）

宿題と選者

舞 新 久代選

許す 保地 桂水選

絵 矢須岡 信選

表 前田美己代選

楽器 曾根 幸広選

童話 龜山 恭太選

毒 森中恵美子選

暗号 北川絢一郎選

旅 奥田 白虎選

各題2句・投句拝辞

会費三千円・懇親宴三千五

百円

主催・番傘桔梗川柳会

★美濃市文化祭協賛川柳大

会

日・11月9日（日）AM10時

所・美濃商工会議所

宿題と選者（各題2句）

愚痴 高島 一郎選

積む 加藤 映桂選

先手 青木 惜春選

せつから 寺井 吟星選

執念 小林 法泉選

無駄口 田中 明治選

約束 野口 初枝選

会費・参千円

主催・あゆみ川柳社

★第9回ますかつと川柳大

会

日・12月7日（日）AM10時

所・岡山市中央公民館

宿題と選者

燃える

西 山茶花選

おかやま 土居 哲秋選

架橋 永井 行平選

躍進 山田 止水選

マスカット 小川 糸柳選

講演「風騒ぐ山河」をかい

て 高見賢二氏

会費一五〇〇円 各題2句

主催・川柳岡山社

★都大路川柳社100号記念誌

上川柳大会

宿題と選者 各題2句

父 天根 夢草選

距離 伊藤 入仙選

吹く 橘高 薫風選

珈琲 保木 寿選

人魚 堀 豊次選

舞踏会 森中恵美子選

百 田中 秀果選

締切11月15日必着・投句料

千円・62年2月号にて発表

投句用紙自由各題2句

投句先〒683京都府北區紫野

北舟岡町一・奥山晴生方

都大路川柳社誌上川柳大会

係

★第15回清明賞作品募集

未発表作品2句

締切11月10日必着・ハガキ

に雑詠2句・投句料不要

投句先〒860熊本市南熊本四

一―二五 吉岡茂緒方、川

柳噴煙吟社清明賞係

★第8回誌上競選作品募集

題「青」・「雑詠」各題5句

計10句を連記のこと

選者→清原理川・檜崎進弘

渡辺和尾 用紙B5程度に

連記・未発表作品・参加料

千円・締切11月30日

年賀広告受付!!

★一口千円（23cm×7cm大）

（本誌、柳界展望の一段Ⅱ、五〇〇円）

★原稿締切・11月25日必着

★送り先

〒581 八尾市中田二―三〇二 高杉鬼遊方

川柳塔社会計室

★新年号特集★

川柳塔社同人総参加（二人二句）

「私の一句」

（今年中に発表されたもの）

●締切 十一月二十五日着便まで

投句先〒683名古屋市東区矢

田町6―10アインス内・佐

藤桃子

★熊本テレホン川柳教室第

21回に「麻生路郎の作品」

を紹介

「俺に似て俺に似るなと子

る孤独

を思ひ」「行末はどうあろ

うとも火の如し」他三句

★岐阜市文芸祭川柳部門入

選句

市長賞 中島みよき

妻がいて子がいって老いにあ

市教委賞 林茂子

七輪でサンマを焼くと亡母に会う

文芸祭賞 太田翠山

童謡の一つ一つに母がいる

★藤川良子句集

『さくら・ちりちり』

序文

大森風来子

跋

寺尾 俊平

句評

橘高 薫風

12月7日第9回ますかつと

川柳大会に句集出版祝賀会

をかねて行われます。

▽お便り及び消息△

■弓削川柳小径に田中好啓氏（ふあうすと社）が句碑を建立された。

■北野久子さん（同人）義父辰造氏9月11日逝去。81歳。謹悼。

■室田千尋氏（ふあうすと社）10月5日AM7時25分自宅にて死去。本社より薫風武庫坊・岳人が葬儀に参列

戒名・広善法照信士

■このたび大阪市交通局高速運輸部を定年退職いたしました。（塩満 敏）

■お盆の前から正朗入院いたしまして盆の13日開腹手術しましたが、順調に快復しておりますが、退院、十年前の胃潰瘍の時と十年の開きの大きさをつくづく考えさせられました。

（堀江 芳子）

■谷真風氏（本社同人）は本名信夫に雅号を改名

新同人紹介

井上盛雄

一葉・薫風・鬼遊・白溪子・逸推薦

瀬尾六郎太

一葉・紫香・薫風推薦

渥美孤秀

一葉・紫香・薫風・鬼遊推薦

上田佳秋

一葉・紫香・武庫坊推薦

俊平さんのところを覗いてみませんか

寺尾俊平句集「葦川」

発刊記念川柳大会

日時 昭和61年11月2日（日）9時開場
会場 岡山ロイヤルホテル
岡山市総町2-4
電話（0862）54-11155
（岡山駅西口より徒歩10分）

会費 一、五〇〇円（昼食別・発表誌呈）
柘馬40分・在野学 石田 柘馬氏

課題 「疵（傷・創）」 藤川 良子選
「禱（祈り）」 長町 一吹選
「諸君」 小島 蘭幸選
「雲」 森本夷一郎選
「白い風景」 渡辺 和尾選
「燭」 八木 千代選
「蒼天」 酒谷 愛郷選
「權」 森中恵美子選

懇親会 五、〇〇〇円（当日受付）
11時半〆切・欠席投句拝辞

宿泊申込み・お問合せは
〒709-04 岡山県和気郡和気町日室90-1

石部 明

電話（08699）2-0768

主催 「俊平さんのところを覗いて

みませんか」をすすめる会

昭和61年度

川柳塔社同人総会

61年10月5日

昭和61年度川柳塔社同人総会は秋晴れの10月5日(日)メンズファッションセンターで午後2時開会。西田柳宏子氏司会です。議長に西尾栗主幹を選出、議事に移る。

ロ会計報告 (高杉鬼遊)

損益計算書、貸借対照表につき詳細の報告あり。前年同様、今後とも同人・誌友拡張の努力が望まれる。

ロ事業経過報告 (榎谷寿馬)

〈事業〉

60年10月・同人総会(6日メンズファッションセンター)

12月・14日川柳塔唐津支部結成3周年記念川柳大会へ副主幹以下13名参加

12月・NHK新番組「近畿文字放送」の川柳選者に薫風副主幹就任

61年1月・15日新春おめでとう会(大成閣)

〃・栗主幹夫妻NHKTVお達者くら

ぶに出演

2月・17日中島生々庵名誉会長逝去。19日大阪市西区阿弥陀池・和光殿にて告別式

3月・栗、薫風、柳宏子、鬼遊、智子、可住、由多香NHK川柳教室の指導者に

4月・7日中島生々庵追悼句会

6月・第10回全日本川柳大会(別府)へ選者野村太茂津他参加

7月・4、5日第一回勉強会(サンビ

千鳥羽)

9月・栗主幹第一回国民文化祭川柳大会の選者に決定

〃・18日・24日第二回中国吟行の旅

団長薫風副主幹以下21名

〈受賞・句集発刊・句碑建立〉

西口いわゑ 兵庫県文化祭川柳大会で毎日新聞社賞

森井 善居・小島蘭幸両氏 中国郵便局賞

赤川 菊野 高知県文芸奨励賞(川柳部門)

山本規不風 京都市傷痍軍人会賞

春城 年代 60年度紋太賞受賞

松原 寿子 60年度ときせん準賞受賞

林荒介・渡辺善句・林瑞枝・政岡日枝子

毎日とつとり柳壇年度賞受賞

61年度唐津市文化祭参加

川柳大会

日時 昭和61年11月9日(日)11時開場
場所 唐津市文化会館大会議室
(唐津神社横)

題と選者

錨	大城 俊文選
噂	古川 静江選
きまぐれ	撫尾 清明選
鬼	田口 虹汀選
油断	野村太茂津選
汗	西尾 栗選
欲	参加者で互選

◇各題とも事前投句(締切りました)
◇当日会費一、〇〇〇円
(昼食・大会誌呈)

◇連絡先 川柳塔唐津支部

(久保 正敏)

新家 完司 60年度川柳研究年度賞受賞

林 はつ枝 紋太忌川柳大会神戸新聞社賞受賞

長野 文庫 「川柳の流れ」発刊

故白岩文衛 句碑建立(大原町宮本)

《物語者》

浦野 和子(60・8・19)
落合 正江(60・9・16)
白岩 文衛(61・1・1)
中島生々庵(61・2・17)
吉岡 通児(61・4・4)
国弘半休門(61・4・4)
傍島 静馬(61・4・5)

《新同人》

土橋蜜(鳥取県) 中原汲香(鳥取県) 中原み
さ子(鳥取県) 淡路ゆり子(倉吉市) 広本文
子(倉吉市) 城角鶏生(島根県) 曾我部佳風
(高知県) 小沢幸泉(高知県) 中内朱坊(土
佐市) 田中叶(弘前市) 古川美津枝(大阪市)
茂見よ志子(吹田市) 田中隆二(羽曳野市)
茂理高代(米子市) 光井玲子(米子市) 寺井
東雲(大阪市) 新開千代女(富田林市) 片岡

新役員紹介

参事

熊本市

有働芳仙

智恵子(富田林市) 松本今日子(富田林市)
原仙波(東海市) 渡部さと美(大阪市) 金山
夕子(米子市) さえきやえ(鳥取県) 羽津川
公乃(鳥取県) 小林妻子(岡山県) 山本玉恵
(岡山県) 釣遊光(姫路市)

この後、質疑応答あり、午後三時閉会。

《同人総会出席者》 鬼遊・柳宏子・笛生・

寿馬・武庫坊・年代・文秋・重人・金太・敏
雀踊子・萬的・小路・栞・悦郎・吸江・正坊
太茂津・五楽庵・甲吉・叶・隆二・史好・幸
白溪子・杜的・飄云児・形水・射月芳・水客
三十四・庸佑・紫香・メ女・天笑・智子

川柳塔社常任理事会(10月1日)

出席者 栞・形水・薫風・紫香・太茂津・敏
柳宏子・萬的・白溪子・杜的・鬼遊・凡九郎
重人・小路・寿馬・智子・武庫坊・岳人・笛
生・正坊・天笑・史好

《議事並に報告事項》

▽中国吟行の旅は予定より1日延び9月24日
無事帰国、薫風団長より報告あり。

▽新しく婦人部の設立を決定。

▽62年7月5日高野山における路郎二十三回
忌・霞乃七回忌・生々庵一周忌追悼川柳大会

の題と選者を内定(一月号に発表)。

▽本社十一月句会を薫風句集「愛染」発刊記
念句会とする。

▽渥美弧秀(静岡市) 上田佳秋(芦屋市) 両
氏の同人推薦了承。

▽鬼遊会計部長より同人総会に報告する会計
状況につき説明あり。

■11月の常任理事会は1日(土)

文化とユーモアいっぱい
やお環境展川柳句会

日時 昭和61年11月2日(日)午後2時
会場 八尾西武百貨店8階西部ホール
近鉄大阪線八尾駅下車すぐ
兼題 放置自転車 西尾 栞選
ポイ捨て 深尾 吉則選
河川の浄化 高杉 鬼遊選
みどり(自然) 大路 美幸選
騒音 山本 翠公選

各題3句

賞品多数用意しています

主催 八尾市環境美化キャンペーン

推進連絡会議

61年度二賞表彰

本社 十月句会

十月五日(日) 午後五時半

メンズファッションセンター

二賞及び準賞受賞者六名が全員出席され、北は青森から南は熊本まで百名を越す盛會。花束贈呈、記念撮影といつもながら華やかな雰囲気の中に終る。

呼名賞は岩本雀踊子、木野由紀子、波多野五楽庵の三氏。

今月の月間賞は西田柳宏子氏が獲得。

(進行—天笑)(受付—年代・藤子)

(記録—射月芳・健司・山久)

出席者 栗・笛生・文秋・寿馬・萬的・悦郎・柳宏子・吸江・正坊・武庫坊・年代・五

楽庵・甲吉・叶・隆二・重人・金太・史好・太茂津・敏・雀踊子・幸・白溪子・杜的・諷云児・形水・小路・射月芳・水客・三十四・庸佑・俊子・メ女・紫香・天笑・智子・てる寿美・紀雄・藤子・笠嶋恵美子・よ志子・冬葉・柳伸・千万子・天鳳・半銭・五月・あかり・かりん・雪梢・維久子・月子・池田寿美

子・健司・康恵・佳秋・与呂志・はつ絵・いわゑ・笑女・小雪・由紀子・紀久子・東雲・勝美・満津子・道子・薫風・鬼遊・あいき・章久・森中恵美子・洋敏・外吉・ただし・柴田英壬子・白峰・光代・作二郎・古啓・英子・規不風・勝晴・三男・郁榮・美智子・節子・狸村・千賀子・楓楽・山久・美代子・度・柳影・愛論・和子・みつ子・岳人・白兔・白洋・頂留子・登志代・花村・亜成・春蘭・恵子・寿子・一二三

席題「体力」

高橋古啓選

ほかほか弁当でつけた体力怖くない
姑の体力漬け物石をもちあげる
櫓山へ行く体力は残しとく
体力が時々アホなことを言い
汗ばかりかく体力を認めよう
体力を残し脳死の海およう
星が流れてやがて体力が落ちる
虫すだくぐらいの体力なら出せる
体力で脳の隙間を埋めておく
体力が無くても女従いて来る
体力の限界ロボットから貰う
体力のあるうち遺書を書いておく
体力が気になる枯葉散っている
体力つけれ操り人形じやあるまいし
体力のかきりロックを狂演す
体力を持て囃されて綱を引く
体力の無いのが刻む墓の文字

三男 藤子 千賀子 月子 英子 由起子 重人 太茂津 楓楽 規不風 小路 藤子 智子 度 由紀子 小雪 冬葉

体力の底辺に住む飢餓の国
体力も消え群衆も消えてゆく
ゲートボール出来る体力感謝する
体力の限り端端潔し
体力回復毒舌麴えり
体力を使い果した蛙の群
顎をしゃくするだけなのでもてあます体
体力の限界という矢をつがえ
体力がありそうなので黙つてる
スッポンに借りた体力信じきり
体力測定女を愛しとおせるか
体力は風にまかせせる秋ざくら
犬散歩させる体力ぐらい有る
ぎりぎりの体力ベーターベンピアノ
五角ではない体力もあやとりも
いがみの権太の眉が動いている力
南瓜を切るのに体力試される
体力で売れぬ原稿紙を理める
魚の行商坂で出逢うたマラソン選手
蛇口をひねる体力は残つてる
体力の雌かまきりは今朝死んだ
体力をつける卵が古かった
体力を無駄に使つた漂流者

五楽庵 健司 白溪子 はつ絵 道子 康恵 白兔 水客 いわゑ 月子 郁榮 森中恵美子 白溪子 白兔 健司 道子 森中恵美子 作二郎 健司 作二郎 章久 古啓 森中恵美子 選 三男 紫香 萬的 健司

席題「急ぎ足」

森中恵美子選

急ぎ足になるのは里に向いた足
急ぎ足義母のいのちがもつ様に
急ぎ足女に少し隙が出来
急ぎ足病院の窓しまつてる



二賞選考委員と喜びの受賞者

(前列) あかり・康恵・五楽庵・白溪子・薫風
(中列) 岳人・俊子・葉主幹・千万子・天笑
(後列) 智子・史好・鬼遊・太茂津・紫香・柳宏子

割り切って真直ぐ歩く急ぎ足
疑えば二人に冬が急ぎ足
還暦の急ぎ足なら追いつける
約束を忘れた鬼の急ぎ足
急ぎ足いつも情けに飢えている
急ぎ足何か良いことあるらしい
急ぎ足の看護婦さんへ夜が冷える
時刻表へ少うしせかす母の足
駆け足で登ると亀が待っている
愛が胸からあふれて急ぎ足になる
彼岸花の道を急ぐは泣き女
燃えつきねば女へ冬は急ぎ足
急ぎ足だんだん疑い深くなる

太茂津 三つ子 武庫坊 美智子 藤子 正坊 萬的 雀踊子 五楽庵 金太 千賀子 千賀子 太茂津

急ぎ足で行かねば米が売り切れる
雑踏を急いで抜ける理由一つ
ろくでもないところへ向いてる急ぎ足
急ぎ足駅で記憶が白くなる
砂のような女で急ぎ足になる
四天王寺辺りの亀は急ぎ足
急ぎ足他人の椅子にけつます
言い訳はとも苦手な急ぎ足
美しい後姿が追いつこう
造反の足は急がさねばならぬ
急ぎ足母になる子に花買いに
急ぎ足になって美しさが目立つ
急ぎ足いくたび毯を見失う
ジョーカーがポケットに無い急ぎ足
急ぎ足でやつてくるのは葬儀屋か
急ぎ足くぼみにあつたサスペンス
足早に歩いてはうすきを鳴らして
急ぎ足お百度石は陽の匂い
均等法に馴れぬ女の急ぎ足
敗けそうて花曼陀羅を急ぎ足
急ぎ足のうも今日も捨ててゆく
急ぎ足ここらで周り見直そう
急ぎ足誰が待つのか酔芙蓉

兼題「青」

西山

幸選

郁榮 月子 天笑 悦郎 白兔 岳人 古啓 天笑 外吉 白洋 作一郎 水客 由紀子 重人 郁榮 道郎 悦郎 水客 作一郎 いわゑ 由紀子 古啓 史好 森中恵美子

しぶ柿の青姉さんの恋に似る
輪になって仰ぐ青空あたたかい
自転車走ると青い風になる
うらやまし青がまだまだ似合うから
きみの愛求めて青い湖にゆく
秋風に青い炎となる嫉妬
空の青折り目正しく背伸びする
告白の手管も知らず青い恋
くたびれて青い日記を読み返す
青空の下で自分を偽れぬ
登校を拒否して青いまま熟れる
どんぐりの青さは騙すこと知らず
青い果実がしほんで見える月明り
木魚でも叩いてみたし空の青
枝豆の青かしこまる大ジョッキ
青い花抱いてお嫁に行くつもり
青竹を踏んでまだまだ恋をする
夫には済まぬと思う青い炎よ
青い海無口になった裏切れぬ
十和田湖に浸せば青くなる素足
青空へチョーク一本あればいい
亡母の海青い深さに溺れたや
限りない深き宝石の奥青む

吉田笑女氏（宝塚市）より
金一封拝受致しました

川柳塔社

千万子 かりん 智子 与呂志 金太 みつ子 度 射月芳 天笑 楓 天笑 道子 水客 寿馬 半銭 外吉 天笑 太茂津 五楽庵 いわゑ 雀踊子 水客

可能性秘める青さへ嫉妬する
人工の芝生が少し青すぎる
信号は青だが貨車は走らない
キャンパスは青空好きと書きましよう
生きてひとり背中の青い魚を買う 森中恵美子
青い乳房が匂うてならぬ数え唄
少年の虹から青が盗まれる
湖の青さ悲しき雲は秋
もう山へ帰れぬ青い実が転ぶ
青蜜柑眩しきものはいくさうた
蒼ざめた絆に秋のランプ吊る
死ぬときの乳房はきつと青だらう 森中恵美子
まだ青いリングがこわいことを言う 萬の
絵具箱にあの日の海の青がない 幸

兼題「深い」

里小路選

恋捨てて浜辺の砂を深く掘る
深い訳聞かない方がいらしい
帽子目深に少し卑屈になっている
呪いから醒めた女の深呼吸
深々と下げる頭は別に持ち
酒とエロスつても深い仲らしい
今日のため深い眠りから醒める
いい別れしてから深くなる眠り
言い訳はやめよう傷が深くなる
言い訳をするから溝が深くなる
深追いはするなと言ったのに
罪深い男が髭を剃っている 森中恵美子
深いわけなら広島の赤い土 白兎

言い訳はしない傷口深くなる
助けてもやれない深い話聞く
ふところの深いあなたを信じよう
深呼吸それからベルを押している
情深い人で言葉飾らない
一步離れて欲の深さを見てやろう
内縁という深い情をもつ女
深酒のわけは聞かずに泊めてくれ
深いから石を落してみたくなる
深爪を切つて夜長をもて余す
色硝子うたがい深くなる女
明日見る夢に眠りを深くする
栗の実が落ちる吐息の深さにも
見かけよりすこし深い二人なり
解答が出てから眠り深くなる
深い霧みえているのは自分だけ
目の奥に深い企み持つ女
母はだまって溝の深さを埋めている
謎解けて深い眠りに誘われる
傷口の深さ黙つて旅に出る
深い悔い都会へ残しユーターン
なにげない言葉で受けた深い傷
嫉妬深い女の道の土埃
花火師の味方は深い闇である
皺の深さに苦労話がたんとある
言い過ぎて闇の深さに救われる
風向きが変わるのを待つ深い谷
罪深い男勝手な耳を持ち

節子 笛生 三男 いわゑ 白溪子 太茂津 五月 紫香 古啓 健司 健司 作二郎 天笑 英子 健司 雀踊子 智子 月子 光代 洋敏 文秋 メ女 三男 雀踊子 道子 健司 小路

兼題「魔法」

岩本雀踊子選

うどん屋の前で魔法が解けかかり
のれんをくぐる妻の魔法が今とけた
王様の魔法にかかったふりをする
魔法使い案外社会にうとくいる
極楽へ行けば魔法の国がある
かけられた魔法の中の人形たち
たわいなく積木くずしに來た魔法
美しい声で魔法の解けた森
黒く塗つて魔法がとけぬ鴉鳴く
森騒ぐ魔法使いが來たらしい
魔法から覚めたみじめな二日酔い
二級酒の魔法の方がよく眠る
魔法からさめると女になつて眠る
魔法つかい腕組みをして町を出る
魔法ではない口紅変えただけ
鬼門から魔法の術が流れ込む
月末になると魔法を使う妻
サタンから見れば正直者ばかり
その夜から魔法のとけた髪をすく
釘一本打てば魔法がとけてくる
魔法かけあなたの心縛りたい
鏡台に魔法の瓶が置いてある
札束に何度も魔法かけられる
生きてます魔法もたまに使用す
魔法ではないがピカソの絵が笑う
魔法使いの鼻にときどきなる女
遊び上手が魔法の財布もち歩く
白い皿魔法の魔法がかからない 森中恵美子
英子 寿子 萬的 重人 満津子 かりん 博子 康恵 慧梢 だし 鬼遊 三十四 甲吉 作二郎 与呂志 耕花 五楽庵 紫香 武庫坊 叶 維久子 幸 妻子 萬的 和子 度 寿子

おつちよちよいで魔法の術にすぐ確る
時々は魔法を使う妻の指

逢えるあえない魔法の切符が湿り出す

にんげんにかえる魔法が解けてくる

魔法使いの今夜は早く眠りたい

魔法使いの鼻丸々とした喜劇

自分にかける魔法を一つ持っている

目立ちたい男魔法へすぐかかる

敬老日軽い魔法をかけてれる

花束に軽い魔法をかけてある

止まり木で魔法が読んてる時刻表

魔法使いが笑うと転ぶ薬人形

魔法使いが黒い猫を飼っている

兼題「苦心」

黒川紫香選

育兒日記きつとパンダはつけている

貧乏の苦心の方がまだ楽だ

苦心する事が楽しい残り布

先駆者の苦心へ泥を塗りぬよう

極秘家伝のれんの味にある苦心

名人にその色が出ぬ柿の色

あの時はえろおましたとお茶を替え

上に立つ苦心は下にわからない

苦心した涙を知っている枕

苦心した便りを秋のポストまで

苦心談一ぱいつまる亡父の棚

はみ出すものを必死に庇うてのひらで

本當の苦心を知らぬ口が過ぎ

発明の苦心を知っているスパイ

年代

五月

古子

健司

芳子

はつ絵

道子

智子

智子

作二郎

藤子

雀踊子

芳子

耕花

小雪花

和子

俊子

外吉

柳影

三男

健司

森中恵美子

佳秋

白兎

吸江

洋敏

子育ての苦心話がくどすぎる

苦心実つてりんごが赤くなりました

鉢巻きの頭かかえている机

再婚の祝辞へみんな苦心する

阿呆になりきる苦心を妻に教えられ

赤とんぼは秋は苦心の絵の彩に

苦心した割に映えない厚化粧

苦心談半分程は聞いてくれ

逃げるのに苦心しました惚れられて

保険屋のおばはんりにある苦心

仏師の苦心が仏に近くなる

どこをどう苦心したのかピカソの絵

鏡の前に座って苦心しています

苦心して一人芝居を演じてる

トランペットからトランペットの音を出す

天ぶらを上手に揚げるのに苦心

名工も苦心の作は手離さぬ

人並な欲があるので苦心する

苦心したことだけ褒める努力賞

焼香の順に一番苦心する

乳母日傘苦心の作が売れ残り

苦心して方向オンチの案内図

ポックリと逝くのに苦心しています

面を打つ苦心鈴虫鳴き明かす

苦心さんたんして相槌を打っている

無い知恵をしぼった夜は毛が抜ける

登りつめた尺取虫が苦心する

苦心して揚げた武者風落ちつかぬ

諷云見

幸

小路

洋敏

萬的

作二郎

鬼遊

妻遊

あいき

鬼遊

雀踊子

萬的

智子

隆二

古啓

壽馬

隆二

美代子

文秋

壽馬

雪梢

太茂津

金太

作二郎

水客

外吉

柳宏子

紫香

(清記・楓楽)

寢屋川市民川柳大会

日時 昭和61年11月3日(祝)開場12時半

会場 寢屋川市立総合センター4階

寢屋川市駅より京阪バス・総合
センター前下車すぐ

柳話

宿題

「つなぐ」

「羽」

「敵」

「タレント」

「体温」

「絵」

「平和」

席題

会費

なし 各題一句・締切1時半
七〇〇円

主催 寢屋川市文化連盟
後援 川柳ねやがわ

永田俊子氏(熊本市)より

金一封拝受致しました

川柳塔社

朴虫
童

青子二

— 85 —

熱帯夜ビール汝と救世主

ひたすらに蟬も平和を叫んでる

憲法に王手がかかって思案の歩

真つ直ぐに歩いて蹟くことはかり

にた川柳会

夏の海女ひとりの胸を射る

親切が過ぎると妻に呪まれる

涙ほどの酒におはれる男ども

中心を射抜きまぐれを自惚れる

夏の夜の妻のバックがうとましい

雨が逃げようこぶように蟬の声

耳をさす言葉やんわり追伸に

少女歌手淡谷のり子が大にが手

紫陽花の花言葉にはこだわらぬ

風鈴もひるねかだり音もせず

女房の何んと思議な記憶力

合歡の花水子地蔵のおまんまに

それとなくムードを誘う花を活け

裏側を見ても草花動じない

騙されてくれた女は年上で

淡々と老女が語る男運

サハリンの風に此の頃うなされる

ビアガーデン老人組は隅で酌む

ひまわりを黄色で描くと西へ向く

岸和田川柳会

ご先祖へ語りかけたい灯をともし

指切りの小指が知ってる明日のこと

蟬しぐれ今日のスケジュール追いたてる

長寿国私もそろそろ仲間入り

靖国に詣れば心の傷なごみ

気品あるセンスが光るコスチューム

淑子

満州子

三千代

寿美

秋峰

夢酔

登栄

幸一

裕

孝華

景子

登美也

多賀子

きみえ

弘朗

寿美子

雄々

宗光

雀踊子

メ女

花子

独仙

早苗

武助報

植山

加代子

富志子

寿美子

さよ子

住生

ゆづる

一人寝が恋しくなつて齢を知る

仏壇のメロン熟れてる熱帯夜

ミナミの灯に負けた二次会三次会

越境の蔓に南瓜の実が熟れる

真夏日のひまわり自負に満ちている

三蔵と悟空に会えそう山の寺

お任せします返事の無責任

土下座した議員に土下座で物たのむ

子供等に貰った品は見せたがる

十萬円金貨は罪な光持つ

灯が揺れて半眼の僧経を読む

深水の女の背なに溜る業

甲子園球児を守る青い空

打吹川柳会

奥谷

隻眼でありたい達磨だつてある

不時着も笑つて父の竹トンボ

絵草紙の郷木刀の子が遊び

清濁をあわせ呑んでる悪い奴

それだけを思い詰めてる自動ドア

少年の孤独が屋根へ登らせる

ブランコにあかぬ幼児に陽が高い

子の恩が山より高いと今悟り

箸紙に旅情を記す旅の宿

手料理はひとくせあるが量で埋め

天気誤報今日の作業を狂わせる

夏休み此処で学力差をつける

我が心一生信じ夢を追う

しぶと花立てて仏をよろこばせ

老人会ダンス習つて若返り

言いきれ心にガンをまた溜める

希久志 柳風 規仔 紫映 とみお 美智子 佳女 たつみ 梅朗 白峰 亮二 康子 英治 吉朗 みおき 志づ子 孝美 節子

追つよりも追われる立場血をあびる

逃げ道をあけて追うのもお人柄

虹色を余白に探す冬の坂

ワンマンな父だが威力だけは買つ

許してはもらえぬことを知って言う

一夫一婦の煩惱なれば許される

妻の留守家中探す認印

許しても闇の深さがあるばかり

金の威力を知らない人だから怖い

煩惱が消えるその時から仏

威力などない母さんの温い膝

子の欠点言わず理想の嫁探す

おろきが一匹ないて秋を告げ

割り箸で杜での噂を摘み上げ

輪廻転生自然の威力には勝てぬ

仏にはなれぬ女と歩く道

いちばんに秋を見つけてつばめ去る

話相手のほしいとんばがついてくる

探すのは止そう俚せそこにいる

暑中見舞のハガキが残つたまま残暑

仏にも鬼にもなつて意見する

氣に病んでスランプますます深くなる

偉大なる威力女の目のうるみ

絵はがきになん秋を探しに旅に出る

許し乞ふ事のみ多く歳重ね

仏足石まあるい母の背なに似る

探しものだんだんふえて老夫婦

こころよい汗夕焼けに許される

卒都婆小町謡うて詩の秋しみじみと

だらしなく許してしまふ苦勞人

雄々

弘朗

春子

かすみ

静子

正一

佳秋

幸

三男

太茂津

笑女

登志代

春蘭

光代

園歩

きよ子

幽香

米朝

寿馬

諷云児

白溪子

武庫坊

陽露子

よ志子

杜的

一郎

はつ絵

千世子

年代

仏さまにナリハタ何にも言わんとこ
万札をあげたら極楽行けますか
また一人仏の籍へ長寿会
夏が好きで海のアルバム探している
仏にも商才あつて伽藍建つ
威力などないのに人がよつてくる
夏の花仏の好きな花ばかり
びっくり箱の威力が少し色褪せる
許されて許して夫婦の長い道
仏壇の花がしおれて妻が病む
寡婦という名に許されぬ事ばかり
サイフォンでコーヒ沸かす日のゆとり
腹の立つことは忘れてヨコになる
許さねば海へ海へと娘は急ぐ
恋人を許して少年島を出る
許してや許してやだけの人だった
居るだけで身の引きしまる人があり
今日のさち麦茶のかおる夏の朝
父の靴敷章もなく古ばける
滝みどり仏陀化石にしてしぶく
何不足あるのか猫もしやべらない
澄んだ空気に朝の並木呼吸する
小型機が老いの背筋を寒くする
一幕がこんなに長い見合いの日
スッポンやまむし食べてもしんどいな
酔つて来たババへ坊やの「ハイお水」
夕立に夜店の金魚騒ぎ出し
人生の迷い易者に覗かれる
花屋から今日は哀しい花を買い
皆勤賞月一回の出席で

凡九郎 保蔵 伊三郎 郁栄 よし津 江美 君子 札子 いわゑ みち子 芳子 紀雄 英子 和友 勝紀 暢子 ノブ 紫香 天樹 しげお 半歩 市雄 房子 良征 一進 新造 歌子 芳子 芳仙 曲ん手

病室で栗三つ手に秋便り
利子下が眠るひつり閑と老夫婦
静かに馴れて小犬の寝言聞く
もつ一ヶ月待とうさんま安くなる
つかの間を同じリズムでバスにゆれ
裸して仏師老いてもなお刻む
一言の威力私を追いつめる
たこ焼屋の角を曲がれば水掛不動
奥の手をちらちらさせて出す威力
曼陀羅の一つ一つに住む仏
たすねても仏は何もおっしゃらぬ
恩受けた人の表札探し当て
弥勒菩薩に惚れて毎日画家が来る
喜劇がな父の威力が背を伝う
カーフェリー哀愁もなく港出る
くもの巣を見つめる時もあつてよし
Y・F・C川柳会 人見 翠記報
今日のこ今日一日で足れり山頭火
〆縄に那智の御滝はしぶき上げ
遠く近く縁を縫うて滝の音
寝かしてつけてそつと二人抜け二人抜け
エテ公に弁当取られた滝の前
滝音に揺られる燈明不動尊
夫婦愛ドラマを妻が泣いて見る
夏が来て夏が終りぬ甲子園
Y・F・C川柳会 人見 翠記報
人形と部屋で末っ子春の雨
そうつつも仏顔などして居れぬ
病欠をしてみたいと孫達者
六十路来てまだまだ若い秋鏡
敬老の日善男善女高野山

博子 眉水 千秀 勝美 俊子 照子 百合子 作二郎 散歩 伊升 惠美子 三笑子 水声 美幸 萬的 紫香 翠記 翠記 泰州 房子 節子 翠記 節子 泰州

庭の主いすこへ引越し蟬の声
役に立つ事もあると又棚へ
散策の海辺の町の遠花火
川柳ねやがわ 高田 博泉報
団欒のひとときに思つてきくとを
ばあちゃんが一番小さい背くらべ
泳ぐ気なく砂にたたずみ何思ふ
箱庭の砂のトンネルすぐくずれ
一言がナイフの如くつきささる
筆箱のナイフ削ったあとがさかい
砂を噛む思いもあつた女下駄
手話屹度楽しい話題だと思つ
朝昼晩コーヒはカップ替えて飲む
一気飲み医師にバリウム急かされる
九時からのバート白粉たきつけ
同情と欲とでチャリテイショーへ行く
病院の玄関でする言い逃れ
情事には程遠く居る紙コップ
冒険は木から落ちてから止める
失言のテープは容赦なく廻る
シーソーのリズム夫婦はこのように
むつかしい訳は聞かないお味噌汁
雨宿りさせてもらったお賽銭
絵日記のポートに父と母が乗り
モトエ 紅葉 房子 千鶴子 なつめ 紀代 光子 春子 曲ん手 白溪子 杜的 創吾

佳句地10選 (前月号から)

春城武庫坊選

道子 眉水 鼓城 正一 千代三 千万子 かずお 妻子 房子 寿恵

鉢巻で米価を叫ぶ田のかかし
 指宿の砂に埋もれた老いの旅
 三分を測って生きたる砂時計
 盆栽の砂は優雅に生きている
 生来の鈍足氣にせぬジョギングで
 特訓へ図太い奴がしがみつく
 欲しいもの買っただけ男の百貨店
 病身へ一寸涼しい夏嬉し
 特訓と美名使つて部下しこき
 山男のナイフに錆が見だらぬ
 お土産に買った小刀叱られる
 ハネムーンその特訓は誰がする
 特訓の綱をくぐって生き残り
 茶器売場だれが買うのか二百万
 暗号のような電話で足りる母
 砂浜で掘りおこしてる数え歌
 夕焼の砂場に母を待つ独り
 甲子園我が子が宣誓してる気で
 フルコースナイフ一本残ってる
 ひらひらと妻が出かける百貨店
 屋上と地階へ行った百貨店
 星の砂夢は夜空をかけめぐり
 砂時計並べて娘病んでいる
 三越をまるごと買って包みたい
 歯こぼれは我が儘だった日のナイフ
 進物は三越からと決めてある
 特訓に堪えた根性買いてみる
 新人類専用新館の百貨店
 蟻地獄何もなかった様な砂
 特訓にヤングパワーのいつ気飲み
 ああ青春スロービデオをもう一度

松庄 勝美 弘生 眉水 勇太 おさむ 菜月 藍子 波留吉 君子 敏夫 速水 あやめ かすみ 光子 シマリ 一章 一笑 一途 よしひろ まさお 頂留子 冬葉 光夫 晴風 三郎 博泉 英壬子 亜成 亜也 鉦平

落ちこぼれ防ぐ特訓親が受け
 念仏の斜めうしろにだれが坐す
 砂に字を書いて女は返事待つ
 掌から砂こぼれて若さ戻らない
 特訓に負けた息子と風呂へ行く
 砂風呂に並ぶ生首笑ってる
 なにもかも悟ったつもりが寝つかれず
 月見草月に逢えたかもウツカず
 惚れている男ではない顔で呑み
 土壇場に特訓の汗生きている
 いい話果物ナイフが聞いている
 熱鬧へ両監督の静と動
 堺川柳会（九月句会） 河内 月子報
 膝の出したスボン気楽な定年後
 こんな時図太い妻がありがたい
 将米の布石にまいておく寸志
 黙秘権デカの飯まで平らげる
 姑さんに図太いところ見せておく
 隙のない男のチョンボ待っている
 花を買うほどの寸志を野仏に
 やつちや場の女で威勢よいズボン
 打ち水を逃げるズボンが踊り出す
 筋のないズボンでナウイ秋になる
 逢うてきたその手で主人出迎える
 税務署の椅子で漫画を読んでいる
 どたん場で図太く笑うのは女
 まだ借りがあるのに無心言うてくる
 おとほけのボーイズさりと隙はなし
 叩いても図太い馬は走らない
 図太さの影に細かい思いやり
 ズボンから足が抜けない午前さま

吉度 入仙 麗水 敬山 亜純 あいき 小路 柳宏子 紫風 薫風 紀美女 楓楽 柳太 月子 天笑 作一郎 幸伸 柳右子 外吉 八重野 節子 一三三 千方子 東雲 半雪 小

川柳あしなみ会 創立30周年記念

川柳大会

日時 昭和61年11月9日(日)11時開場
 会場 N T T姫路しらさぎ会館2階
 姫路市北条二四
 国鉄姫路駅南口より南へ歩10分

題と選者

「足跡」 植村客遊子選
 「涙」 阿萬 萬の選
 「参考」 泉 梨花女選
 「洪滞」 松川 杜的選
 「年功」 行吉 照路選
 「貴重」 土田 欣之選
 「燃料」 両川 洋々選

賞 費 一、〇〇〇円(投句料五〇〇円)
 各題3才と総合二十位まで
 懇親会 会費四、〇〇〇円
 参加希望の方は10月末日までに
 〒672姫路市飾磨区矢倉町一 54
 保西岳詩まで

投句 出席できない方は11月5日必着
 投句料(切手可) 添え左記へ
 〒671-12 姫路市勝原区宮田二六三 22
 神原 拍秋

明くる朝おまけの金魚死んでい
流される質で踏ん張るふくらはぎ
約束をさせて花火を買ってやる
父と子のきずな花火はたとある

葉の花句会

高杉

鬼遊

若き日の顔を鏡に忘れられ
てこぼこの鏡が顔によく似合う
文明にびっくり出土した鏡
自己暗示うぬばれ鏡にかけてみる
化けなくつちや今朝も鏡の世話になる
その気兼ね病気に毒と受け流す
病んで守る毒牙は他人に見えられぬ
身を守る毒牙は他人に見えられぬ
毒草というには花が可憐す
毒づいてセールス強く扉閉め
毒舌は脆い背伸びの上にある
やんわりと妻の毒氣にあてられる
まっすぐに私に帰って来た毒矢
毒づかれ昼顔の咲く海に来る
ひたむきな愛紅花に賭けた人
華やかな花火に浮かぶ白い杖
花火の輪ビアニッシモで消えてゆき
朦朧の頭を辞書が助け船
花の名を孫の辞典で探し出し
百科事典期待はずれの子に育ち
アチャラ語はもうあきらめて辞書も見ず
ある終焉じつと見ていた褪せた辞書
ワープロで漢和辞典が生き返る

千香子
周子
愛子
文子
当代
千枝子
孝子
千秀
みね
鉄治
保郎
百合子
靖子
忠昭
桂香
つゆ子
幸子
和子
重次
茜

浮き草が追いつめられる俄雨
野仏にがんばんなさいと見送られ
石童の悲話を伝えて苜蓿寺
心にも時とき欲しい換気扇
冷蔵庫満腹にして孫を待つ
宿題の半分まではよく進み
貧農を支え立てる細い脚
平日の一割安に踊られ
子に残す足跡だから休まれぬ
招かれた猪口に苦口封じられ
進み事だけしか知らぬ父の貨車
老いらくの線も困いもいらぬ恋
七敵に構えて進む男靴
正確な答が寒いコンピュータ
胎動と話す編む手を休ませる
主役より端役の方が手を貰い
ビツタリの役を貰うた縁の下
芯一つ守って女ひとと居る
まだ役に立って居る気の靴を履く
伸びる子へ進めすめと父の旗
父の行く軍手の安い店がある

たけよ
美代子
正己
巴子
敏子
克己
こふゆ
睦子
みさえ
ひでの
寛平
直二
寿恵子
はるみ
はじ芽
やよい
地佳平
玉恵
妻いさむ
耕花

男下駄二足並べてひとり住む
甘い誘惑地獄の使者と露知らず
生きるのもひとり死ぬのもひとりなり
大志抱き眠る虎のままで老い
がらくたであつても子供供の貴重品
甘い話持つて地獄の使者が来る
よく食べて新人類はよく眠り
地獄でも何でも受けて立ちましょ
電話帳ひとりひとりが集められ
喪服脱ぎ女は揚羽蝶になる
貴重品だけは地獄へ持ってゆく
よたよたと仲間外れの蝶だらう
病む心かけ替えのない貴重品
地獄では遊び仲間が待ち受ける
屑屋にも売るものがないひとり居る
眠りから覚ますと怒っている埴輪
野仏の慈顔へ蝶も気を許す
お隣もたしかひとり聞いてる
喜劇終る静かに眠る父の墓
君ヶ代を素直に唄っている一人
田高が地獄極楽浮き彫りに
あやしげな貴重品を軽く持つ
入口で妻と別れて来た地獄
蝶が舞うおんのやかたは花ざかり
影がある僕もひとりではないナ

佐代子
岡芳子
陽露子
鬼遊
柳仲
鬼遊
柳宏子
頂留子
蕉露
その
春蘭
律子
健司
雀踊子
喜風
シマ子
眉水
悦郎
信治
冬葉
美幸
勝美
射月芳
弥生
章

水車水の重さを楽しんで
炎天下休まぬ蟻に教えられ
罪一つクラスの底に埋めておく
宿帳に残しただけの仮の妻
夏の絵に炎えるカンナノ赤を添え
一貫清水碑から師の声聞こえそう
お喋りに話の芯を置き忘れ

千香子
周子
愛子
文子
当代
千枝子
孝子
千秀
みね
鉄治
保郎
百合子
靖子
忠昭
桂香
つゆ子
幸子
和子
重次
茜

浮き草が追いつめられる俄雨
野仏にがんばんなさいと見送られ
石童の悲話を伝えて苜蓿寺
心にも時とき欲しい換気扇
冷蔵庫満腹にして孫を待つ
宿題の半分まではよく進み
貧農を支え立てる細い脚
平日の一割安に踊られ
子に残す足跡だから休まれぬ
招かれた猪口に苦口封じられ
進み事だけしか知らぬ父の貨車
老いらくの線も困いもいらぬ恋
七敵に構えて進む男靴
正確な答が寒いコンピュータ
胎動と話す編む手を休ませる
主役より端役の方が手を貰い
ビツタリの役を貰うた縁の下
芯一つ守って女ひとと居る
まだ役に立って居る気の靴を履く
伸びる子へ進めすめと父の旗
父の行く軍手の安い店がある

たけよ
美代子
正己
巴子
敏子
克己
こふゆ
睦子
みさえ
ひでの
寛平
直二
寿恵子
はるみ
はじ芽
やよい
地佳平
玉恵
妻いさむ
耕花

三幸川柳教室

桜井

千秀報

水車水の重さを楽しんで
炎天下休まぬ蟻に教えられ
罪一つクラスの底に埋めておく
宿帳に残しただけの仮の妻
夏の絵に炎えるカンナノ赤を添え
一貫清水碑から師の声聞こえそう
お喋りに話の芯を置き忘れ

千香子
周子
愛子
文子
当代
千枝子
孝子
千秀
みね
鉄治
保郎
百合子
靖子
忠昭
桂香
つゆ子
幸子
和子
重次
茜

浮き草が追いつめられる俄雨
野仏にがんばんなさいと見送られ
石童の悲話を伝えて苜蓿寺
心にも時とき欲しい換気扇
冷蔵庫満腹にして孫を待つ
宿題の半分まではよく進み
貧農を支え立てる細い脚
平日の一割安に踊られ
子に残す足跡だから休まれぬ
招かれた猪口に苦口封じられ
進み事だけしか知らぬ父の貨車
老いらくの線も困いもいらぬ恋
七敵に構えて進む男靴
正確な答が寒いコンピュータ
胎動と話す編む手を休ませる
主役より端役の方が手を貰い
ビツタリの役を貰うた縁の下
芯一つ守って女ひとと居る
まだ役に立って居る気の靴を履く
伸びる子へ進めすめと父の旗
父の行く軍手の安い店がある

たけよ
美代子
正己
巴子
敏子
克己
こふゆ
睦子
みさえ
ひでの
寛平
直二
寿恵子
はるみ
はじ芽
やよい
地佳平
玉恵
妻いさむ
耕花

大原川柳社

土居

耕花報

長生きのテーマまだまだ六十代
円満で無い日もあった五十
長生きをしてもよかった祝い唄
四季の旅気ままがにくい一人旅
糸切った風に気ままな空がある
長生きの母ふる里の灯を消さず
我を捨てて共にあつさり妥協する
秋を見にいがをやぶって実がのぞく
さわやかな朝をはだしの宮参り

たけよ
美代子
正己
巴子
敏子
克己
こふゆ
睦子
みさえ
ひでの
寛平
直二
寿恵子
はるみ
はじ芽
やよい
地佳平
玉恵
妻いさむ
耕花

三幸川柳教室

桜井

千秀報

水車水の重さを楽しんで
炎天下休まぬ蟻に教えられ
罪一つクラスの底に埋めておく
宿帳に残しただけの仮の妻
夏の絵に炎えるカンナノ赤を添え
一貫清水碑から師の声聞こえそう
お喋りに話の芯を置き忘れ

千香子
周子
愛子
文子
当代
千枝子
孝子
千秀
みね
鉄治
保郎
百合子
靖子
忠昭
桂香
つゆ子
幸子
和子
重次
茜

浮き草が追いつめられる俄雨
野仏にがんばんなさいと見送られ
石童の悲話を伝えて苜蓿寺
心にも時とき欲しい換気扇
冷蔵庫満腹にして孫を待つ
宿題の半分まではよく進み
貧農を支え立てる細い脚
平日の一割安に踊られ
子に残す足跡だから休まれぬ
招かれた猪口に苦口封じられ
進み事だけしか知らぬ父の貨車
老いらくの線も困いもいらぬ恋
七敵に構えて進む男靴
正確な答が寒いコンピュータ
胎動と話す編む手を休ませる
主役より端役の方が手を貰い
ビツタリの役を貰うた縁の下
芯一つ守って女ひとと居る
まだ役に立って居る気の靴を履く
伸びる子へ進めすめと父の旗
父の行く軍手の安い店がある

たけよ
美代子
正己
巴子
敏子
克己
こふゆ
睦子
みさえ
ひでの
寛平
直二
寿恵子
はるみ
はじ芽
やよい
地佳平
玉恵
妻いさむ
耕花

長生きのぬくい家族の手に抱かれ
虫が鳴く初秋の風にひとり酔つ
核家族ままに暮す若夫婦
野仏にいとし祈りの虫が鳴く
長生きへ政府年金悲鳴あげ
あつさり未練たち切る発車ベル
虫が鳴くそぞろ昔を思ふ夜
句帳手に留守居の夜に虫が鳴く
川辺の夜道にぎやか秋ぞ知る
栗のいがゆれて小さい秋みつけ
部屋の隅ささやくように虫が鳴く
長生きはあなたと一緒にの方がいい
年とれば円満こわすぐちが出る
長生きの元氣は孫とけんかもし

京都塔の会
松川
杜の報

はる代 吉野 百代 ヤス子 林蔵 よし子 千里 竹乃 武衛 義良 雪路 節江 延子 梅園 明朗 弘生 諷云児 紫香 和友 栄 達子 美枝子 幸 芳子 年代 花代子 白漢子 杜的 巨詩 敏正

血筋からひとりみ出すコメディアン
母なれば満座のなかで抱きしめる
焼香の女が謎を置いて去に
ほはえみの遺影に謎はとけぬまま
伝統と謎をひそめて湖水の青
謎めいた暮らしが女を輝かせ
ゴミ箱に女の謎を捨てておく
モナリザが笑うと謎がとけてくる
行間の謎も焼いてる古手紙

東大阪川柳同好会 齊藤三十四報

ジョッキより猪口が似合いの父の唄
山霞む今日は時雨があるらしい
石舞台とこの山から運ばれた
山白みさあ働けと陽が昇る
山越えた所に浄土あるのかも
弘法に手を引かれ来た高野山
有りそうな山の向うのユートピア
山二つ橋桁にして虹の橋
まだ上があるから山は笑わない
明日登る山へ一足はやい夢
ふるりの山に似ている山が好き
山を見た技師トンネルを考える
山男山の掟に逆わぬ
人妻と山へ登ると稲光り
山男山のマナーを知っている
山で死んだ息子を馬鹿だともえない
山伏の法螺貝大峰に活気つき
均等法へ大峰山は横を向く
おしほりで顔中拭いてまつくろけ
やけくそで踊っているのか阿波踊り

川柳わかやま 堀端 三男報

求芽 水客 飛鳥 英子 美穂 葉子 白李 武庫坊 はつ絵 綾珠 曲手 愛論 金太 三十四 章久 然坊 柳影 弘生 湖風 外秋 雀踊子 喜風 律子 春蘭 勝美

軽石の愚痴同情の余地があり
人生や先の読めない石を積む
金魚鉢になじむ小石に甘んじる
城跡の石の深さと対話する
石を積むもうい皆に倦きもせず
注意書を読むと自信がわいてくる
この辺で折れて出るか子に読まれ
読み終えて女不倫を考える
海に身を浮べて聖書読んでみる
顔色を読んで泣き声変えてみる
一冊の本読み切った安堵感
読んでいる振りで聞き耳立てている
嘘ひとつ昼の鏡に読みとられ
野良犬の目になって読む顔のいろ
窓際の椅子で顔色読んでみる
ところどころ読んで歩調合わせとく
世話買うて荷の重すぎを少し悔い
世話役でいつでも旗を振られる
世話になる病の床で子を案じ
風呂上がりやっこ枝豆世話女房
菊咲いて世話のくだりを聞かされる
息をしていますかと世話焼きな
仲裁にて世話やきが火傷する
お人好しきされてお世つかい
巻き過ぎた捻子をゆるめる骨休め
駅弁も楽し夫婦の骨休め
骨休め別の私と会ったために
日焼けした団体様の骨休め
骨休めしたいピエロの赤い鼻
骨休めしても地球はまわってる
うたた寝の妻を許した骨休め

白光子 栄美子 輝子 寿子 郁久 山久 万壽子 萬太 信子 隆積 正博 美智子 千代 稚代 光代 幸 登志代 公子 道夫 英彦 天彦 信秋 紀美女 狂虎 克子 正子 緑良 芳朗

— 92 —

駆け引きを知らぬ男のドンコ節
 ばしや馬をひっぱる妻の壺がある
 潮時に引いて舞台へ香を残し
 昭和史の暗き引金ひいた指
 引き潮を待つておとこが立ちあがる
 孤児やつと祖国の老母に手を引かれ
 かたつむり模索の糸を引き続け
 渚から見つけた貝に恋をする
 思案して一気に開く貝のふた
 むつつりと思春期口を貝にする
 野望みな潰え男は貝となり
 少年を叱れば貝になりすまし
 逃げる術知らない貝が口閉じる
尼崎尾浜川柳会 **春城武庫坊報**
 根まわしのために名刺を配つとく
 巡り逢い思いシルクロードを巡る旅
 お茶の間でシルクロードを巡る旅
 四国路を巡る二人の遍路杖
 お守りに古い手紙を持っている
 健康書読んで不安に取りつかれ
 日曜を涼んでくるとパチンコへ
 パチンコの玉に人生縮図見る
 ポケットでパチンコ玉一つ光ってる
 添乳する妻が少しし乱れてる
 都合よく自分売込むタレントさん
 完全な御都合主義の空威張り
 欠勤の都合はいつも家事都合
 好きな道都合をつけて今日も行く
 金策の都合つかずに橋渡る
 都合よく娘の浴衣孫に合
 風向きの都合で箸が重くなる

とみお 隆風 喜享志 まさ子 螢 洋々 風人 きみ子 恒夫 八重子 露杖 としを 由多香 江美 上つみ 十四郎 札子 貞吉 弘治 武庫坊 寅之助 紫香 たか すすき 佳秋 文人 良征 中沢 牧郎

大口を叩いて都合悪くなり
川柳後案 **井上柳五郎報**
 泣き言もお盆の土産に里帰り
 釣糸の引くまでみち草許される
 夕焼け小焼けの道草がないアスファルト
 腹を決めとこ吹く風が民割論
 票田の壁厚かった米価審
 新人類大正生れに解りかね
 ファミコン熱中している生返事
 ファミコンしか熱中するものないかな
 熱中癖熱年なっても糞ん縄
 傷ついて無言で熱中する男
 子育てに熱中明日を信じよう
 切り換えは違いが真面目が取り柄です
 切り換えができぬ頭で夜が長い
 やばいなあ酒の話に切り換える
 ほのぼのを求めて汗だく帰省旅
 再会にはほのぼの浮かぶ幼な顔
 ほのぼのと嫁の情が肌にふれ
 ほのぼのとしたものがある左遷の地
 休まない母で明日の米を研ぐ
 サングラス夏の光に負けそう
川柳塔まつえ(九月例会) **恒松町紅報**
 満ち足りた世に発明の母がない
 親も子も発明向かぬ脳ばかり
 発明の裏で自然は消えて行く
 厨房で発明ママは腕振る
 発明にこつて世間がうとくなり
 特許権とれば発明者と言われ
 発明は平和の鳩に託したい
 変人にされ発明の鬼となる

貞男 番茶 鮫虎狼 博友 進 恒洋 哲郎 中健 信善 柳五郎 照路 玉水 健一 進平 草風 吟平 紫峰 秋月 桃風 拓治 友美子 ノブ 愚童 雪美 きみえ 雄々 代仕男

青年のこたえ帰らぬ山を恋つ
 青年よ水中花の愛には溺れまい
 青年に都会は麻薬の貌に見え
 青年の樹すくすくと天をつき
 青年期バイトの金が辞書に化け
 青年よ故郷へ戻れ青い空
 青年の若さでない出来ぬ技
 ガラス戸を開けて世相の裏覗く
 ガラス張り八方美人住むところ
 訪れる秋を知ってるガラス窓
 夏バテにガラス食器の知恵を借り
 幸せに見える都会の色ガラス
 ギヤマンの花器は眺めるだけいい
 ガラスようやく真珠の夢あきらめる
 淋しくてガラスを拭いて待っている
 何事も丸く納めて年の功
 漬物に生かされてる年の功
 年の功目もり使わず調理する
 年の功急所を知って針をさす
 照る日曇る日浮き心な秋の空
 秋空や電車をおりる女連れ
 秋空へ想いをやると雨落とす
 中曾根の自信過剰や秋の空
川柳高知 **川竹**
 仏壇の前では嘘が出てこない
 百姓の苦勞を知らぬ食へ残し
 晩酌の早寝の分早く起き
 子供には見えない顔をバーに捨て
 比べてはならぬと思う子の寝顔
 お下りを無駄なく着せて子沢山
 余生とは農家の辞書に見当らず

文子 多賀子 鳳人 みえ 育郎 美治 翠星 静恵 貢範 静翁 ちかし 秀子 市雄 昭三 長根一 与根一 静江 巡歩 舞吉 鶴丸 紫叻 叮紅 松風報 功 菊野 竹萌 孜郎 春枝 成美 かず子

習い事血は争えぬ役者の子

順番を待てず妹先に嫁き

順番を徹夜で待った負けゲーム

面接へこんどは俺と言う動悸

軒下にお世話になった新奥地

十年のお世話になった新奥地

順番に逝かなくてよし長寿国

焼香に順番があるお葬式

尼崎いくしま川柳会 山崎

害ばかりではない石鹸手を洗う

私の部屋です私の色紙吊る

地図だけで終った母の旅プラン

いなりのおなたについて行くプラン

花菖蒲にこった水へ咲き競う

熱帯夜女忘れた窓がある

定年後壁ぬりかえて晩夏の詩

真夏が好きで外国船を撮っている

念力も抜けて水鼻たらしけり

氷屋に官許の旗が立っていた

足音を忍ばせた頃懐かしい

噴水だけで用足り帰る梅田駅

水中の高さに影が吊るされる

水中花華麗な嘘に救われる

地下で寝る国へ帰れぬ男達

地下足袋の出足をくじく俄雨

海底トンネル接点でする握手

いつからか眉根を寄せている寝顔

カラフルな水着にそまる水しぶき

もう水に流すと言った背が丸い

海ばかり描いて里の海を恋う

朝顔に今日のプランをきかせてる

弘生

千鳥

朱坊

佳風

幸泉

松風

三吉

君子報

天樹

杜的

颯云児

紫香

白漢子

正一

和友

郁榮

伊升

保蔵

伊三郎

佳秋

はつ絵

いわゑ

玉子

かすみ

春子

年代

美代子

歌子

礼子

君子

川柳ささやま

花火鳴る度に浴衣の娘がもたれ

はのぼりと可愛い浴衣が散歩する

喪の風に浴衣淋しく着る家族

宿浴衣寝るには惜しい灯のさそい

ピンビラのゆかたが踊る大男

物好きを父を責めてる綴り方

物好きが中古磨いている魅力

物好きがね言われりやほんと猫の群

物好きも居て事運ぶ夏祭り

満員車大きなお尻に割り込まれ

ビキニ着た姿鮮やか海を埋め

円満は笑い袋に詰めてある

子には子の袋へ宝隠される

胃袋へ落ちるお酒の音まどか

大袋小袋夢を子に持たせ

騙し絵を描かない父の白い足袋

川柳はびきの 田中

大荒れの記事に今更子の安否

今朝もまたスズメ待ってる残り飯

青い眼の曳子も混じる御巡行

人並に芸一筋の笑いもつ

票様に三拜九拝してくる

手を借りて白寿楽しむ昼の風呂

船乗りの寡黙に雨の長続き

夏バテにバランス崩しギヤグも出す

土用丑返り血浴びて鰻裂く

熱帯夜暴走族はかきまわす

空馳ける鳥にも縄張りありそつな

蟬しぐれ裸にかかる露天風呂

童心に動物園が呼び戻す

米朝報

越山

久恵

靖子

静子

エキオ

文平

百合子

真子

富美

久子

房子

米朝

とみ子

ゆう也

可住

法齊

隆二選

徳子

清子

淑子

末一

義一

満洲子

美子

忠宏

重樹

昇

久治

隆

白水

帰省の子井戸の西瓜も久し振り

喜びは家中分ける平和主義

完ぺきなアクセサリーに持つ聖書

歯の痛みひと月待てと予約制

泳ぐより派手な水着が眼の保養

健康で番茶も玉露のまろやかさ

歴史の里に住んで昔を忘れがち

人違い作った笑顔をもて余し

子と親の意見の合わぬ夏休み

気にすまい鳴くのはガラスの仕事かも

ボランティアの心の温み持つ絵筆

夏負けは鰻の肝も気やすめて

堀ぎわの電線借りているヘチマ

雨やどり借り傘とりもつ縁となり

定年をタンポに銀行から借りぬ

借り物の衣裳で夫婦出来る上

借りに来た膝は律儀に崩さない

涅槃西風夫に遅れて逝くつもり

叱られて後ろ姿へ舌を出し

引っこみのつかない舌も酒の上

エンマさん抜きたい舌が多過ぎる

あかんべえした頃舌は嘘つかず

茄子漬の色がおいしい嫁姑

川柳藤井寺 赤木

信じ合う裸同士の手の温み

旅の夜の火入はかない夢と消え

好物の茶漬も入歯でままならぬ

妥協してやっぱり赦していない肩

八月の鐘は除夜より身がしまり

揚げ花火下で咲いてる恋の花

相場師の仕掛花火に似た人生

蛙声

司優

繁男

志洋

トミ子

ケイ子

泰子

悦子

美代子

胡村

憲太郎

一屯

一枝

敏

吐来

比沙胡

寿美

石橋義一

シメ子

伴子

隆二

三千代

和子報

きよし

つや

須美

与呂志

吸江

ときお

志洋

折り紙に自我ひとつずつたみ込む
我が女房お茶漬だけで肥えて居り
宴会で早い茶漬に上戸の眼
素裸になると童心よみがえり
裸にもさせて見せますベン先の
内政に干渉される過去の傷
ノンキヤリア裸に過ぎて売り出すか
あくせくと何時の間にやら傘寿
野党さん犬の遠吠えまた続き
知恵の輪のようにトカゲのしっぽ解き
均等法女性に開かぬ大峰山
裸ではまさかやれない親の愚痴
孫が呼ぶ花火へヒール下げて出る
遠花火後だ先だと音談義
花火より一雨ほしい熱帯夜
ヒロシマの平和の鐘へ蟬しぐれ
家なればこそ裸でいる暑さ
甲子園郷土校消えテレビ切る
一向に泳がず裸を鑑賞し
一瞬の花火でもよい現在に生き
気にしない極楽トンボ裸んぼ
古都税の話もつかず京の街
火花見ている別々のこと考えている

駒つなぎ川柳会

里

小路報

治子 三郎 作秀 美代子 昭子 本蔭棒 祐園 秋園 かし 伴子 正人 重樹 繁男 ふみ うめ 末一 みの 麻雄 和美 雅美 彩心 清心 小路報 章 甘平 曲手 庸佑 寿美 萬葉

挑んでも女はやはり強かった
裁判所の廊下を走る勝訴幕
ぬり箸で手延べそうめんもてあまし
八月の以後を夢中で生きた島
鮎料理箸も馳走の吉野杉
成り金で挑んで見たが歩で追われ
まじないの箸に暗示を掛けられる
あの頃は夢中だったと社長椅子
サングラスはずして見えて胸の張り
挑むもの持って夏をたのしがり
非常口廊下の先を確かめる
箸箱も毎日洗って自閉症
サングラスそれから小さな秘密持つ
親日家の箸がマナーも知っている
孫が今積木遊びに夢中なり
夏バテも偏食もせぬ母の箸
風はバラ色夢中時代は束の間に
六十歳に青春があるサングラス
大臣の順を廊下で待っている
黒い話をじっと聞いている箸枕
挑戦状とともやさしい女文字
畧境が廊下通っている旅館
陰膳を大盛りにする父の箸
サングラス腹の黒さを隠せない
お若いすねを素直に聞き流す
設計ミスを鶯張りという廊下
盛りつけがとも上手な母の箸
何に夢中で炎天をてくてくと
サングラス生きているうちを楽しもう
箸袋他人行儀な顔をする
先生の恋は廊下で見つけられ

千代三 克己 弘生 射月芳 善信 志余風 規不風 柳影 東雲 花仔 新造 柳右子 文秋 幸治 浩一郎 英一 恒明 律子 八重野 重人 壮之助 笛生 好子 白兔 恭太 美津枝 智子 史好 雀踊子 節子

サングラスはずして明日を考える
挑まれて自分が少しずつ出来る
夏の味噌汁夢中になれるものがない
イヤらしい客ヨと合図する廊下
へんな外人サンで器用な箸使い
こだけの話廊下になんとある
挑むのは止そう子供眼がかたい
芸事に夢中で愛のないおんな

もくせい川柳会

田中

正坊報

美幸 凡九郎 作一郎 外宏子 柳宏子 隆二 柳伸 小路 明 博史 きく子 よし子 慶子 つえ子 房子 美祢子 富子 典子 英子 春子 隆 明吉 洋子 登代子 登志実 正坊 寿美子 女 作二郎 花村

緑地公園若さの空へ飛行雲

義理がたい男の靴がチビている

城北川柳会(前月分) 野呂

一杯のラーメン旨し足るを知る

山坂を越えて良き日が訪れる

旱天に海へ降る雨惜しまれる

経済大國財政は火の車

逝きし子に心で詫びて花を替へ

娘が嫁して家から赤が遠ざかる

祈願する母は炎暑をものとせず

留守番の猫が遊んだ毛糸玉

出来た嫁潮時と見て酒を出す

強引に過ぎたサツチャー嫌われる

母の日も父の日も無い独り居て

借金はせぬ主義通し逝つた父

青空の行く雲に乗り昼寝する

職はなれ楽とわびしき同居する

一人旅お隣さんと趣味が合い

パソルをさして女を取り戻す

団結の輪に鉢巻も血が通い

ため息にゆれる真紅のイヤリング

学びたき事のみ多くあせる日々

プロ野球雨で流れてドラマ見る

京料理舌鼓打つ京の床

忘れたままの傘取りに行く戻り梅雨

大文字火知りまへんに市も困り

盆の経短くお寺御繁昌

体ごと干したい様な梅雨晴間

爆発か幾度長い夫婦坂
急行に素通りされる里の駅
嫁叱る言葉にいつも氣を使い

右近報

静歩

寿美礼

弘生

繁子

八重

ふみ

千世子

佐津乃

久留美

仙吉郎

綾珠

喜代子

兎世

トキワ

道子

悟郎

泰世

午郎

亀男

陽子

満津子

頼一

達子

温子

静子

登志代

萬の紫香

何故見合なんかするのと新人類

全力で走った若い日のバトン

風鈴の詩情を捨てぬ母の部屋

切り札を持つと人間強くなる

言いましたいや聞かないと老い二人

女房の自画像紅を加筆する

若い色干して息子の里帰り

川柳高知(前月分) 川竹

あんなのでない役人勤まらず

出嫌いへ一升上げて押しかける

少しづつ親離れする子の無口

たて前と本音がわかる子に育ち

裏切った女の夢を見た不覚

寝たきりへ嫁の優しい匙加減

老いの坂だんだん脚にそむかれる

雑草に負けんだと畑が広く見え

大空の広さへニアミスが起り

この広い地球で二人だけの恋

結局は細かい妻に支えられ

細腕の女が生きる帆前掛

歩いたり走ったりして定期券

酒が出てしぶしぶ歩く免許証

玉砂利を歩いて神を信じよう

城北川柳会 野呂

中天の月に心を覗かれる

熱冷めて我に還つた日の笑顔

どこからか蟬の声するビルの街

弔電を打つても心落ちつかず

秋雨前線残暑の中で待ち侘びる
ハイカーの口笛風に乗る峠
良く動く妻に気兼ねをして昼寝

新一郎

麻黄

テルミ

ただし

右近

白峰

純子

松風報

佳風

孜郎

春枝

かず子

白雨

千鳥

弘生

竹萌

功坊

朱坊

草風

菊野

三吉

晚耕

松風

白峰

満津子

八重

静歩

千世子

達子

乙女逝く別れの涙ふりつづき

言いがあつさり通る負けいくさ

夏休み孫が空飛ぶ船に乗る

夏やせをしてほしいのにままならず

バスの旅隣は俳句作ってる

他人から見れば歯がゆい甘い親

やんわりと人刺す口を見て居た日

他人皆達者に見え今ほの魚り

米離れかかしも今は御用済み

ティータイム話がはずむ午さがり

嫁く娘へ一針毎に母の愛

風流を楽しみながら通り抜け

ひまわりもポーズ忘れる炎天下

こんな事知って居ります教えましょ

ゴルバチョフ日本の頭撫でに来る

ゴキブリも採集して夏休み

トラキチが話乗かえてる立吞屋

カラフルな水着ばかりの夏の海

空腹にそば一杯が調の味

天理優勝百年祭に花を添え

一日を汗と戦う作業服

父ちゃんの帰省みやげに子はたかり

言う事も背中も丸くなった父

同じ趣味持つて楽しい老夫婦

正直な夫の嘘を聞いて居る

孫が来てあれもこれもと市場籠

来て嬉し帰って嬉し孫ひ孫

寝苦しい夜へこおろぎ鳴いてくれ

もう秋が萩が静かに咲きはじめ
人事課が決めて下さる軽い首
墓参りよくお参りと蚊が迎え

寿美礼

ただし

ふみ

有佳

節子

静子

倫子

テルミ

文子

兎世

ふさ子

祥恵

カネ

弘生

悟郎

温郎

敏郎

亀男

綾珠

山久

公一

純子

明美

道子

ふさ子

よし子

とし江

泰世

登志代

文子

11月各地句会案内

	日 / 時 及 び 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 まつえ	8日(土) 午後1時半より 海峡・白い・山里	慈雲寺 松江市和多見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
川 柳 わかやま	9日(日) 午後1時より 夜長・包む・悪	児童婦人会館(岡公園内) 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
菜 の 花	10日(月) 夕6時より 鳥・穴・流れる・踏切	八尾西郷会館 近鉄大阪線八尾駅南西歩5分 八尾神社境内 〒581 八尾市弓削町南2-141 飯田悦郎
西宮北口	10日(午後1時より) 梯子・油断・自由吟	西宮中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料60円切手4枚
尼 崎 いくしま	14日(金) 午後1時半より 実(み)・喋る・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎下車南西徒歩3分 〒660 尼崎市昭和南通8丁目201 福田札子 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
もくせい 川 柳 会	17日(月) 午後1時より 散髪・生きる・つなぐ・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚市曾根下車東南歩5分 〒560 豊中市旭丘8番87-2 田中正坊
堺川柳会	18日(火) 夕6時より 粗品・揃う・相談・底	堺青少年センター3F 阪堺線綾之町西南 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
南 大 阪 川 柳 会	19日(水) 夕6時より 雑居・時価・随意・絶対	東大阪市社会教育センター2階 近鉄布施駅北へ5分長堂小学校隣 〒579 東大阪市新池島町1丁目4-14 齊藤光利 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
南海電鉄 川 柳 会	20日(木) 夕6時より 無人駅・拍手・乳	南海会館ビル内南海電鉄本社ビル地下食堂 〒542 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道(株)不動産管理部管理課 広井季雄 句会費 無料 投句料 60円切手1枚
富 柳 会	20日(木) 午後1時より 苦勞・初恋・落ちる	富田林市中央公民館 〒591 堺市向陵中町2丁駅前ビル4の6 板尾岳人
高槻川柳 サークル 卯 の 花	20日(木) 午後1時より 湯豆腐・降ろす・自由吟	高槻市民会館301号室 阪急電車高槻下車歩5分 〒569 高槻市桜ヶ丘北町3-19 辻 白浜子 句会費 500円 投句料 200円(60円切手3枚と20円切手1枚)
川 柳 東 大 阪	22日(土) 夕6時より 歴史・渡り鳥・割り勘・焼きいも	東大阪市社会教育センター2階 近鉄布施駅北へ5分長堂小学校隣 〒579 東大阪市新池島町1丁目4-14 齊藤光利 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
駒つなぎ 川 柳 会	12月1日(月) 夕6時より 忘れる・暗い・弁解・元氣	寺田町高松会館 国鉄環状線寺田町駅南口下車 南へ1丁3筋目左へ駅より歩3分 〒572 寝屋川市成田町19-28 里 小路
川柳ねやがわは市民川柳大会のため例会はお休みです。		

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円(郵券可)、各題3句以内

原稿送り先(×切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒596 岸和田市荒木町1-29-1 宮園射月芳

●募 集●

一月号発表 (11月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選
 水煙抄 (10句) 黒川 紫香 選
 愛染帖 (3句) 橘高 薫風 選
 課題吟 (各題5句以内)

「奪う」 納 糸葉 選
 「議論」 二宗 吟平 選
 「火」 新家 完司 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
 ★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

二月号発表 (12月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選
 水煙抄 (10句) 黒川 紫香 選
 愛染帖 (3句) 橘高 薫風 選
 課題吟 (各題5句以内)

「秘密」 岸本 豊平次 選
 「背く」 藤田 頂留子 選
 「野心」 中田 白李 選

★愛染帖・課題吟へは同人誌友を限らず。
 ★用紙は川柳塔社柳箋を二使用ください。

11月の常任理事会は1日(土)

定価 五百円 (送料50円)
 半年分 三千二百円 (送料共)
 一年分 六千三百円 (送料共)

昭和六十一年十月二十五日印刷
 昭和六十一年十一月一日発行

編集兼 西尾 巖
 印刷所 藤原 童心 社
 〒545 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六
 ウエムラ第2ビル202号室
 発行所 川柳塔社
 電話 (三六九) 六九一四番
 振替口座大阪 8-333368番

橘高薫風句集「愛染」刊行記念

日時 十一月七日(金) 午後六時
 会場 メンズファッションセンター3階
 東区本町一丁目 電話 06・941・1918
 地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角

兼題 「勇氣」 橘高 薫風 選
 「水面」 板尾 岳人 選
 「握る」 西田 柳宏子 選
 「ふところ」 西尾 栞 選

席題 二題 当日発表 各題三句以内厳守
 会費 五百円

★投句は柳箋(4cm×19cm)に一葉一句。
 投句料 300円(60円切手5枚)同封のこと。

川 柳 塔 社

12月の兼題 「叩く」 「頼(あご)」
 「約束」 「宴」

本社12月句会は8日(月)

「夜市川柳」募集

第6回 「指」 岩本 雀踊子 選
 3句・締切 11月末日

第7回 「艶」 西田 柳宏子 選
 3句・締切 12月末日

投句先 〒593 堺市堀上緑町二一九一
 河内天笑方
 堺川柳会

Ⅱ 編集後記 Ⅱ

☆九月十四日、竹原の川柳大会に参加した。合同句集「竹の里」の出版と山内静水古稀のお祝いも兼ねていて、川柳塔からは西尾葉主幹がお話を、私が選者を担当した。参加者三百四十名に驚き、竹原の川柳人の和に更に驚いた。昨年九月の葉主幹の喜寿金婚のお祝いの会と同じに、各自が持場持場をしっかりと守り、来会者に如何に気持ちよく楽しんで貰えるかに心を配っていた。川柳塔の和の美しさがここにもあった。静水さんの口癖に「川柳は君、情熱だよ」と言ったという、路郎語録があるが、「川柳のやさしさ」の精神も認識されなければならぬ。

☆三幸川柳教室の指導者、菅井智水庵編著「川柳にみる和歌山」が発刊された。昨夏「川柳にみる大阪」を出した時、札幌の斎藤大雄氏は、是非「川柳にみる北海道」を編みたいと書信を寄せられたが、いち早く、

和歌山が私の意に添って下さってありがたい。和歌山を愛する和歌山県人のまこと紀州犬・紀州弁まで三十余項目のバラエティーは、端的に和歌山を紹介する。☆第二回の日中友好中国吟行旅行は、充実した満足感を持って全員無事帰国した。☆田中正坊氏に総括的報告を、東野大八氏はじめ全員に印象記を頂き、二ヶ月に亘り掲載の予定である。

☆白岩文衛氏の急逝による不参は、何としても痛恨事で、改めてご冥福をお祈りした。ハードなスケージュールの疲れからか、大気の乾燥のせいから、北京から風邪を持ち帰った人は約半数に達した。それでも、第三回の旅行の実現を、紀行文を寄せられた皆さんから催促されている。

☆本社十一月句会を、拙著「愛染」の記念句会にして頂くことになった。今回はひっそりとしていたかったのでご辞退したのだが。

☆「章編三たび絶つ」との

言葉がある。表紙がすり切れる程読んで頂けることが最上の幸なので。(薫)

▼新聞を見る。天声人語や社説を読む。新聞は別に朝日に限らない。偶々、朝日をとっているだけのこと。そこにはおだやかな文章で現代の怒りが書かれている。ほとんど同感することだがどうしようもない非力を感じさせられる。

▼近ごろ大衆はおとなしくなった、と思いませんか。それは強者に対応する時だけであって、いじめ現象を見る限り弱者に対しては怖ろしいほどの怒りを見ることろができる。これは大人社会も同じようである。大人のように怒りを忘れたのでなく、怒ることは今流行らないようである。

▼畳二枚分の地価が四四五万円円になった。これは大阪市北区角田町（ナビオ阪急）の基準地価である。いくら商業地であっても余りなく馬鹿げている。関係がないと言えはそれまでのことながら、世界一高いコメ

や牛肉を買わされている、同じ国の出来ごとなのである。

▼毎朝、新聞を読んで腹を立て、怒りを覚えるのである。怒りは自由である。しかし大臣の肩書ある方が、他国の国民感情を害するような怒りは慎むべきである。肩書で怒ってはいけないのである。肩書は怒りを聞く立場なのである。

▼長生きをする秘訣の一つに、怒らないことが上げられている。長生きも大切だが、活力として私は怒りつづけたい。(き)

▼最近ごろテレビはクイズ番組花ざかりだが、その中の一つに「三角関係」というユニークながある。ゲームは三人一組で、それぞれ持ちピンが四本、一問に一木ずつ賭ける。まずAが親になり出題、Bが正解すればBの勝ち。Bが間違えればCに解答の権利が移り、B C共に答えられないとAの勝ち。ざっとこんなルールで親が一巡する。

☆問題は「インテリ」「ミ

「ハー」「尊し」「体力」四つのジャンルに分かれていて解答者は好きなジャンルを選べる。出場者はすべて芸能人。だからというわけでもあるまいが、ジャンル選択の傾向を見ていると「インテリ」が最も少ない。ところが「太陽は東から昇るが、月はどこから昇るか」なんて問題がしばしば出るがこのジャンルなのだから笑わせる。もっとも「曼珠沙華」をマッシュカと読むスポーツ新聞の文化部長がいる当世、笑ってばかりもいられない。

☆一方「ミハー」のジャンルでは「百恵さんチのペンションが清里にできまして。その名前は何？」とか、正確に答えるには、かなり「インテリジュエンス(情報)」を必要とする問題が出て、ミハーを自認する解答者を当惑させるのである。☆あれはクイズ番組であると同時に、多分パロディ番組でもあったのだらう。

橘高薫風 著

句集 『愛染』

著者の還暦を記念しての第四句集が発刊になりました。処女句集「有情」第一句集「檸檬」第三句集「肉眼」からも抄出された三十年の足跡八八〇句を掲載。
皆様の机上に一冊お備え下さい。

■作品

労働歌蟻が歌えば凄かろう
恋人の膝は檸檬のまるさかな
人の世や嗚呼にはじまる広辞苑
睡蓮は万丈光の光源よ
こおろぎのように泣いたら涅槃かな
亡母の闇この世は雨が降っています
還暦は実年の花乃始

頒価 三、〇〇〇円
(送料其)

発行所 川柳塔社

ボリュームたっぷり スタミナ満点!!

豚鰻・焼売・焼餃子



なんば戎橋筋本店
その他有名百貨店でどうぞ

TEL641-0551